

# ミッドチルダの英雄（ヒーロー）

ロシアよ永遠に

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

今日も今日とてクラナガンに悲鳴が響く。

凶悪な犯罪者。

危険に曝される住民。

しかし、碧銀の髪を靡かせ、クラナガンにはびこる犯罪者に正義の鉄拳を下す英雄が現れた！

## 目次

ミッドチルダの英雄（ヒーロー）	1
ミッドチルダの変態（マッドサイエンティスト）	9
ミッドチルダの母親（親バカ）	18
ミッドチルダの聖なる探索（デイバイン・クエスト）	1
ミッドチルダの聖なる探索（デイバイン・クエスト）	2
ミッドチルダの聖なる探索（デイバイン・クエスト）	3
ミッドチルダの空腹少女（チャンピオン）	56
ミッドチルダの新入り（ニューカマー）	71
古代ベルカの英霊（ヒーロー）	80
ミッドチルダの幽霊？（ゴースト）	91
101 古代ベルカの曾々々々々々々々々々（略）祖父（ぶっちやけグランファ）	
ミッドチルダの執務官（オーガ）	108
ミッドチルダの邂逅（ガール・ミーツ・ガール）	123
ミッドチルダの患者（クランケ）	133
ミッドチルダの暗黒英雄（ダークヒーロー）	140
☆コラボ小説・中二病でも玩具にしたい！その壺！	150

## ミッドチルダの英雄（ヒーロー）

アインハルト・ストラトス

正式名称 ハイデイ・アインハルト・ストラトス・イングヴァルト  
とりあえず長いのでアインハルトでいいや。  
ともかく、彼女について説明しよう。

ミッドチルダにある聖王教会運営のS.T. ヒルデ魔法学院中等科  
の1年生。齢にして12歳。

碧銀の髪と、蒼と紫の虹彩異色が特徴の極々普通の中学生だ。

その物静かな性格から、ぶっちゃけあまり友達はいない。

が、彼女自身友達を必要ともしない。

それは、彼女の裏の顔、と言う物が起因していた…。

ミッドチルダ中央銀行

時空管理局のお膝元、その首都たるクラナガンに構えるひとときわ巨大な銀行であり、そのたたずまいは地上本部に次いで巨大さとも言える。

というのも、第一管理世界、と言うこともあるのだが、勿論そこからあらゆる管理世界への次元港が存在し、物資や人が流れていく。そのまた逆も然りで、物と人が流れれば、それに応じて通貨も流れるもの。この中央銀行はそうしたあらゆる次元世界の為替を請け負う大本でもあり、レートを調整する場でもあるのだ。

そして、金が集まるところ…

「オラァー！早いところバッグに金を詰めやがれ！」

Vz 61スコープピオンを両手に構え、乱射する二人組の男。

響き渡る悲鳴。

轟く銃声。

早い話、銀行強盗である。

「つへへ。コイツが成功すりや、遊んで暮らせるってもんよ！」

「俺達、こうやって強盗仕掛けるの、何人目なんでしょうね？」

「知るかよ！金が手に入りやそれで良いのよ！後は知ったこっちゃねえ！」

せつせと金を詰める銀行員。

外からは管理局陸士隊。その108隊の隊長たるゲンヤ・ナカジマが拡声マイクを使い、装甲車から投降を呼びかけている。

『おめえらは完全に包囲されている！大人しく武器を捨てて投降しやがれ！田舎の母ちゃんが泣いてるぞ！』

「おとーさん…それ、言ってみたかっただけでしょ？」

『おうよ！犯人に語りかけるのにこの台詞は外せねえってな！』

何とも締まりのない父と娘（ギンガ）の会話が、拡声マイク越しに伝わってくる。

「うっせー！娘持ちのリア充がナマ言ってるじゃねえ!!」

・ 32ACP弾がばらまかれ、装甲車のセラミック複合装甲へ着弾する。が、そこは装甲車。自動小銃で貫くことは出来ない。

『ちきしょう！ウチ（108）の装甲をキズモンにしゃがって！』

ゲンヤは怒りのままに無線機をかつさらうように手に取る。

『航空戦力要請！爆撃！面制圧！』

『ナカジマ三佐!?駄目ですよ！人質の人まで…!』

『おう！高町の嬢ちゃん！おめえさんの十八番の全力全壊の定番だぜ！』

『字が違います！全力全【開】です！』

『読みは一緒だろうが！早いところ、星を軽くぶっ壊す砲撃頼むわ!』

『星の光です!!』

などと、無線越しに出たエースオブエースと漫才を繰り広げる最中、一つのざわめきが一角を支配する。

碧銀の腰まで届く長髪をツーサイドアップにし、身には白と、髪色に合わせたライトグリーンの戦闘衣装。顔はバイザーで隠されているので分からないが、体つきからして女性だろう。集まるマスコミや

野次馬、果ては包囲する陸士隊をも掻き分けて、銀行から距離を空けている包囲網の空白を歩いて行く。真っ直ぐに、

銀行の正面玄関まで、

迷うことなく、

一直線に。

『その人！止まりなさい！危険よ！』

拡声マイクをゲンヤから強奪したギンガは、停止を呼びかける。しかし、そんなものはどこ吹く風と言わんばかりに、歩く速度を変えること無く、ただ進んでいく。

『へっ！阿呆が手ぶらで来ましたぜ！』

『何イ!?手ブラ!?何処だよオイ!?どこにそんな痴女が!?』

『い、いや、武器も持たずにつて意味で…』

『……………紛らわしいんだよお!!』

進む女性へ八つ当たり気味に銃弾をばらまく。先程言ったが、セラミック複合装甲にこの程度の銃弾はほぼ無意味に近い。しかし、生身の人間に対しては充分すぎるほどの殺傷力のあるもの。誰もが血の雨が降る、と予想して目を瞑る。

「ハアアアツ!!」

しかしその予想は辛くも崩れ去る。彼女はまるで目の前を飛ぶハエか何かを叩き落とすかのように掌底で銃弾を撃ち落とした。目を瞑らずに見ていた人が後に供述したところ、

『舞を舞ったかのように回ったら、銃弾が全て落とされていた。…何を言ってるかわからねーと思うが…(ry)』

「あ、アニキー！アイツヤベえツス!!マジモンツス!!」

「っだったらー！このパイナポーで！」

強盗は懐からパイナップル―マークII手榴弾―と取り出し、安全ピンを引き抜いて窓から投擲する。それは放物線を描き、女性に向かって飛んでいく。このままでは女性がミンチになってしまう！

「旋衝波ー！」

しかしあろうことが飛んできたパイナップルを引っ掴むと、流れるように、そして見るものを惹き付けるような美しい動きで投げ返し

た。その軌道は、ビデオの巻き戻しをしているかのように元来た道を戻っていく。

「た、退避!!」

慌てて窓から離れる強盗。戻ってきたパイナップルは窓際にコロコロと転がり、その時が来た。

瞬間、破裂音にも似た爆発音が銀行と、その周辺を支配する。飛び退いた強盗は爆風で吹き飛び、ゴロゴロと床を転がり抜ける。銀行員も衝撃と爆音で条件反射で耳を塞ぐ。

「ええい！奴は化け物か！」

「子分！撤退するぞ！これだけありや、暫くは遊んで暮らせるぜ！」

バッグの半分程まで積まれた札束を確認すると、バッグを引っ掴んで裏口へ向かう。裏口には脱出用の車両が止めてある。速度にチューニングが施されているので、余程の高速戦型空戦魔導師が来ない限りは逃げ切れる自信がある。

しかし、裏口への道のりは、

遠く、

遠く、

険しいものになった。

目の前のコンクリの壁が破碎される。削岩機でも持ってきたのか、と言わんばかりに勢いよく破片が飛び散り、軽く二メートル四方の大穴が開いた。

「何処へ行くこうというのですか？」

バイザー越しながらも、その威圧的な視線はヒシヒシと感じられる。強盗も及び腰になったのか、じり…つと一歩下がる。

「女か…いだから甘い…い！」

動いたのは子分だった。懐のホルスターからコンバットナイフを抜き取る。鋭利な刃先のそれを、まるで切り裂きジャックがしていたかと思うようなヤバイ表情で、ナイフの刀身を舐める。

「俺のナイフが騒ぐのさ…貴様を…こおろおせえとおっ!!ぶるあああつ!!」

まるで猿か何かのようだ。しなやかな動きで右に左に。動きを悟

らせないように飛び跳ねて、段々と距離を詰めてくる子分。しかし、女性は動じない。しっかりとバイザー越しに見据え、仕掛けてくるであろうタイムミングを見計らう。

「シヤアアアッ！」

目の前に現れたかと思えば、跳躍。頭上からの奇襲を仕掛けてくる。子分も視線がこちらにないことを確信して、勝ったと口元をつり上げる。

しかし、

左手の手甲がそれを許さない。

ゆつくりと、世界の時の流れが変わったかのように、そして色彩が取り除かれ、周囲の色がグレーに見えた。手の甲のプロテクターが、刃の腹に添えられる。そのまま、まるでドアか何かを開けるかのように、緩やか且つ静かに切っ先を逸らした。

そして、刃の先が彼女からズレた瞬間、世界の色と時の流れが戻る。気付いたときには彼女の右掌底が顎を的確に捉える。

「ほぎゃっ!?!」

変な悲鳴を挙げて、打ち込まれた掌底の勢いで縦回転する。

ボギヤア!!

そして、女性に背中が向いた瞬間、硬い靴底に蹴り飛ばされ、吹き飛び、見事なまでに壁へと突っ込み、張り付いた姿は道路で車に轢かれたカエルのようにも見えた。

「なっ!!子分ッー!!」

流れるような受け流しとカウンターが子分に炸裂した。悲痛な強盗の叫びが銀行に木霊する。

「な、何をするだアー!ーッゆるさんッ!!」

再びスコープオンを構える強盗。さつきよりも距離は近い。これなら撃ち落とすことも容易では無いはずだ。

…いや、もつと楽に脱出する方法があった。

たまたま取り残された客なのだろうか? 近くの壁際で震えていた幼い少女をつかまえると、おもむろにスコープオンの銃口を頭に突きつける。



紅と翠のオッドアイが怯えを見せ、涙を浮かべている。

しかし、それでも女性は冷静だった。

「やることなすこと、全てが三下ですね。」

「あ”あ”!?”

「来なさい三下、銃なんか捨てて、人質なんて解放しかかっってきたさ。楽に殺してはつまらないでしょう。ナイフを突き立て、私が苦しみもがいて死んでいく様を見るのが望みなんでしょう?そうじゃないのですか三下。」

「お前を殺してやる!」

「さあ、女の子を放しなさい! 対一です! 楽しみをふいにしたくはないでしょう? ……来なさい三下 ……怖いのですか?」

「こ、殺してやる! ガキなんて必要ねえ! ……へへへ ……ガキにはもう用はねえ! へっへ ……ハジキも必要ねえや …… H H H H H A ……! 誰がテメエなんか ……! テメエなんか怖かねえ!! ……野郎オぶっ殺してやらああああ!!」

追い詰められた相手ほど、扱いやすいものはない。少しの挑発で激高する。

女の子を解放した強盗は子分と同じようにコンバットナイフを構え、突っ込んでくる。

さっきの子分と違い、直線的で短絡的な動き。

見え見えの動きに対処できないほど彼女は落ちぶれてはいなかった。

突き出されたナイフをしゃがんで避けると、左手の掌底を飛び上がり様に顎へと打ち込む。踏み込んだ分、余計にカウンターをもろにくらい、仰け反る。しかし、女性の追撃はまだ終わらない。仰け反った強盗の頭を掴むと、そのまま地面に叩きつける。コンクリの床は砕け、彼の頭はモロにめり込んだ。暫くピクピクと痙攣していたが、暫くすると気を失ったのか、動かなくなった。

「制圧完了 ……と、そうです。」

人質にされていた女の子に歩み寄ると、目線を合わせ、優しく語りかける。

「大丈夫ですか？怪我は？」

「あ……大丈夫……です……」

「それは何よりです。大丈夫なら、外の管理局の方を呼んでください。悪い人達を捕まえて貰いましょう。」

「あ！はい！」

そう言うと、恐怖が取り除かれたのか、元気に外へと走って行った。その姿を見て口元を緩めた彼女は、腰に携えた簡易的な転移装置を展開し、銀行からその姿を消した。

『今入りましたニュースです！中央銀行を占拠していた犯人二人が逮捕されたとの情報が流れてきました。人質と財産に被害は無く、犯人は重傷を負ってはいるものの、命に別状は無いとのことで、管理局の方では意識が戻り次第……』

翌日

S.T. ヒルデ魔法学院中等部

「ねえねえ聞いた？」

「聞いた聞いた！昨日の強盗、スゴかったよね！質量兵器を持っていたし。」

「でも、それを制圧したのって一人の女の人らしいよ！」

「それも聞いた！スゴいよね！ああ……！そんな勇猛な女性になら抱かれない！」

「アンタ……そっち系なの？」

「今日の授業は…あ…体育あるのに体操着を忘れてしまいました…。」  
アインハルト・ストラトス

裏の顔はクラナガンを密かに守る、知る人ぞ知るで英雄ある。

## ミッドチルダの変態（マッドサイエンティスト）

S.T. ヒルデ魔法学院

聖王教会運営の、その名の通り聖王信仰を主とする学校であり、魔法能力の開花と勉強向上を目的とした学校である。

まあこの辺は本編を読んでいる貴兄諸君ならば説明せずとも前情報は得ているだろう事で割愛。わからないなら…まあG○○gle先生辺りに聞くと良い。

さてさて、本日の話に移るとしよう。

本日は晴天。四月も半ば。暖かな日差しが校舎と、そして登校する生徒を迎え入れる校門を照らす中。

アインハルトは両手で平たい学生鞆を持って校門をくぐる。行き交う生徒に『御機嫌よう』と挨拶していく姿は、凜凜しくもクール。端正な顔立ちもありとても目に留まるもの。

それならば友人の一人や二人いるだろうと思うだろうが、彼女自身の性格や、その見た目から高嶺の花と思う生徒もいるのだろう。

もちろんアインハルト自身は気にしてはおらず、いつもの無表情に近い顔でスタスタと教室へ向かう。

「……………」

無言である。これでは話題性も無く取っ付きにくいのも当然なのかもしれない。まるで機械のような動作でせつせと教材を机に入れていく。

…しかし、

教材を入れたら、鞆が空っぽになってしまった。普通ならば、それがどうした？とどこかの借金次元獣ハンターのように呟いてしまうだろう。しかし、それはあくまでも普通の話。

「…お弁当、忘れてしまいました…」

変わらぬ表情でポツリと、まるで蚊が鳴くような声で呟いた。母が作ってくれた弁当を家に忘れてきてしまった、と言うのだ。

コレはマズい。いや、母の作る弁当は普通に美味しいのだが、状況的にコレはマズい。

弁当が無ければ購買に行けばいいじゃない、と昔の偉人は言うだろう。しかし、だ。正直言うと、今月のお小遣いは少々厳しい。というか、既にほぼすっからかんだ。

(おかしいですね。確かに今月分はこの間までであったはずなのに……。プロテインやトレーニング器具を買い込んだくらいでなくなるものなのでしようか?)

これだ。

明らかに他の生徒とは価値観とか観点が違ったのだ。

コレを年頃の少女なら、やれプリクラや、やれネイルや、やれリッツや、やれ服をかうや、そういつたファッションとか友人との一時に充てるのだろう。

しかし、アインハルトはその一線を画していた。将来腹筋でも割るのか?はたまた筋肉モリモリマツチョマンの変態と化したいのか?それほどまでに筋肉を欲しているようにも感じる。

『筋肉筋肉ウ〜!筋肉イエイイイ!!』

…どこかで彼がこちら側へ引き込もうと呼んでいる。

いかん、こちらへ逃げ込め!↓\*

…まあどちらにせよ、アインハルト自身の金銭感覚、及びお金の使い道が少しズレているには変わりはない。

気落ちしたまま四時間目を終えた中等部。この時間帯はいくら大量の朝飯を食べてきていたとしても、体内時計の性か、腹が減る感覚に見舞われてくる。

もちろんアインハルトも例に違わず、本人にしか聞こえない腹の虫がキョルキョル鳴っているわけだ。

「くっ…い…この程度の空腹…!覇王流666式鍛錬法『饑餓断破』の取得に比べれば…!」

先祖のクlausからの記憶での鍛錬法に、空腹をものともしないで過ごす法がある。それが饑餓断破。コレを極めれば数日間飲まず食わずで過ごすことも容易い、なんともエコなものなのだが…。

それはさりとて、もちろん取得をするためには空腹にならなければならず、その中で空腹感を消せたならば成功なのである。

とりあえず閑話休題

しかし、彼女は12歳。絶賛育ち盛りだ。今はとにかくしっかり食べて、しっかり動いて、しっかり寝る。そうすることで体も大人へと近づいていく。そして成長にはエネルギーが必要なもの。霸王流を以てしても、ここまで空腹感を誤魔化せないものなのかと戦慄する。

「水で…空腹感を…」

そう決めた彼女は、腹の虫と闘いながら水飲み場へと足を運んでいった。

O T Z

現実とは非常です。

目の前で風に揺れるその木材から加工された真っ白のヒラヒラした紙切れ。その文字が恨めしいと思ったことは無い。

地に膝と手を着き、項垂れる彼女の後ろ姿は哀愁漂い、木枯らしが吹いているようだ。

『水飲み場 故障につき使用禁止』

思えば既に昼休みも半分を過ぎていた。

空腹感が脳の回転を鈍らせているのが実感出来る。ブーツとして集中力が散漫だ。これでは授業を受けても頭に入るかどうか…。

「考えても…詮無きことですね…。」

出来るだけ動くことを抑えて、エネルギー節約に努めないと。そう意気込んで勢いよく立ち上がる。

が、

頭がブーツとする。

座っていた状態から勢いよく立ち上がる。

それにより引き起こされる結果は恐ろしいほどに明らかだ。

「あれ…？世界が…歪ん…で…？」

目が回る、とはこのことなのか。視界がぼやける、と言うことは焦点が合わない。妙な浮遊感にくわえ、平衡感覚が著しく低下している

のが実感できる。これは…マズい。

立ちくらみに加え…

(貧…血…:…?)

そこでアインハルトの意識はブラックアウトした。

目が覚めたら、白い天井が目映った。

身体にかけられた布の感触、背を預ける柔らかなクッション。目だ  
けを動かすと、周囲は仕切るためのカーテン。

…どうやらベッドか何かに寝かされているようだ。

…たしか…私は…

ゆっくりと身体を起こす。未だ抜けきらない脱力感が鬱陶しいが、  
そこまで気になるほどでは無い。

「気が付いたか。」

ベッドサイドから声をかけられる。黒い髪に黒い服。全身黒づく  
め。カッターシャツの白と、タイの青、あとは肌色だけが違う色なく  
らいで、とにかく黒いという印象しかない。

「あの…あなたは…?」

「ああ、申し遅れたな。僕はクロノ・ハラオウン。管理局員さ。」

「クロノ・ハラオウン…て！次元執行隊の提督!?!」

「…まあ、役職で言えばそうなるか。」

ハラオウンという苗字はミッドチルダのみならず、管理局の関係す  
る次元世界ではかなり知れ渡っている。母親リンデイは総務統括官。  
彼の義妹たるフェイトは管理局屈指の執務官。そして彼自身は次元  
執行隊の艦隊を率いる提督。恐ろしいほどに役職が高い一家として  
恐れられていた。

「どうやら貧血だったようだな。…まさかダイエットに昼食でも抜い  
たか?」

こんなことを妻のエイミーが、女性にはなつた言葉だと気付いたら、張つ倒されているだろう一言。女性にダイエットについて尋ねるなどと、デリカシーの欠片も無い。

「い、いえ。単純にお弁当を家に忘れただけなんです…それで…」

しかし、アインハルト自身はそう言ったことに対し疎いところもあつて、特に気にはしていなかった。

「で、でも、管理局の提督の方がどうして学校に…？」

「いや、ただ、小等科の生徒に講堂で講習をしてね。その後、校内を見学させて貰っていたら、案の定君が倒れていた、と言うわけだ。」

後は想像通り、保健室まで運び入れベッドに寝かせた、ということ。「すいません、自己管理不足でした。」

「その辺りは気にすることは無い。…と、そうだ。昼食を忘れたのならコレをあげよう。」

自身の座る丸椅子の横に鎮座していたコンビニ袋。その中から銀のレトルトパウチ状の袋に詰められたゼリー状の飲料物、皆知る名ならば、『ウイダー〇インゼリ〇』。栄養補給の観点から、日々多忙だろうクロノにとつては愛飲しているものだ。

「えっ？で、でも…。」

「いやなに。昼食にでも、と思っていたんだが、校長が弁当を用意していてくれたんだ。だから結果として必要なくなつてね。だから目の前に昼食を忘れた生徒が居たら渡さない理由は無いだろう？」

「しかし…。」

やはり遠慮してしまうところもある。雲の上のような存在であるハラオウン提督に、しかも今日出会ったばかりのような自分に対してここまでして貰い、戸惑わないなどとそこまで凶太い神経は持ち合わせていないアインハルトは、言葉を濁して受け取ることを迷っている。

「僕が構わないと言ってるんだ。…それに、育ち盛りの子供が遠慮などらしくも無い。遠慮はもう少し成長してからするんだ。」

そう言うと、アインハルトの手を取ってウ〇ダー〇ンゼリーを包ませる。細身でありながら、しっかりと鍛錬をしているのであろう両の



手の、硬く分厚い男性の手。それに触れられて、アインハルトは少しどぎまぎして顔を赤らめてしまう。

「こ、子供扱いは……!」

「…そうだな。歳としては大人と扱って欲しい頃合だろう。しかし、今回の件に対しては大人に甘える、と言うことも大事だぞ。」

言うだけ言うと、クロノは立ち上がり、仕切りカーテンを捲りあげて外に向かう。

「あ、あの……!」

「…ん?」

「そ、その…ありがとうございました…。」

ようやく口に出た礼。消え入りそうな声になりながらも呟いた声は、しっかりと目の前の男性の耳に届いていた。

「…次からは、弁当を忘れるんじゃないぞ。」

背を向けたままでそれだけ呟くと、カーテンを潜って立ち去っていく。手の中に包まれたゼリー状飲料物と、揺られるカーテンが、来訪者の余韻を残していた。

「ハラオウン…提督…、ですか。」

人柄については聞いたことは無かったが、アレだけの役職に二十代にして上り詰めたのだ。もっと寡黙で、それでいて冷徹な感じがあるのかと想像してはいたが、人当たりも良く、優しげな人物だったとは意外も意外だ。

「また…会えたらいいですね。」

そう呟いた彼女の口元は人知れず緩み、待ち人を待つ恋人のようにも見えた。

そして、

『フウハハハハハ!! ビバ脱獄!! そして破壊!! 私の頭脳は世界

「イイイイイツ!! 出来んことはないイイイツ!!」

クラナガンの町で暴れるのは、青く、そして巨大な機械。数年前に押し迫ったガジェット。それが手足を生やして巨大化している様子。しかしその形を一言で言おう。

サ○。

○クである。

色こそはガジェットのものではあるが、そのずんぐりした身体に、チューブ状に伸びた手足。いろいろとマズい方向に走っている。

『ドクター、楽しそうですね。』

『当然ですわウーノお姉様。もう最高評議会もなくなり、檻を脱した以上、ドクターを縛る物など何も無いのです。ならばドクターがしたいことを陰に日向に支えてなんぼじゃなくて?…まあ私としては、あの管理局の冥王をケチヨンケチヨンにしてギャフンと言わせれたら良いんですけど。』

どうやら操縦するのは脱獄してきたスカリエツティとナンバーズ投獄組のようだ。あの監獄から抜け出してくるなどと、呆れを通り越して感心する。

間の抜けた青サ○はその外見とは裏腹に、巨大さを活かした破壊力と、伸びた手足によるリーチの広さで猛威を振るっている。

『サ○とは違うのだよ! ○クとは!』

マジックハンドにも似たアームの中から、レーザーバルカンが連射される。威力自体は小さいが、その弾幕は駆けつけた108陸士隊の装甲車を爆散させるのには充分だった。

どこかで男の悲鳴が聞こえた

『見ろ! 人がゴミのようだ!!』

『ああ…楽しそうだなドクター。ス・テ・キ。』

楽しんでいるところでそのコクピットがぐらりと揺れた。

『な、なんだ!? 何事かね?!』

『脚部アポジモーターに損傷。』

『なんと!? このルナチタニウム装甲を破損させた?! 映像を出したまえ!!』

コクピットのメインモニターには股間部に取り付けられたサブカメラからの映像が入る。

碧銀の、小さな何かが足先にて何かをしている。

z o o m

碧銀の部分は髪の色だ。

z o o m

右手を…足先に突き刺している。

『なんとおおっ!?生身の人間が、かね!?!』

『脚部の動力をサブモーターに切り替え。』

冷静にオペレーターするのはトーレ。戦闘ではトップクラスとあって、状況判断に長けているようだ。

「街での蹂躪に破壊。見逃すわけには参りません。」

くしゃりと左手に持つ栄養補助食品のゼリーの容器をつぶし、その勢いで口に流し込む。

それを飲み込むこと数秒後。

み

な

ぎ

っ

て

き

た

!!

「ハアッ！」

あふれ出る力をそのままに、空高く飛翔。その跳躍力は、青サ○を越えるほどに。

『な、何なんだね君は!?!私は興味が…』

「貴方達に名乗る名はありません！」

オープンチャンネルで興奮気味に尋ねるスカリエツティを一蹴するアインハルト。右手を手刀に構え、魔力を注ぎ込んでいく。

髪と同じく碧銀の古代ベルカの魔法陣が、空高く、そして神秘的な

輝きを放ちながら展開される。

「霸王!!」

それは無慈悲に、

「断!!」

そして容赦なく、

「空!!」

その名の通り、

「拳!!!」

空を切り裂き、悪を断ち、そして〇クを縦に一閃。二等分に。

「成敗ツ!!」

爆散する胴長のアレ。その爆風に紛れて数人の人影が放物線を描いて、彼方へと消えていった。

『速報です！脱獄していたジェル・スカリエツィが巨体ロボを製造、破壊活動を行っていましたが、爆散して行方不明になったこのことです。…しかし彼も中々方向性がわかりませんね。あの頭脳を他の面で活かさないのが不思議で仕方ないですよ。』

## ミッドチルダの母親（親バカ）

暗く、そして鬱蒼とした空気が一室を支配していた。照らすライトは電球が古いのか時折チカチカと点滅し、備えつけられた鉄の扉に至っては、長い間高い湿度に侵された為か、茶色く、表面が錆びてきていた。

こうまでなっていると、長い間放置されていたのだろうと、その古めかしさを察するだろうが、その錆びた扉を一度潜れば、外観とは違う世界が広がっていた。

広々とした室内の八方は整えられた鉄製の壁面。所々から生えているケーブルは、部屋の中にあるコンピュータに接続され、絶えず電力を供給している。所々には巨大なポッドが設置され、内包された青く透明な液体が、コポコポと水泡を立てている。下部から照らされる光が液体を反射し、室内は自ずと青いライトに照らされているように見えた。

「ふっ……ふはは……！」

一人の男が狂氣的に笑う。

目は見開かれ、瞳孔はどこか逝つちやつてる感じも否めない、琥珀色の瞳。口は三日月のように釣り上がり、人特有の八重歯がギラリと光る。

「面白い……面白いじゃないか!!私の『ガジェットTypeEX』私と君と彼と彼女とアレとソレとコレとがナニをして生まれた結晶はきつとアメイジング号』第777式スリーセブンでラッキー」を破壊するとは……！」

キーボードを打ち込む彼の手は、目と同じくイっており、目にも留まらぬ速さでキーを打ち込んでデータを纏めていく。

「ドクター。そろそろお食事を……」

「ウーノ！次は装甲材質をガンタリウムに！動力はハイパーデュートリオンエンジンだ！装甲に関しては、ドクターJに連絡を取りたまえ！量に関してはコレに記してある！」

「あ、…はい。」

「ククク…！脱獄して目標が破壊しかなかったが…、早くもこのよう  
な越えるべき相手を発見するとは…！私もよくよく運が良い!!」

目の前のモニターに映るは、の「ガジェットTypeEX『私と君  
と彼と彼女とアレとソレとコレとがナニをして生まれた結晶はきつ  
とアメイジング号』第777式スリーセブンでラッキー」を破壊した  
少女。

ブランクが多少あるとは言えここまで容易に破壊されたとあって  
は、次元世界に名を轟かせた『ジェイル・スカリエツティ』の名が廃  
ると言うもの。

「私は必ずや君を下して見せよう！名も知らぬ少女よ！ククク…フハ  
ハハ…ハア…ツハツハツハツ…ゴホツゴホツ！」

むせた。

ギシギシと、背を預ける寝台が揺れる。

乗る彼女の息は荒く、激しい動きをしているのがよく分かる。

碧銀の前髪は、額に滲んだ汗によって肌に張り付き、上昇した体温  
は頬を赤らめていく。

それは幼くも艶めかしさすら感じられた。

「もつと…もつとです…！」

火照った身体。

バクバクと身を打ち鳴らす心臓の鼓動。

荒くなる息。

繰り返し行われる同じ動作が堪らなく刺激に繋がっていく。

そしてそれは彼女に限界をもたらそうとしていた…。

「くっ…！…！も、もう…！…！はああっ…!!」

「バーベル100キロ上げ…限界は777回ですか。…以前に比べて少し更新しましたね。」

額に滲む汗を拭いながら、ガチャリと固定したバーベルに目をやる。

一年前までは50キロが限界だったが、今では100キロは楽に上げられる。

コレが成長期か、と喜びを噛み締めつつも、もっと力を付けられると前を向いた。

これも先祖であるクラウドスの悲願のため。

霸王の拳を以てして、ミッドチルダの悪を屠ること。それが使命であり、自らの望み。そう思つて鍛えに鍛えたこの身体。暇さえあればトレーニング。有事の際は、武装形態で悪をしばき倒す。

「それにしても…。」

昨日の出来事に思いを馳せた。

学校で出会ったクロノ・ハラOWN提督。

目を閉じれば、あの優しい表情がありありと思ひ浮かぶ。その度に、心臓の鼓動が早くなり、また会いたい気持ちに吞まれそうになる。

「はっ!? いけません!? 煩惱退散煩惱退散!!」

そう言うと、スクワットを始めた。汗と一緒に煩惱も出してしまわなければ!

雑念は動きを鈍らせる。戦いは一意専心である。集中できなければ、やられるのはこちらであること。それだけが戦う中で彼女の闘争心を加速させていく。

しかし、

集中が途切れるのは、何も精神的なものだけではない。

「体が…思ったように動きません…。」

はつきり言おう。アインハルトは現在疲労により、身体の動きが鈍重になっていた。というのも、先の煩惱を取り払う為にスクワット1,000回、腹筋500回、腕立て、指立てそれぞれ700回こなし、その直後にアラートがかかったのだ。

「おかしいです…あの程度の運動で音を上げるような身体では…！」  
そう思う暇も与えないうちに、アインハルトは飛び退く。その数瞬後には、巨大な鉄の拳がクラナガンの本通りに突き刺さり、大規模な瓦礫を作り出す。

本日相対するのは…

『フッフ…ハハハ…！』

狂ったような笑い声が、拡声器越しに響く。女性の声だ。

『I LOVE 娘！否！愛娘！私の愛娘をこき使う管理局！ぶっ潰れちやいなさい！！アツハハハハ！！』

天下の大魔導師であり、条件付きSSランク保持者、プレシア・テスタロッサである。

原作では愛長女とともに虚数空間へと消えていったが、ここはそんな過去は飛んで逝っているので、気になさらない方向で。

操るのは、傀儡兵。サイズは18メートル級。魔導師としても科学者としても優秀な彼女にとっては、朝飯前どころか、昨日の夜食前である。

『私だって…もっと愛でていきたいのよおっ！なのに魔導師の研究班はやれ残業しろ、やれ休日出勤しろ！あまつさえ二人は与り知らぬ所で管理局入り！果てに妹は多忙な執務官！姉は無限書庫司書！ああ！アリシアに至ってはフェレットにちよっかいかけられていないか心配で…ゴホツゴホツ！』

口元を抑え、咳き込んだことで胃からこみ上げてくる赤い液体を受け止める。手にこびり付いたソレを見て、自嘲染みた笑みを浮かべてしまう。

『ふっ…これは娘達が心配で胃に穴が空いた血？それともさつき飲んだトマトジュースかしら…？』



「御苦労…なさっているのですね…。」

『わかってくれるかしら?!…でも、もう私は戻れないところまで来ているのよ!!』

背中に搭載された巨大な砲門。それがスライドし、肩に担ぐように固定される。

『私の作り上げた「アリシア・フェイトよ永遠に！溢れんばかりの愛をぶつけんが為に、傀儡兵に名前を刻み込んだわ号」で全てを破壊し、再生するのよ!!そう！こんな筈じゃ無かった過去を取り戻すの!!』

魔力が集束し、その砲門の大きさから放たれる砲撃の威力は推して知るべし。

これは少々マズいことになった。このまま発射させてはクラナガンへの被害は計り知れない。かといって破壊すれば、その集められた魔力が暴発し、周囲に少なくない被害を及ぼすだろう。

だが、アインハルトにとって後者は難しい選択となる。身体が思うように動かないとあつては、破壊すらままならない。どちらにせよ万事休す。

『L O V E！熱線砲！魔力充填120パーセント！ふふふっ…地上本部の次は本局よ！土手っ腹に風穴を開けてやるわ!』

「まていつ!!」

トリガーを引こうとしたプレシアを、突如として男性が制止する叫びが響いた。

プレシアはリーダーを、アインハルトは気配のする方を見やる。

ひとときわ高い、ミッドチルダ中央銀行の屋上。太陽の逆光で姿はわからない。しかし風に靡くマントは陰でよく分かる。

「このクラナガン…否！ミッドチルダで狼藉を働く魔女よ！私が鉄槌を下そう！」

『何奴?!』

「時と空の番人クロノス、とでも名乗ろう!!プレシア・テスタロッサ…！世界はいつでも、こんな筈では無かったことばかりだ!!その哀しみに立ち向かうか否かは貴女の自由…！しかし、それに他者を巻き込ん

でいい権利など、何処にも！いつも！誰にもありはしない！！」

『何を言うかと思えば……！貴方に何がわかるの？娘達を……愛することが出来ないもどかしさとやるせなさ……！それが誰にわかるというの！？』

「私も2児の父として、その気持ちはわかる！しかしそれで憂さを晴らし、娘達が喜ぶとも思うか？否！断じて否である！！」

『くっ……！何番煎じかわからないような台詞を……！ならまずは貴方が消えなさい！』

砲門をクロノスと名乗る男に向け、トリガーに指をかける。集束した魔力が解き放たれようとしている。これだけの大口徑。当たればただでは済まない。

『私の愛!!受け止めなさい!!』

「それは娘達に注ぐのだな！デュランダル!!」

取り出したるは青を基調とし、槍を彷彿させるかのようなストレージデバイス。そして周囲を浮遊する四機の剣を模したりフレクタービット。

『LOVE!熱線砲!』

「凍て付け!!」

赤い魔力の奔流、そして青の氷の奔流がそれぞれぶつかり合う。周囲に広がる爆風にも似た衝撃により、ビルのガラスは割れて吹き飛び、並木は薙ぎ倒され、アインハルトは吹き飛ばされていく。

『くっ……！押し切られる……!?私の愛が……足りない……!?』

「……これで終わりだ……!」

ぶつかり、周囲に爆ぜる氷の奔流をリフレクターで集束し直すことにより、拡散する一方のLOVE!熱線砲を押し切っていく。

そして遂にはその砲門を氷塊へと変貌させていた。

『アリシア……フェイト……』

「エターナル・コフィン!!」

放たれたトリガーヴォイスにより、氷塊は碎け、放たれて内包する魔力を減衰させてしまった傀儡兵は、その少ない魔力の行き場を無くした回路等のパーツが連鎖爆発を起こし、巨大を瓦解させていく。

『そう…これで終わりなのね……何もかも。』

「終わりでは無いさ。…少なくとも、今回の件で魔導炉研究班のブラックな部分がある可能性が露呈した。掛け合って監査を入れよう。そうすればそちらの労働体勢も改善される可能性はある。」

『…信じても…?』

「番人の名に誓って。」

『…貴方のような人が…あの子の義兄で…よかつ…』

その言葉は紡がれることは無かった。手や足は爆散し、制御とバランスを失った巨体は、背後のビルに身を預けるように倒れた。ツインアイの光は消え、その力を失ったことを示唆する。

一人の母親の、ただ狂おしいまでの愛がこの事態を引き起こしたことに、クロノスは同情を禁じ得なかった。

「…あれ?…私、今回の件で活躍なし、ですか…?」

## ミッドチルダの聖なる探索(デイバイン・クエスト) 1

時間にして20時を過ぎた時間。

世のサラリマンは定時を過ぎ、大抵は家族の待つ家、あるいは赴任先の下宿やホテルに戻って居る時間。

夜にその鳴き声を響かせる鈴虫が静寂を打ち消す唯一の音であることが、クラナガンの中央公園もその例に溺れず、秋特有の夜を演出する。

夜は満月。昔から月の満ち欠けによって魔力の強弱があると言う説もあるが、その真実は定かでは無い。

そんな月明かりが照らす公園を、今一人の少女がロードワークを行っていた。

ピンクのジャージにランニングシューズ。走る度に長いブロンドと、結び上げられたツースайдがピョコピョコ揺れる。

「ふう…今日のランニングもこれくらいかな。」

額を伝う汗を手の甲で拭う。左右非対称の紅と翠の瞳が独特の魅力を醸し出していた。

彼女、高町ヴィヴィオとはある事件を境に日々トレーニングを重ねている。

それは以前銀行強盗に巻き込まれたとき。助けてくれたあの強い女性。彼女の強さに惹かれた。揺るぎない正義と力で悪漢どもを投げつけては千切り、千切っては投げたの大立ち回りを演じた。聞いたところやニュース、そして新聞を見るに、いろんな事件、事故などに対して積極的に、全ては無理でも、届く範囲で活動しているようだ。

「私も…強くなれるかな…?」

そう考えた矢先、はたと足を止めた。街灯が照らすスポットライトとも紛うような光。その傍らにトレンチコート。街灯からの光の遮りで全貌は判らない。しかしすりとしたトレンチコートの裾口から見えるスーツのパンツだろうか?革靴を履いているところから見るに、サラリマンが立っている…ようだ。

しかし、

ヴィヴィオの脳内に警笛が鳴るのだ。  
『引き返せ。』

と。

そう思うや否や踵を返そうと、脳から神経へ、神経から筋肉へ電気信号を送るその僅かな瞬間。

逃げようとする彼女を察してか、『奴』は街灯の影から姿を現した。ヴィヴィオの顔は引きつる。

左手には細長く、暗器に用いるかのようなピアノ線。街灯の光を反射し、鈍く輝く。

右手から出て来る物を想像したくは無い。

ピアノ線が束縛用ならば…出て来るのはフィクションで良くある麻酔を染みこませたハンカチとか、猿ぐつわ、あるいは…！

想いを張り巡らせる内に一步、また一步と奴は近付いてくる。

「ひっ!?!」

か弱い悲鳴が漏れた。『奴』はそれで味を占めたのか、歩くギアを一段階上げる。

逃げなきや!

そう頭では判っていても、恐怖から脚が震え、思うように動かない。絡まる脚。

前のめりに倒れ、痛みに顔をしかめる。

街灯からの光を『奴』が遮る。

奴はすぐ後ろまで来ていた。

このままじゃ束縛されて、○○○されて、【禁則事項】で、《スターライトブレイカー》されるんだ!

「ひっ!!い、いやあああああっ!?!」

少女の悲痛な悲鳴が、誰に届くとも無く、夜の公園に木霊した。

魔法学院の生徒会室。

壁には各種方面からの賞状―ボランティアや各種大会の成績によるもの―が厳かとも言えるくらいに綺麗に並べられ、この学院の生徒の優秀さをアピールする。

その入り口から見て上座。つまり最奥に位置する一角。そこに威厳漂う重厚な作りの机と椅子。そこに居座るのはこの学院の生徒会長『エリカ・エルクラント』である。他の生徒とは違い、唯一青いスカートを履いているのは、一重に生徒会長である証。それだけに、成績に人柄、そのどちらに置いても模範的な生徒であることを示唆し、そう行動するように心掛ける決意の証であった。

「さて…どうしたものかな…。」

教員から手渡された一つの報告書。その内容にエリカは顔を若干ではあるがしかめる。

怪人物に関する報告であった。

近年、クラナガンを騒がせる『奴』は神出かつ鬼没であり、局員ですら文字通りその尻尾を掴めないで居る。

実際、エリカ自身も気には掛けていたが、管理局の捜査もあるのである程度は静観していた。しかし、御上からこうしてお達しがあつた以上、看過するわけにはいかない。

物言わぬ報告書と睨めつこをしていると、入り口のドアをノックされた。

「入りましたえ。」

『失礼します。』

凜とした佇まいで入ってきたのは、後輩であるアインハルトであった。

「お呼びでしょうか閣下。」

「うむ、君に頼みたいことがある。」

「…『特務』…でしょうか?」

「察しの良い子は嫌いでは無いよ。」

そう言つて若干口許をつり上げる。

特務というのは、この学院特有の極秘事項であると言える。

管理局から回ってくる任務。学生の身でありながら、裏で非公式に管理局の任務をこなしている。その内容というのは、管理局の手に負えない事項である。

こういつてしまつては身も蓋もないが、管理局の台所事情と言う物があるのだろう、たぶん。

そうした中でアインハルトはその類い稀なる身体能力と格闘技術を見込まれて、こうやって『特務』をこなしているわけだ。

勿論、弱みを握られての強制とか、そう言った後ろ暗い理由は無い。平和を裏から支える。

表舞台に名は上がらない。否、正義の味方は私です、と大手を振つてアピールすることは許されないが、それでも平和への貢献を望んでいたアインハルトにとつて、特務は嬉しい誘いであつた。

話を戻そう。

「貴方も噂には聞いたことあるでしょう？今、クラナガンを騒がせている変人のこと。」

「…はい、夜な夜な女性が組み伏せられ、何らかのことを強要させられている、と。」

「その通りよ。何をさせられているのか。それを管理局が被害者に問うたとして、皆口を紡ぐばかりなのよ。」

犯人に与えられた辱めと恐怖からか…。口に出せないほどの壮絶極まりないことをされたのだろう。

自然とアインハルトの拳に力が入る。

「わかりました。この女性の敵である痴れ者を血祭りに上げれば良いのですね。」

「貴女って結構物騒なのね。痴れ者であるのは事実ではあるけど。」  
祖先の想いを受け継ぐというのも考えようか。

エリカ自身もアインハルトの特異体質については知っている。

霸王の記憶と、それにより現れる虹彩異色と碧銀の髪。そして彼の身体資質。

彼の強い無念がそうさせるのか、どちらにせよ現世にまで御苦労なことである。

「血祭りに上げれば良いと言うものでは無いのよ。法は裁くためにあるの。むしろ逮捕されて、マスコミに報道されれば、それこそ社会的なダメージを与えられるじゃない?」

「…なるほど、さすがは閣下。聡明な判断です。」

「それに…犯人の愚行はもう予測できてるのよ。」

「…と、言いますと?」

「これを見てみなさい。」

パバリと表示されたウインドウ。半透明なそのスクリーンには、被害者であろう女性のリストが並べられていた。

「これは…被害者リスト…?」

「そう。それも犯行を受けた後の、ね。これを見て共通することは無いかしら?」

アインハルトは顎に手を当てて思慮する。

年齢は…十代前半から二十代半ばと割と若年層を中心として被害を被っているようだ。しかし、年齢は幅がある。かといって血液型、生年月日、出身世界。どれをとつても一貫して共通する要素が見当たらない。

「…いえ、私から見れば、場当たりの通り魔的犯行にしか…。」

そう自分の意見を述べたときだった。

こんこんと小気味よいノックが生徒会室へと響く。一応特務は外秘であるために一旦話を区切り、ウインドウを消すとともにエリカは入室を促した。

来訪者はその小さな体躯の胸に資料の束を腕で抱えて、ブロンドの髪を揺らしながら入室する。

「エルクラント会長。四年生のアンケート、回収し終えました。」

「うむ、御苦労だな高町君。…と、そうだ彼女をストラトス君に紹介しておこうか。高町ヴィヴィオ君、小等科四年だ。小等科の生徒会に当たる部署の仕事を手伝って貰っている。」

「初めまして。アインハルト・ストラトスと申します。」

「はい、高町ヴィヴィオです、初めまして。よろしくお願ひしますね、アインハルトさん。」



お辞儀をし合い、上げられた顔には…どこか作り笑いを感じる。屈託のない笑顔、その奥にどこか闇を抱えているような。

「あの…？」

自分と同じ、色は違えど虹彩異色のその瞳に魅入られていたのか、見つめてしまっていたのによく気付いた。

「あ、す、すみません。なんでも無いんです。」

「そうですか。それじゃエルクラント会長、アインハルトさん。失礼しますね。」

「待ちたまえ高町君。」

退室しようと背を向けたヴィヴィオを呼び止めるエリカ。その声はいつもの凜とした声以上に、シリアスな空気を生み出すのに問題は無かった。

「髪形を…変えたのかね？いつもは…そう、ツーサイドアップが気に入っていたはずだ。」

思いがけないその言葉に、一瞬背中越しに震えを見て取れた。しかし、その帰ってきた言葉、

「い、イメージチェンジですよ。気分転換もかねて。」

そう言い残し、見事に結われたポニーテールを揺らしながら、彼女は生徒会室を後にした。

残ったのは静寂と、そしてどこか重苦しい空気。

「あの…先程の質問の意図は…？」

「…さっきの被害者リスト、その写真の角度を変えて見ろ。」

再度ウインドウを展開したエリカからそれを受け取り、被害者の写真一枚一枚をタップ。その撮影角度を変えてみる。一枚二枚は何の変哲も無い、と感じていたアインハルトだったが、三枚四枚と来る内に違和感が芽生えはじめ、挙げ句には十枚目に至るころにはその顔色が若干青ざめていた。

「これは…そんな…まさか…!!」

「気付いたか。」

「はい…いや、しかしまさかこんな…!」

「事実だ。そして高町君の急なイメージチェンジと髪型を示唆された

ときの、一瞬だがあの強ばり。」

訝しげに、エリカ自身も最初見たときには信じられなかったと話す。

「犯人の犯行。それは……」

強制的に髪形をポニーテールに変えること、だ。」

「は?」

アインハルトにとっても呆れにも腑抜けた様にも似た声が口から漏れた。

ポニーテール? 一体何のために? 常識とは考えにくい結論が、彼女の思考を支配する。

そもそもそれで何の生産性があるのか? かの変人は何を目的とした犯行なのか? 結局ポニーテールにするという目的が判った上でも、その向こう側の真意という物に理解が届かない。否、ここから先はこの変人の様に悟りを開かないとたどり着けない、未知の秘境なのかも知れない。

「特務が回ってきたタイミング、そして高町君が被害を被ったこと。どちらにせよ学院生徒会側としては看過できない事態に陥っている。特務だけならまだしも、我が学院の生徒にまで被害者が出たとなれば、降り掛かる火の粉を払わねばなるまい?」

「はっ! 同意であります!」

「うむ、ならば話は早い。」

重厚な生徒会長席からおもむろに立ち上がり、エリカは声高らかに告げた。

「ST、ヒルデ魔法学院生徒会長エリカ・エルクラントが命ず! 女の敵を世間のさらし者にし、ひいてはクラナガンの女性達に平和と安寧を!!」

「アイアイマム!!」

高町なのはは正直なところ、憤慨していた。

誰に対してでは無い、自分自身に、だ。

昨晚、娘がロードワークから帰ってきたとき、何かしらの違和感を感じた。

髪型を変えていたこと。それに関しては気分の問題だろうからか触れないでおいた。しかし、それと関係があつたのかと今更思うが、帰ってきた娘の表情はどこか強ばっていた。表情が硬いというか、どうにも心の揺らぎとも感じるような。どうかしたのか、と尋ねても、『なんでもないんだ。なんでも。』

そう言つてシャワーを浴びに行つてしまった。

ここ最近で、あんな表情。数年前にも同じような顔を覗かせていたような、どうにも引つかかるもどかしさを感じたまま昨夜は床に就いたが、結局殆ど眠れなかつた。

「何だつたかな…、思い出せないよう。」

イライラが募る原因。思い出せない歯がゆさど、何かを抱えている娘に対して何もしてやれない悔しさ。その板挟みが憤りを大きくしていく。

身体を動かせば何か解決するかも、そう思つてさつき教え子達に『全力全開』の指導をしてきたが、やはり解決しない。

「なのは、新しいデバイスのテスト報告なんだけど…：…ひっ!？」

十数年前からの友人であるヒカリが、金髪のポニーテールを揺らしながら報告書を持ってきたはいいが、それに応じて顔を上げたなのはの顔は、目元に隈が出来、目は若干三白眼。管理局屈指の美人の一角のされる羨望の的『エースオブエース』、その姿の片鱗は何処にも無かつた。思わず悲鳴が漏れてしまう。

「ああ…ヒカリちゃん、ありがと…そこに置いて…なの。」

「なの!?!なの、なんか目が若干死にかけてない!?!」

「え…?そうかな…?…そうなのかもね…。」

覇気が無い。

生気を感じない。

というか若干透けて見えそう。

憔悴しているのだ。其程までに。

「な、何か悩みでもあるの?ボクで良かったら…」

「子育てで悩みが…」

「ごめん、力になれないや。」

さすがに子供の居ないヒカリには受け付けられない。フェイト辺りなら嬉々として相談に乗ってくれそうな物だが、彼女は現在母親(実母)のアホらしい裁判に奔走している日々。くわえて無限書庫でも一人のロリツ娘が法関連の書物を読み漁っているという。なのは自身、『アレ』(大魔導師の方)を見てみると、将来の自分もあなるのかと不安に駆られる。

「そ、そうだ。なののはは定時で帰るんでしょ?ボクももう置く予定だから、ちよつとだけ気分転換しに行かない?」

「ごめんヒカリちゃん…私…そんな気分じゃ…」

「そんな気分だからだよ!なののはがそんなんじや、ヴィヴィオだって不安になるよ!子育て云々の前に、なののはがしっかりしてないと!ほら!速く仕事を片付けた片付けた!あと、報告書にサインね!」

こうして、なののはの定時終わりは友人との気分転換に少し時間を費やすことになる。

## ミッドチルダの聖なる探索(デイバイン・クエスト) 2

ミッドチルダの一角にある居酒屋。ポピュラーかつリーズナブルな料理を堪能できる、と言うことで、少し早めに切り上げたなのはとヒカリ、その二人はカウンター席に座り、ビールを一杯飲んでいた。節度を守りさえすれば酒も良い薬、とは誰の弁かは判らないが、酒は百薬の長、とも言いうこともあり、それは心の薬でもある。逆に言えば、薬も過度の摂取は毒ともなり得るので、酒も然りである。

「このツクネ、美味しいんだね。」

「うん、以前にバルガスさん…えっとヴァルキリーのテストをしてくれた人が連れて行ってくれたんだ。…その時ボクは未成年だったからオレンジジュースだったけど。」

「あの人よく飲むでしょ？ナカジマ三佐ともよく飲みに来るらしいよ？」

「あ、知ってる知ってる！よくハルちゃんのことでもナカジマ三佐が相談してたって。」

互いの知人の話を酒の肴に、ビール一杯で結構引つ張っていくのか、串の数もそこそこに増え始め、ネギマやレバー、砂ズリなどの串間で増え始めていく。

「ビールも残り僅か、と言ったタイミングで、なのはは本題に乗り出した。」

「ヴィヴィオの表情が昨日からどこか陰りが見えていること。それに対してどう接して良いか判らず、燻っていること。その心理をぽつぽつと漏らしてきていた。」

「私自身、どうして良いかわかんなくって。このままじゃよくないのは分かる。でも不用意に切り込むのも何か違う気がするんだ。助けを求めてくれるなら迷わず手をさしのべたい。…でもちよつとあの子頑固なところもあるから…きつと心配掛けたくないって抱え込んで、じゃうんじゃ無いかなって。」

母親なんて経験は勿論初めて。

そんな中で娘が悩んでいる。

何処まで踏み込んで、どこから見守るべきか。

そのラインがなのには判らないのだろう。

「…やっぱり親子、だね。血が繋がってなくても。」

「へ？」

「なのはってば、人のことを言えないでしょ？抱え込んじゃう性格。」

「う…！そ、そうなのかな…？いや…そうなのかも…。」

魔法のことについて知ったばかりの時、悩んでいて、それでポーツとしていて、話し掛けてきた友人のアリサの声も耳に入らず、結局相手を怒らせてしまった。後から理由を聞いたら、

『アンタ、ずっとポーツとしてたし、何か悩んでいるみたいなのに、何の相談もしてくれないアンタ自身と、頼りないのかって自分が思われているかも知れないあたし自身に腹が立ったのよ。』

そう返してきた。

勿論、魔法については喧嘩したとき、打ち明ける訳にもいかなかったので気まずい空気は拭えなかったが、そのことをその年の年末に打ち明け、互いの気持ちにしこりが無くなってすっきりしたものだ。

「むう…変なところまで似なくて良いのに…。」

「あはは…。でも、今のなのはの気持ち、あの時のアリサと同じ気持ちなんじゃ無い？悩んでる大切な人が目の前にいて、それでも何も出来ないことに対するイライラ。」

だから、と言葉を繋げ、

「アタックしてみるのも、一つの解決策なんじゃない？アタックして、ぶつかり合って、それでわかり合うのがなののはの教示、みたいなものでしょ？」

「ん…、確かにそう、だったよね。」

フェイトの時も闇の書の時も、砕け得ぬ闇事件も…そうして前に進んできたはずだ。

（そうだよ！それが私の進み方だもん。全力全開で、ヴィヴィオと帰ったら話してみよう！喧嘩したって、きつとわかり合えるよ！…家族、なんだから！）

「ありがと、ヒカリちゃん！私、悩んでるのがバカバカしくなってきた

ちやった。」

「そつか、まあ、子育てしたこと無いボクの見方で良かったなら何よりだよ。」

「若いねえ…若い！俺にもそんな時代があったなあ…。」

隣にいつの間にか座っていた深緑の髪をした男が、ロックを片手に、ニヒルな笑みを浮かべていた。

「若者よ、大いに学べ。それが若者の特権なんだ。俺みたいに年を食えば悩むことなんてないくらいに周りが固まるんだからな。…ちなみに今の俺のムーブメントは『悩む姿』、だ。うら若き乙女が、悩み、そして成長する。いわば真の大人へと一皮むける。昆虫に例えるなら、悩む姿がサナギ、その先の成虫が真の大人。だがしかし、女の子が悩む姿というのは、何ともいじらしくて、なんかこう…保護欲をかき立てられるんだよ。その自らの羽を広げようとする脱皮を見守り、支えるのに、俺は如何ともし難い躍動感、つまりムーブメントを感じるわけだ。」

「は、はあ。」

「さつき、そっちの茶髪のお嬢ちゃんが見せた悩みが吹っ切れた表情。あれは堪らないね。…ま、悩める内に悩んどけよ？大人からのアドバイスって奴だ。」

彼はそう言うが残っていたロックを飲み干して、黒いジャケットを返し立ち上がる。

大將に、

『釣りはそこのお嬢ちゃん二人の分に回してくれ。大人からの奢り、だ。』

そう言い残してカラカラと引き戸を開けて店内から姿を消した。

「な、なんか凄いインパクトだったね。」

「う、うん。ああ言うのが本当のオトナって奴なのかな。」

二人は知らない。

彼が、とんでもない人物であると言うことに。

「遅いですよ先生。」

「ああ、悪い悪い。悩める若人を導いていたら遅くなつたわ。」

「呑んでましたね？」

「さあてお仕事お仕事。」

先程の男性は、アインハルトとヴィヴィオが襲われたという公園で待ち合わせていた。

男性は気怠げにデバイスを起動させた。長いバレルの付いた銃。おそらくは狙撃型の物なのだろう。何度か特務で先生と呼ばれた男性と共同戦線を張った。その狙撃能力は前線で暴れるアインハルトを上手く援護してくれ、傷付けば回復能力のある魔力弾で傷を癒やしてくれる、最高の支援者だ。

そう、『戦闘面』では。

「特務だというのに先生は毎回一杯は呑んでこられますよね？すこしは緊張感というものを…」

「少しは肩の力を抜けよストラトスちゃん。肩肘張ってちゃ出せる力も出せんぜ？俺はその緊張感を程よくするために一杯引っかけてくるんだよ。いわば通過儀礼って奴だ。判るかい？」

「…わかりません。」

ちなみにアインハルトの髪型はストレートに髪を下ろしている。エリカ曰く、

『奴はポニーテールならざる髪型をポニーテールに強制している。ストラトス君にの髪型はツインテールではあるので、襲われる危険性は低い。そう言うわけであえて髪を下ろし、奴に意欲をかき立てさせ、襲ってきたところを仕留めろ。おとり捜査、と言う奴だな。』

という作戦らしい。

「しかしまあ…。」

先生はまじまじとアインハルトを見やる。

「な、なんですか？」



「普段とは違う髪型、って言うのも新鮮なもんだな。こりや俺は新しいムーブメントを感じちまうかも知れんな。新しいムーブメント：いわば『ギャップ』。……ありかも知れん。」

「では捜査を始めましょう。先生はアンブツシユポイント。つまりこの辺りです。」

「…おーい、スルーすんなよ。」

ヴィヴィオが襲われた付近。開けた場所を一望できる茂み。そこを中心にアインハルトはうろつき、出て来たところを先生がズドン。これが立案した作戦だ。

「では手はず通りに…」

「誰かあ!! 変態や!! それも極めて特殊な変態や!! 誰か助けてええええ!!」

茶髪でセミロングの女性が全力で目の前を通り過ぎ、一陣の風が吹き抜けた。それを追うように『何か』が駆け抜ける。

「…どうやら作戦変更ですね。私が奴を引き付けます。先生、後は手はず通りに。」

「へいへい。」

先の二人が向かった先は作戦ポイント方面。まずは被害に遭っている女性から危険因子を引き離し、その上で仕留める。それがベストな選択だった。

「…どうしてこうなったのかしら。」

橙色の髪の少女、ティアナは茂みに隠れつつ相棒のクロスミラージユに語りかける。しかし当の相棒はガン無視なのか何も応えない。へし折りたくなる衝動に駆られつつも、カートリッジなどの使用許可が下りているので、くわえて薬莢も確認しておく。

はやての立てた作戦。

それは自分がおとりになって、出て来たところをティアナが狙撃。それで終了。

どこかで聞いたことあるような作戦内容だが、気のせいだろう。しかし先のぼやき、というのはある意味当然なのかも知れない。

というのも、偶々、本当に偶々地上本部に用があつて来ていたら、かつての上司、八神はやたと本当に偶々出会った。

『丁度ええところに遠距離適応者がおつた!』

と嬉々として捕まえられ、あれよあれよという間に最近ミッドチルダを騒がせる変質者捕縛に協力させられてしまったのだ。

「理不尽だわ…。」

そう誰に聞こえるとも無く呟く。

と、がさがさと茂みの植木を掻き分ける音が耳に入った。

(…出てきたの!?!こんな近くに!?!)

そう警戒し、神経を研ぎ澄ませ、耳を澄まし、目を凝らす矢先に、その声が耳に入る。

「ムーブメント…ポニーテール…、ありかもな。」

……!!

奴だ。

変質者だ。

それも近い!

はやての方では無く、こちらの方で待ち伏せているのか!?!しかしこれはまたとないチャンス。ここで仕留めれば、その分早く片付いて、早く帰れる。

そんな焦燥感から、声のする方にクロスミラージュを構えて茂みから飛び出した。

「出たわね変質者!」

「何?!?出たのか変質者!どこだ!?!」

「アンタのことよ!!」

周囲に展開された魔力スフィアが一斉に男―先生―に降り注いだ。爆煙と爆音、そしてそれにより打ち上げられたアスファルトの破片が周囲に分散し、降り注ぐ。

「おいおい、殺傷設定かよ？ 穏やかじゃ無いねえ。」

爆煙から見て左に飛び出しながら、先生のデバイス『スウィートシャフト』から高速の狙撃弾が射出される。勿論ティアナの方も予想していなかったわけでは無い。

打ち込まれたティアナは、魔力弾を貫通。しかし、その姿は蜃気楼のように揺らぎ、姿を掻き消す。

「幻術たあシブい戦い方するねえ！」

背後にデバイスを回すと、金属音が周囲に響き渡った。

「くっ……！ 変形した？」

「ノンノン。」

先生は、まるで学校で生徒に教えるように、その顔に得意げな表情を浮かべる。

「複合型デバイス……って奴だ！」

身体を捻り、ダガーモードに切り替えたクロスミラージュの刃、それを受け流し、その勢いそのままに重厚な剣を横になぎ払う。

「やるねえ……。今の流しを避けるってよ。」

「強い……！ 近距離の速さは別にしても、技量が高い……！」

「お褒めにあずかり光栄至極。んなわけでそろそろ話を……。」

「クロスファイア！ シュート！」

話を聞くつもりは無いと言わんばかりに、十八番の魔力弾の応酬が先生を襲う。

しかし、先生、と呼ばれるだけあり、その技量、反応ともにそんなじよそこらの武装局員などには遅れは取らない。ティアナ自身、その高い技量も言うに及ばずではあるが……。

「やれやれ……困ったお嬢ちゃんだ……。だが。」

再び上がった爆煙から姿を現したのは、複合型デバイスと言うに相違ないとも言える、インテリジェントの変形とはまた違った可変を備えていた。

狙撃型デバイス『スウィートシャフト』

近接用大剣デバイス『ワックマック』

そして現在展開し、クロスファイアを防ぎきったシールドデバイス

『ステイルザワン』

その展開を解き、先生の目つきは変わる。

「主導権を渡すほど、俺は優しくないんだよなあ…。」

滲み出る魔力。そして闘気。相對するティアナの頬を汗が伝う。

「来いよ…」

「狂わせてやる。」

### ミッドチルダの聖なる探索(デイバイン・クエスト) 3

一方

変質者に追い回されていたはやてはとやうと、未だに逃亡を続けていた。もつれる脚を必死に鞭打ち、背後からの恐怖から逃げ惑う。

(あかん……追いつかれる!?)

奴は四足歩行とも言えるようなしなやかな走り、はやてとの距離を縮めていく。

はやてに諦めという文字が浮かび始めたとき、

「空破断!!」

魔力により練り上げられた空気の弾丸が、はやての背後で爆発した。

その余波で、はやて自身もその軽い体躯を浮かせて吹き飛ばす。

もうもうと立ち込める爆煙。

「な、なんや……。何が起こったんや?」

流石にいきなりの爆発に加え、自分も吹き飛ばされようなどとは欠片とも思っていない。だが現に、それは起こった。

変態はどうなった?

何で爆発した?

様々な疑問がぐるぐると頭の中を渦巻く。

「御無事ですか?」

爆煙の中から現れたのは、一人の少女、アインハルトだった。S.T.ヒルデ魔法学院の制服に身を包み、碧銀の髪を夜風に靡かせ、堂々たる面持ちではやてを見つめる。

「お、おおきに。」

「いえそれよりも早く離脱を。」

「あ、あんたはどないするん?」

「私は……。」

瞬間、

爆煙の中より、大きな人影がアインハルトに飛び掛かる。その魔手が彼女を掴み、はやてが奴の登場を知らせようと口を開けた時。『奴』

の顔面に裏拳が、その鋭いキレと真逆に鈍い音を立ててめり込む。

『奴』は錐揉みながらアスファルトを転がり、約十メートルほどしてようやく止まった。

「あいつを血祭りに上げます。」

「そ、そうか…。」

やはり変わらず物騒なことを宣いながら見やる視線の先に、ソイツは何事も内容に立ち上がった。

衣服は、トレンチコートの下にスーツのパンツを履いて、革靴、と、大まか聞いていたとおりの、いや、何とか聞き出せた情報提供に一致する容姿だ。体格は服の上からではわかりにくいが、恐らくは中肉中背。すらりと伸びているであろう身体は、まるで狼男かとも言わんばかりに前屈みになってたぎっている。

しかし、しかしだ。視線を上によっていくことで、顔に当たる部位を視界が捉えたところで、アインハルトは目をこすり、我が目を疑う。

馬。

馬だ。

動物界、脊索動物門、脊椎動物亜門、哺乳綱、ウマ目、ウマ科、ウ

マ属、ウマ。

馬である。

大事なことなので(略)

馬面とかそんなチャチなもんじゃあ無い。違和感しか感じられない。というか、変質者以外にただの変態、それも先程はやてが言っていたように、極めて特殊な変態だ。

お誂え向きに、タテガミと思しき所は、何故がポニーテールに縛っているところを加味して、総じて変態的だ。

『ほいっ…!!』

ふしゅくつ！ふしゅくつ！

そんな音を立てながら鼻息を荒くして片手にピアノ線、片手にブラシを構える。

「なるほど…ポニーテールと馬、それもポニーを掛けているのですか。…なるほど。考えましたね。」

『ぼにぼに。』

「しかし、貴方のやり方は間違っています。それだけに止めなくてはならない。」

『ぼにい!!』

「そうですね、そちらも譲れない、と。それはこちらとて変わりません。ミッドチルダの平和のため。貴方を屠ります。霸王の名にかけて!!」

「なんで言葉が判んねん!?!」

はやての突っ込みも余所に、アインハルトの身体が光に包まれたかと思えば、武装形態へと姿を変えていた。

馬男―ぼに男と仮称する―は一瞬驚くが、しかしその闘志を鎮めることは無く、体勢を低くする。同じくアインハルトも構える、腰を少し落とす。

臨戦態勢。

どちらからとも無く、踏み出した両者の拳とブラシがぶつかり合い、それが戦いの狼煙となった。

爆発、爆発、爆発。

公園、その森林区画に置いて爆発による煙が所々もうもうと立ちこめていた。

地上から見れば火事でもあったのか?と思ってしまうほどの規模ではある。

しかし上から見れば、地は焼け、木は幹をへし折られ、所々小規模ではあるがクレーターまで出来ている。

「ちっ…変質者の癖に腕が立つじゃない…!」

木陰に隠れつつ、クロスミラーージュにカートリッジをリロードする。

正直、幻術を駆使しても、ことごとく手を見切られ、防がれ、手玉に取られている感が半端ない。

自分の戦術は…幻術はこの程度だったのか？

所詮自分はここまでの存在…？

否！

機動六課でフォワードのセンターガードとして、フォワードの司令塔を任されたこと！教官であるのはさんに教わった教示はこの程度では無い！

数年前、ナンバーズと三対一で渡り合えたこと。それはなのはの教えの賜物に他ならない。

ならば…、

「見せてやろうじゃない…、ランスタアの…弾丸、その教示を!!」

マルチタスクをフル活用。クロスミレンジュと戦術を練り合い、茂みから飛び出す。

敵の位置は判らない。だが…だからこそ先手を取る。

正面、一瞬ではあるが光が走る。恐らくは魔力の光。すかさずクロスマレンジュから魔力のアンカーを射出。丁度良い位置にある植樹に打ち付ける。アンカーを巻き上げ、地から脚が離れた瞬間、胴があつた位置に狙撃弾が通過した。相手の位置は見えない。しかし、射出された弾は何れも直射のみ。誘導弾は一つも無かった。撃たないのか、はたまた撃てないのか…。どちらにせよ、相手と接敵しなければ罅が明かない。

先程の角度から、相手の位置をある程度逆算。その位置から陰になる木陰で一旦着地する。アンカーでの移動はあくまでも魅せ。相手の位置を絞るための、いわば身を挺した罠のような物。

(今のが魅せであることは向こうも気付いている可能性もある。となれば逆算して特定されないように移動する。その時に相手が見えるなら…)

そこを狙う。

元々狙撃兵と言うのは、相手に悟られないように狙撃ポイントにつき、ワンショットワンキルのもと、一発の弾丸で仕留める。しかし、逆



に悟られれば一気に追い込まれ、自分が仕留められることもある。  
…と、

ガサリと前方の茂みが動く。

奴だ！

これを逃しては…！

「クロスファイア…！」

仕留めるなら…この距離なら…！

「フォーカスソフト!!」

クロスミラージュの銃口に、クロスファイアのスファイアが融合。

これは、なのはに教えて貰った必殺弾。弾を展開、それを一つにすることで、擬似的ながら集束砲にも似た砲撃を放てる。実質、その威力と有用性を身を以て知ったティアナにとっては、若気の至りとも言える小っ恥ずかしい思い出とともにある、感慨深い魔法だ。

「シュート!!」

放たれた橙色の砲撃。うねりを生み、それは奴のいると思われる茂みへと撃ち込まれた。

「やった!」

「おおっとーそれはフラグだぜお嬢ちゃん!」

奴の声は上空より。さっきの茂みはブラフか!? そう思ったときに、相手は既に大剣を振りかぶって降下してきていた。

切り裂かれる空気とともに、ごうつと振り下ろされた鉄塊とも言えるデバイス。

砕けるのは大地。めり込んだ大剣が、その重々しさと威力を語る。

しかし、相手が姿をさらすのであればチャンスだ。距離としては中距離。恐らく相手は大剣による近距離。狙撃による遠距離が適正と推測する。ならばこの距離は…！

「ここは…私の距離よー!」

再び展開されるは、限界数までの魔力スファイア。その数の多さは、敵対する先生の表情を驚愕させる。

「へえ…やるねえ!でもおっさん一人に大人気なくな…」

「うっさい、爆ぜろ変質者!」

先生は爆発に包まれた。

『ぼー！』

「はあっ！」

かち合うのは、アインハルトの鉄拳と、ぽに男のブラシ。このブラシ、一体素材は何で出来ているのかわからないが、アインハルトと打ち合っても折れるどころか未だその原形を留めている。デバイスの一種か、はたまた希少金属で造られた特注か。

一旦距離を取ったアインハルトは、右拳に魔力を集める。

「空破断!!」

再び放たれた空破断。この威力は先程の爆発で証明済み。距離を詰めんと掛けた。ぽに男に打ち込む。

これでヒットして決着

…の筈だった。

『ぼー!!』

しかし奴はあろう事かブラシで空破断をはじき飛ばしてしまった。まるでハエ叩きを用いて虫を払い除けるかのように。結果として行き場を失った空破断は、後ろに高々と聳え立つマンションに直撃した。

「なんと…！奇天烈な…！」

『ぼー！』

一瞬、ほんの一瞬、弾かれた空破断に気を取られた。その瞬間を狙い、ぽに男の片手に握られたピアノ線。それがアインハルトを雁字搦めに拘束する。

「なっ！しまっ…！」

『ぼー！』

してやったり、とその馬顔をにやかせながら、奴はブラシ、そし

てポケットから取り出すのは…接着剤。

ポニーテール、拘束、ブラシ、接着剤…。

そのキーワードで連想されるのは…

「まさか…！」

『ぽにい…！』

恐らく、ブラシで髪を梳いた上で、ピアノ線と接着剤で髪をポニーテールに固定するのだろう。それは断じて…受け入れるわけにはいかない。

「接着剤などで髪を固めれば、毛質が損なわれる…！私はともかく…ヴィヴィオさんの髪まで貴方は…！」

許せない…！

しかし、ピアノ線の拘束は思った以上に固く、抜け出すことができない。藻掻く最中にも、ぽに男は一步、また一步と距離を縮めてくる。

万事休すか…！

「ちよつと待ちや！」

アインハルトが拘束された時。

端から見るしか無かったはやては、どうすれば良いか思案していた。

先の戦闘を見る限り、格闘の達人であるアインハルトとブラシで互角に渡り合うぽに男。今この場で出たところで、広域殲滅型のはやてには分が悪い、と言うよりは悪すぎる。

しかし何とかしなければ、助けてくれたアインハルトに申し訳ない。

何か…

何か助けになる物は…！

「ん？」

自分のポケットをまさぐった時、その手に掴んだ物を取り出した。それをみただけはやては奇策を思い付く。

「ハ、これや!!」

そして時間を戻す。

ぽに男は静止をかけられて、そちらに目をやる。

後ろの髪をまとめ、後頭部にかけてバンドで止めた髪形。つまりポニーテールがいた。

はやては必死こいて髪をくくり上げた。

(ふふんーこれであいつの目は私の方に釘付けやー!そうすれば少しは時間が…!)

『ぺっ!』

「ツバ吐かれた!?!」

奇策且つ的確な案だと思ったが、一瞬だけしか反応しなかった。

『ぽにッ!ぽにぽにッ!ぽーにーッ!!』

「えつと…髪も梳かず、その場しのぎのポニーテールなんて邪道だ。だそです。」

「せやから何で翻訳できんの!?!」

はやてのツッコミも余所に、再びアインハルトに向き直る。じりじり詰め寄る二足歩行の馬はかなりの恐怖が感じられ、幾度となく悪漢を退けてきたアインハルトにおいてもその例外では無かった。髪は女の命と言うが、それを汚されると言うことの意味は想像に難くない。

(クラウスの無念を果たさねばならないのに…私は…ここで…?)

『ぽにっ!…!』

死刑宣告にも似た、ぽに男の一言。目を瞑るアインハルト、その碧銀のなめらかな髪にやつの魔手が触れようとした瞬間だった。

がんっ!!

と鈍い音とともに、急に眼前の気配が消えた。

恐る恐る、と言うように目を開くと、そこにトレンチコートで馬顔

の奴はいなかった。奴は、右側面方向に頬を抑えながら屈み込んでい  
る。

「一体…何が？」

がさり、と複数茂みから飛び出してくる。

互いに魔法戦での応酬をしながら、アインハルトにはやて、そして  
ぽに男の周囲を飛び跳ねながら、魔力弾をその相手に向かって撃ちま  
くる。

「な、なんや!？」

『ぽにい!？』

件のぽに男ですらこんな感じだ。

しかし戦っている2人は、と言うと、3人のことなど目に入らない  
のか、夢中ともとれるような戦い振りを見せてくれる。

そして、

上手い具合に二人の放つ弾丸は、互いに避けるのではあるが、時折  
流れ弾がぽに男にホーミングしているかの如く、その馬顔に撃ち込ま  
れる。

『っ?!?!?』

何かしらの作用が働いているかのように弾は吸い込まれる。狙撃  
弾、クロスファイアー、ヴァリアブルショット…ありとあらゆる弾が、  
ぽに男の意識を刈り取っていく。

「はあ…はあ…！…やるじゃねえかお嬢ちゃん…！」

「そちらこそ…変質者のクセに…やりますね…！」

互いに激闘を繰り広げたのか、服は所々破け、息も上がり、目も据  
わっている。

「こちとら限界だ…！」

「次が…」

「互いに…」

「ラストショット…!!」

クロスミラージュを切り札の形態『ブレイズモード』へと切り替え  
る。バレルが延長され、さながらそれはストックのないロングライフ  
ルの様にも見える。遠距離狙撃砲特化型で、クロスミラージュとテイ

アナの切り札たる形態。

「いいねえ…切り札持ってたか…いんじやま、俺もやりますかあ!!」  
突如として先生の体から溢れ出る魔力。その奔流が目に見えて、白い光を発光をしているように見える。本来の魔力素は、何らかの干渉をしない限りは無色透明なのだが、発光するまでに周囲の魔力が反応するという状態は、ティアナにとっては未知の領域だった。

それでも、怯むわけにはいかない。

管理局執務官として犯罪者は見逃すわけにはいかない。

悪漢共に御仏の慈悲は無用である。

「クロスミラーージュ！カートリッジロード！」

カートリッジバレルから二発の薬莖が装填され、ティアナの魔力にブーストが掛かる。この一撃なら…どんな相手だって！

「いっけえ!!フロントムブレイザー!!」

「スナイプ…ブースト!!」

集束された直射砲撃。

貫通力に超特化された狙撃弾。

各々の砲身から射出されたそれは、互いに引き寄せられるかのようにぶつかり合おうとする。

普通なら少年漫画のように熱い展開を迎えるシーンだろう。

しかし、

そのぶつかり合う場所に、

『彼』はいた。

『ぽ…ぽn@†∇∆ΩqEDπ!?!』

馬の悲鳴は何処吹く風よ。魔力の衝突による爆発の中に、馬の顔をした変質者は消えていった。

「じ、じゃあこっちの馬男の方が変質者…?」

「だから話を聞けって言ったろ？」

黒焦げ状態の『ぽに男だったナニか』を見下ろしながら、四人はようやく話し合いに持ち込めた。

あの砲撃の撃ち合いが終わって、互いにグロッキーになった所でようやくゴングが鳴ったのか、はやてとアインハルトの仲裁もあって話を聞く流れと相成る。

そこでようやくティアナは自分の過失を認めるに至った。

「す、すいませんでした！勘違いとは言え、戦闘を仕掛けて…。」

「気にすんなって。丁度良い戦闘訓練にはなったしな。ま、結果として犯人捕縛成功を喜ぼうや。」

広い心と、高い技量。そしてアインハルトから先生と呼ばれていたことを見るに、学校の教師のようだ。なるほど、慕われているのも解る。きつと言いい先生なn

「あとお嬢ちゃん、ミニスカのバリアジャケットで跳ね回るのはお勧めできねえよ？まあ俺に取っっちゃ眼福だったがな。」

「…はやてさん、やつぱり容疑者二名確保でも？」

「ま、まあまあティアナ。これで痛み分けでええやん？な？」

宥めていると、ムクリと元ぽに男が起き上がる。あの高出力の魔力砲弾でサンドイッチにされても、気絶だけで済むこの頑丈さ。いや、これがギャグ補正と言う奴なのか。

「ほなら、素顔を拝見や。」

ばさりと剥ぎ取られた馬顔。その下にあつた顔は、ありふれた、それでいて特徴という特徴が無い男の顔だった。

「どうしてこんな奇行に走ったのかしら？」

「だって…ポニーテールは最高じゃないッスか！ショートのようなじの色つぽさ…ロングの女らしさ、それら二つを完璧に兼ね備えてるんッスよ!?!…なのに最近、ポニーテールの女の子が少なくなつて…うっ！」

「……………」  
はやてとティアナは絶句した。まさかその様なことでこのような事件を起こすに至ったとは。

「わかる！わかるよ俺には！」

しかし同情を得たのは、他でも無い先生だった。

「お淑やかなロングの女の子が髪を結び上げるだけで、活発そうに感じる世の理の不思議！俺にはそれが解らないんだ。だがそこから感じる魂はホンモノだ！お前のムーブメント『ポニーテール』。俺はお前を認める。世の誰もがお前を非難しようと、俺はお前の味方だ。」

「お前さん…いや、師匠!!」

「だから吼えろ！お前の…ムーブメントの力を！それはきつとミッドチルダの…否！全次元世界の明日への礎となる！」

「しいいしいいしよおおおおおつっつ!!」

ガバツと、熱い抱擁を交わす二人の男。その間にはいつの間にもやらか、友情が、師弟愛かが芽生えていた。

「な、何なのよこの展開…。」

「はれ？はやてちゃんにティア…？どーしたの？」

あっけ取られていたティアナを背後から呼びかける見知った声。振り返って見やれば、なのはとヒカリが肩を組んで立っていた。二人ともほんのり顔は赤く、なのはの方はヒカリに比べて少し赤みが強い。

「なのはさん…ヒカリさんも…呑んでたんですか？」

「うん、まあちよつとした相談に乗ってただけだけど。」

「二人も今度一緒に呑もうね。ティアも呑めるんでしょ？ぱあつとやろうよ。」

酔いが結構回っているのか、妙に明るく、それでいて表情も二ヘラと崩れている。

普段なら明るい中に僅かながらも厳格さを残す彼女にしては珍しい。なるほど、アルコールが入ると違うのはこういうことを言うのか、とティアナは納得する。

「あ、貴方はさっきのお兄さん…？」

「よう…、そっちのお嬢ちゃんの酔いつぶりを見るに、あれからまた？んだみたいだな？」

「あ、はい。その…お釣りを返さないとして」

「いや、構わんよ。って痛え！」



「…やっぱり？…んでたんですね。」

わいのわいのと増えた女性陣と話に盛り上がる中、ぽに男はある女性のある一点を見つめ、ふるふるると震えていた。

「ん？どした？」

「ポ…！」

「『『『『ポ？』』』』』」

「ポニイイイイイイテエエエエルウウウウツツツ!!!」

「ひゃああつ!？」

ヒカりに飛び掛かるぽに男。そう、彼女の髪形。それは幼少期から変わらないポニーテール。ソレを見たぽに男は、まるで肉を見付けたライオンのごとく、そして怪盗ルパンの孫のようにダイブを敢行してくる。

「この………！」

ぎりつと握り拳を作る。右手に嵌められたブレスレットが呼応して、右腕のみに限定して白銀のガントレットを精製。

「変っ態!!」

顔面に殴りつけられる右の鉄拳。めぎよつ!と、妙な音とともに、ぽに男は錐揉みしながら地面にめり込んだ。

「師匠、これで思い残すことはないッス。…最後に…素晴らしい絶景を見ることが出来ましたから…。」

「そうか…。」

「もし出てこれたら…師匠の教示、伝授して貰っても構いやせんか?」  
「ああ。その時は行こう。俺とともに…『聖なる探索(ディバイン・クエスト)』へ。」

その返答にぽに男は喜んだのが、微笑みながら管理局員誘導の二元、護送車へと乗り込んだ。

けたたましいサイレンと共に去りゆく車を、先生は感慨深げに見送

りながら、関係者各位はどこか納得のいかない表情を浮かべていた。

## ミッドチルダの空腹少女（チャンピオン）

「ククツ……フハハハッ！」

薄暗い研究所の格納庫。照らされる照明の光に陰を作っている聳え立つ巨大なソレに、スカリエッティは狂気的な笑みを浮かべた。両手を広げ、作り上げた自らの作品を見上げる。

「名も知らぬ少女よ！君のために私は頭脳に縊りを掛けて仕上げた傑作だ！ククツ！一体どうやってこの逸品に対抗するか……楽しみにしているよ。」

モニターに映し出された少女―アインハルトーを見つめ、新しいオモチャがどのように遊べるか楽しみに行っている子供のような、無邪気で、そして狂気的な笑みを浮かべる。

「ドクター。この作品の予算のために今月の食費がほぼ無いのですが……」

「浪漫を求めるには時には忍耐も必要なのだ。そしてそれは空腹とて例外ではないのだよ、ウーノ。」

「はあ。」

「須く浪漫の先に結果を求めるのは別問題だね。私の中では今、あの少女への飽くなき執着が、食欲に勝っているのだ。済まないがウーノ。私は今からあらゆるパターンを想定してシミュレーションを開始する。」

「御随意に。」

そう言うとおそらくはコクピットに当たるところへといそいそと潜り込んでいくスカリエッティを見送り、ウーノは溜息を一つ。

「さて……今月もあそこにお世話になりますか。」

「ありがとうございます。」

所変わり、クラナガン中央通りの沿い。

街路樹が立ち並ぶ歩道の沿いにこじんまりとだが、一軒の喫茶店があった。余り広くはない敷地ではあるが、多くはない座席数ではあるものの、日曜日だけあってカウンターを含めてほぼ満席、ウエイトレスの少女もせわしなく料理やスイーツを配膳していた。

「なのはママ・3番さんにケーキセット二つ！コーヒートココア！7番さんはガトーショコラとモカのセット！」

「はいはい！ちよつと待ってね！ヴィヴィオ！2番さんに日替わりランチお願いね！」

「はい！」

#### 翠屋ミッドチルダ店

管理局の教導隊に所属する傍ら、オフの時間帯にこうやって母から教えて貰った料理の腕前を振るうのは、高町なのはである。そしてウエイトレスとして配膳するのは、なのはの愛娘たるヴィヴィオ。今日は日曜とやることで学校が休みなのもあり、こうやって店の手伝いをしていた。

先述の通り、教導隊がオフの時、と語ったが、やはりそこはシフトにもよるのか、不定期な開店はどうしても否めない。しかしそれを差し引いても、桃子直伝の腕前は客が足を運ぶには充分なほどであり、時折行列も出来るほどだ。

「なのはさん、こんにちは！」

「あ、スバルにノーヴェ、いらつしやい！」

カウベルをならして来店したのは、六課時代に部下であったスバルと、事実上そのスバルの双子の妹のようなノーヴェだった。二人とも今日はオフなのか、仕事の休憩で良く着てくる所属隊の制服ではなく、ラフな私服姿だった。

「どもっ！ヴィヴィオも手伝い頑張ってるな？」

「もちろん！開いてるお好きな席へどうぞ！」

ちょうど窓際の席が空いていたので、足早に着席する。

キンキンに冷えたお冷やとホカホカのお絞りをそれぞれ二つ、ヴィヴィオは慣れた手つきで配膳し、注文票を手にする。

「二人とも、注文は決まった？」

「あたしは…今日はナポリタンのスペシャル盛り！ノーヴェは決まった？」

「ん…じゃあ日替わりのスペシャルで。」

「確認します。ナポリタンのスペシャル盛り1点、日替わりのスペシャル。以上でよろしいでしょうか？」

コクリと頷く二人を確認し、

「それでは失礼いたします。」

ペコリと可愛らしいお辞儀を一つし、パタパタとオーダーしに向かう。

流石に畏まらなくても、と2人は思ったが、そこは顔見知りとは言えど、今は店と客の間柄に過ぎない。

「ヴィヴィオ、スツゴクウエイトレスが様になってきてない？」

「そーだな。なんつーか…看板娘って感じがしてるよ。…多分、この中にはヴィヴィオ目当ての奴とか居るんじゃないの？」

「あつはは！まつさかー！」

しかし、ノーヴェの懸念は的中していた。

「ハア…ハア……ヴィヴィオタツ…ハア…ハア…」

鼻息を荒くし、その目は一点。ウエイトレスとして走り回るヴィヴィオを追い続ける。目深に被った白いハット、白いスーツに赤いネクタイ。緑の髪をハットに仕舞い込み、さらにはサングラスまで着用している。

しかも怪しまれないようにしての配慮か、一応コーヒーを頼んで、それを啜ってはいるものの、かれこれその一杯で2時間近く粘っている。おかげでホットだったのが、既にアイス寸前にまで冷え切っていた。

「…今の僕にはこの時間が至福だ。ヴィヴィオを見ている時はね、誰にも邪魔されず、自由でなんというか救われてなきやあダメなんだ。独りで静かで豊かで…。」

「あの…コーヒーのお代わりは…」

「是非ともお願いしようじゃないか！」

いつの間にもやら空っぽにしていたカップを気遣ってか、ヴィヴィオ

がお代わりを尋ねたところ、即答。コンマ一秒の間もなく、返事が返ってきた。若干引きつりながらも、お代わりのコーヒを注ぐため、一旦カップを下げる。彼の口元は嬉しいのかなんなのか、常に釣り上がっている。

「ふふふ…サボってこの様なことをしているなどと、義姉さんにはとてもじゃないが言えないねえ。」

「そうですか。仕事をさぼっていた挙げ句、陛下にいやらしい目を向けていた、と?」

「いやいや、いやらしい目だなんて人間きの悪い。」

「どちらにせよ、折檻ですね。ヴィンデル・シャフト。」

「つて…なんで義姉さんがここに!？」

「黙りなさいヴェロツサ。サボるのみならず、陛下への背信ともとれる行為…例え聖王閣下が許そうとも、このシャツハ・ヌエラが断じて許しません!天誅っ!」

振り下ろされたトンファーが、数少ないテーブル席を真つ二つのVの字に叩き折る。監査官とは言え、そこは管理局員。咄嗟の判断で変態―ヴェロツサ・アコース―は飛び退いた。

「大体貴方はいつもそう!いつも目を離したらどこかへふらふらするか、人目に付かないところでサボっているか…!貴方のそう言ったところをシャンテも…!」

「いやいやいやいや!僕は関係ないよ!?シャンテには大したことを教えてないよ!?ただ、こつそり昼寝をするのに適した場所とか、お祈りの時にバレないように居眠りする方法とか教えただけ…」

「やっぱり貴方かあああああつ!!」

どったんばったんと、人目も憚らずに始める聖王教会に属する2人。客は悲鳴を挙げ、振り回されたトンファーは、買い揃えたインテリアを無慈悲且つ無残に破壊していく。

なのは、スバル、ノーヴェは、そんな光景をどこか遠い目で見つめ、ヴィヴィオに至ってはどうしたものかとオロオロしている。

「死になさい!一度生まれ変わって、聖王閣下に懺悔なさい!」

「だが断る!!」

ああ…、オークションで落札した年代物の椅子が、原形を留めないくらいに…。

もう店長であるのはの眼には光は無く、無表情に取り出した携帯端末を、まるでロボットのようには正確に、的確に操作。通話のスタンバイが出来たのか、端末を耳に当て、呼び出し音に耳を傾ける。その間にも店のガラスは割れ、扉は吹き飛び、もはやこの店はなんの店なのかすら分からないようになってきていた。数回のコール音の後、相手が呼び出しに応じたのか、それが途切れると同時に、なのはは一言。「もしもし、騎士カリムですか？」

暴れていた2人が凍ったのが分かった。

「本当に申し訳ありませんでした。2人には私の方から厳しい処罰と、双方の給料から店の修理費を天引きしておきますので、この件はどうか穏便に…。」

「あゝ、いえいえ。もう直ったんですし、まあ…気にしない方向で。」

翠屋ミッドチルダ店前の歩道

なのはからの連絡を受けて、聖王教会から特急でやって来たカリムに平謝りされ、なのはは正直タジタジだった。しかも、連れてきた謎の魔導師数人が店内に入ったかと思えば、一瞬のフラッシュバックの内に内装が新品同様に修復されていた。

ちなみに暴れていた2人はというと、カリムに連絡が行ったことを察し、次の瞬間にはまるで借りてきた猫のように大人しくなり、それはもう静かになったものだ。因みに今二人は、カリムの後ろで並んで仲良く正座で猛反中だ。

（ああ、なんでこんなことに…!）

（義姉さんが暴れるからでしょうが…。）

（それを言うなら、そもそも貴方がサボるのが一番の要因でしょう!?!）

（僕は壊してない！義姉さんが勝手に暴れただけじゃないか。）

(あ、貴方って人はあ……！)

「お二人とも？」

にこりと、満面の笑みで振り返るカリム。しかしその振り返る動作はとても穏やかな雰囲気はなく、圧倒的な威圧感と怒気を孕んだ物となっていた。

「帰ったらお二人とも、私と楽しいO☆HA☆NA☆SHIしましょうか？」

「き、騎士カリム！こ、これには深い事情が……！」

「そ、そうだよ！話を聞いて……」

「ねえ……？」

彼女のその一言と同時に周囲へどす黒い負の波動が、まるで水面に広がる波紋のように浸透していくのが見て取れた。一瞬だけだが、大気が、星が、否、軽い次元震すら思わせるような『歪み』を生み出したかのような……。

「それでは私はこれにて失礼いたします。」

スカートの手端を摘み、淑女のように一礼。とても手慣れ、そして様になっている。小動物の如く抱き合って怯える男女を、ずるずると引きずりつつ彼女は聖王教会所有の物であろう車に乗り込み、現場を後にした。

「さてっ！せっかく開店してるんだし、お仕事しよつか！」

「はぁ……！」

「スバルとノーヴェも、今から作り直すから待っててね！」

「あ、はい、ありがとうございます。」

わいのわいのと、あつという間に修復された翠屋に戻るなのは。その服の裾を引っ張る手があった。振り返ると、黒いジャージを着込み、フードを目深に被った少女。俯いているので顔は見えないが、体つきから女性だろうか？

「す、すいません。」

「ん？どうかしたの？」

「……を……さい……」

「………？」



ボソボソと、か細い声。耳を澄ませても聞こえるかどうかという小さな声に、なのはは思わず首を傾げる。

「どうかした？私に何か用があるのかな？」

「えっと……お願いがあるんやけど……よろしいですか……？」

少し上げた顔。フードの陰からブルーの瞳が顔を覗かせ、その目は余程重大なお願いなのだろう。ごくりとなのはは固唾を飲み込んだ。

「わ、私に出来る範囲なら大丈夫だよ。言ってみてくれる、かな？」

「そ、それやったら……」

いよいよだ。

二人の間に緊迫した空気が漂う。

どこからともなく

『T T T T T T T T T T』

『ココココココココココ』

そんな効果音が周囲に浮かぶ。

1秒の時間が流れるのも長く感じ、そして息苦しさすらなのはを支配していく。幾度となく戦場に立つてきたなのはですら、ここまでの緊張を味わったことは片手で数えるくらいだ。一番近いのは9歳の時、クリスマスに『彼女』と対峙したときだろう。懐かしいなあ、などと思い出に耽ることで余裕を持つとうと思っただが、空気がそうはさせず、再び張り詰めた雰囲気へ意識を向けさせられる。

喉が渇く。

嫌な汗が頬を伝う。

心拍数が上昇していく。

手が、足が若干震えている。

「パ……」

ようやく口を開いた。一文字目は『パ』。

……一体何を願うのか？出来る範囲、と宣ったが、それでもいざここまでの雰囲気となると、何を言われるか不安になってくる。

「パ……」

思わず聞き返してしまった。

その声は、身体と同じく若干震えていたかも知れない。

どうなる…？

「パンの耳を下さいツ!!」

「パ、パンの耳イツ!? そ、そんな、まさか…! パンの耳…って…:…へ?」  
「アカンの…ですか?」

唾然とした。アレだけの前振りがありながら、まさか要求されたのがパンの耳。なのははへにやりとうなだれた。

「はい、これ。これくらいでいいかな?」

「こ、こんなによーさん…ええの?」

ビニール袋一杯にぎっしりと詰められたパンの耳。それを見ながら、フードの少女は目を輝かさせた。

「特に使う予定もないし、もし良かったらいつでも取りに来て?…まあ店自体はたまにしか開けてないけど。」

「は、はいーおおきにー!」

手を伸ばし、袋を受け取ろうとした

その時だった。

吹きすさぶ突風に、なのはと、そして少女は煽られる。フードが捲れ、2本の大きなツイントールが姿を見せる。吹き付ける風圧に吹き飛ばされないよう、微々たるながらも必死に足を地に着けて堪える。

「だ、大丈夫…!」

「な、なんとか…!」

ようやく収まった突風。互いの無事と周辺を状況を確認する。

突発的な突風だったので、特に大きな被害はなく、木々の小さな枝が折れたり、道行く人々かよろけたり、まいっちな事になってたりしたくらいな物だった。幸いヴィヴィオ達も、店の中に入っていたので被害は皆無である。

「こ、こんな突風、自然に発生する物なの!?!」

ビル風とは言え店を開いてからと言うもの、ここまでの強い風は今までに経験はなかった。それだけに思う。

『ククク……出て来たまえ、謎の少女よ! 今日はこの傑作「ガジェット Type S 皆で叫ぼう! 究極のキック! 小道具という意味なのに幽霊とはこれいかに!?!」で相手をしよう!』

ガジェットの胴体、それは変わらない。しかし前回の物に比べ、四肢の肉付きがすっかりしてマッシュヴさが増加。その重厚さと力強さが見る者にインパクトを与えるには充分。

「…またスカリエツティか…。」

なのはは頭を抱えた。前回はなぞの格闘技者によって粉碎された彼の機ではあるが、こうして相手が科学者なだけに自分で開発した作品でリベンジをしてくるのは厄介だ。

「レイジングハート! セットア…!」

『出来ません。』

拒否されたでござる。

「どどっとうして!?!」

『複数のアプリケーションのアップデート中です。終了まで残り30分。』

「アプリケーション!? って何!?!」

『パ○ドラとモン○ト、Amazonのアプリケーション etc. …。』

「こんな時に限って!?!」

再びなのはは頭を抱えた。

「くっ! 硬い…!」

『フフハハハ!! どうした!?! その程度かね? 装甲材質を変えただけでこの体たらくとは…!』

なのはがレイジングハートのアップデートに追われる最中、アインハルトは既に交戦を開始していた。しかし、アインハルトの防戦一方。強固な装甲がアインハルトの拳を一切通さず、まともな損傷を与えられずにいた。

『拍子抜けだよ。霸王だか何だか知らないが、興を削がれる。』

「私は…まだっ…ぐっ！」

打ち込んだ拳。それはやはり装甲をひしゃげさせるどころか、へこみすらしない。逆にその硬度が、アインハルトの拳にダメージを与え続けていた。

『2回の邂逅で終わるとはね。しかし、この武装でとどめを刺して、全滅の最後というわけだな。ククク…』

ガジェット胸部と思われるシャッターが観音開きを開き、内部から大口径レーザーのバレルが展開される。

『塵と消えたまえ！メガ・ブラスターキャノン！』

照射される大口径の魔粒子による砲撃。その光は、アインハルトの真横を掠め、ビル街を抉るように迸った。どこかの108のロゴが描かれた装甲車を吹き飛ばして、その奔流はクラナガンの街を大きく、そして深く、まるでモーセの十戒の海の如く二つに文字通り大きな溝を創り出して左右に隔てた。

『ふむ…照準に難があるか。いや、彼我のサイズの相違かな？』

まるでわざと外したと言わんばかりににやりと口許をつり上げる。  
ちなみに、

この小説に死人は出ないので、街の人々はギャグ補正により無事だったりする。

『さあ…次こそは…』

めしやり

何か金属のひしゃげる音が周囲に木霊した。当事者であるアインハルト、そしてスカリエツティは目を丸くする。

途方もなく大きな破壊音。

それが一体何によって生み出された物なのか。

その正体。

どす黒いオーラ。

揺れる二つに結われた、少々クセのある長い黒髪。

同じく黒い戦闘衣装。

俯きながらも、前髪による陰りで目元は見えないが、その圧倒的な威圧感は肌を、そして機械を通して心の臓と脳に恐怖を与えるには充分すぎる物だ。

そしてその片手には、

3本の鋼鉄の突起が備え付けられた【ガジェットTypeS以下略】の左腕であった。魔力の流れを失った回路が、バチバチとスパークを起こして火花を散らしている。

『な……電氣的に中性な異種構造の宇宙合金の装甲を……意図も容易く破壊したと!? 実弾、ビーム兵器が全て無効の超強度で、アインヘリヤル三機をゆうに爆破する爆弾を、直に付けられ爆発されてもまったくの無傷。理論上は、彼のエースオブエースの集中砲火を受けても全く問題無し! しかもノンオプションで大気圏突入、ノンオプションで大気圏離脱が当たり前なこの金属をををつ!』

「……………アンタ。」

ぼそり、と。しかし【ガジェットTypeS以下略】の集音マイクがしつかりと拾え、そしてアインハルトにも聞こえる声が紡がれた。

「かけがえの無い物…奪われたこと、あるんか?」

『な! 何を藪から棒に!』

「ウチは…昔から奪われたもんある。…それもたくさん、失った記憶が生まれたときから、この頭ん中に入つとるんや。」

金属の腕を掴んでいた掌を握る。金属特有の甲高い音。そして小規模な爆発音と共に、それは爆発四散した。スカリエツティは思わぬ、ひっ!と情けない声を漏らしてしまう。

「ヴィヴィ様特製クッキー。…ケーキ。アイス、スコーン、サンドイッチ etc. …。それを…アイツは…あの男は…!!! 許せんツ!!!」

一体何をキレているのか? アインハルトにも、そしてスカリエツティにもそれは分からない。しかし、先ほどの威圧感とはまた違った

空気が周囲を包んでいた。

刺し貫かんばかりの、冷たく、そして底知れないナニか。

そして見上げた瞳に宿るその視線。否、これは…

『死線…!?!』

スカリエツティは震え上がる。

これは…

この眼はマズい。

見ただけでこれから起こる惨劇を想像できてしまい、正直少しチビった。

『しかし…私とて科学者の端くれ…！目の前の事象！それを科学の力で乗り越えず何とするのだ!!』

操縦レバーを握り直し、自らに活を入れた。

そうだ、銀碧の髪の少女を超えるために自らの科学と金をつぎ込んだのだ。ここで負けるとあつては…！

「食べ物への恨み…！食べ物だけにしつかり味わいや…！」

瞬間、彼女の瞳からハイライトが消え失せる。威圧感に加え、滲み出る魔力。右の拳がぎしりと握り締められる。

『ここで叫ぶのはやぶさかではないのだがね…！整備士泣かせのこの武装で、君を屠ろうではないか!!』

そう。

究極にして至高の一撃。

その威力と、パーツの摩耗具合をシミュレーションした所、途轍もないくらいの部品がイカれる、という結果が弾き出された。

しかしそうまでしてでも勝たねばならない。

いつの間にか科学者として、スカリエツティに意地…プライドが芽生えていた。

「パンの耳の仇イ!!」

パンの耳。

喫茶店などでよく要らない部位として破棄されることがある。人によっては食べない人も居るが、栄養としてはパンと変わりなく、むしろその歯ごたえが好きだという人も居るだろう。

彼女ージークリンデ・エレミアーはそんなパンの耳をこよなく愛する一人だった。

遙か後方…大通りの道路の隅には、安物の透明ビニールに入れられていた、翠屋のパンの耳。それが突風に煽られたときに散乱。見るも無惨に道路へと鏝められていた。

今日の夕食、そして明日一日の食事を不意にされたこと。

その怒りが、無意識による超攻撃モード…通称『エレミアの神髄』の発現へと至らせた。

「殲撃…！」

ジークの右手に、洗練された魔力が集約され、それによる半透明な魔力の爪が精製される。他には何も要らない。拳、その『鉄腕』こそが彼女の最もたる武器なのだ。

『ガジェットTypes以下略』は背中ブースター、そして脚部の跳躍により空高く舞い上がった。

高く、

高く、

そしてスカリエッティは、攻撃に向けてジェネレーター出力を上昇させる。

『リミット…解除！出力…マキシマム。さあ…！受けたまえ！浪漫と！情熱と！喜びと！愛と！怒りと！哀しみの！究極ウ！！ガジェットオオオオツ！！キイイイックウウウウツ！！』

それは全てを賭しての一撃。そして魂を込めた叫び。そのスカリエッティによる凄絶なるシャウトに、ガジェットのマイクは火花を散らして破損。

降下に向けて、背後のブースターを上方方向に。点火された火は、その残滓を残して対象を推進させる。

そして右爪先にエネルギーフィールドを構築。

一点突破。

その一言に尽きる攻撃だ。

「一撃…必殺！！！」

迫り来る、自分の十倍はある体躯を持つ『ガジェットTypes以





「うつ…！うつ…！！ウチの…パンの耳イイ…！！」

「ああっ！ほらほら泣かないで！まだあるから、ねっ？」

めそめそと地に手を付けて泣きつくジーク。余程堪えたのか？そこまでパン耳を愛しているのか？

そんな彼女を甲斐甲斐しく慰めるなのはの手には、再びビニールに入れられたパンの耳。

「で、でも、あの転がってもうたのも勿体ない…。」

「あく。あれは流石にばっちいから、新しいのをあげるよ？」

「でも…食べ物粗末にしたらあかんよってに。」

ここは卑しいと捉えるのか、それともがめついと捉えるのか、はたまた儉約家と捉えるべきなのか。

「あの…すいません…。パンの耳を…分けて頂けないでしょうか？」

背後から話し掛けられ、振り返ったなのはは、目を丸くして驚いた。

目深帽に膝下当たりまであるトレンチコート。口にはマスク。目にはサングラス。…どこからどう見ても不審者だ。帽子の影には紫の髪を結っているのか、見え隠れしている。

「なんだか今日はパン耳が大人気だなあ…。」

不思議なこともあるものだ、となのはは疑問符を浮かべつつ、パン耳を求めて店内へと姿を消した。

## ミッドチルダの新入り（ニューカマー）

モダンな色合いの廊下をひた進む少女…高町ヴィヴィオは、暫くぶりに生徒会長に呼び出しを受けた。

今までは自分の属する小等科の学年の書類などを持っていくこと、つまり自分から呼び出される前に行くことはあれど、会長から呼び出しを喰らうことは余りない。

呼び出された理由を考えながら、生徒会室へと歩を進める。

書類の出し忘れ?…は恐らくはない。

新しい仕事?…であれば、大抵は担任を通じて来るはずだ。

そもそも直接提出する書類でもなければ、中等科に足を運ぶこともないものだ。

普通なら小等科の生徒が中等科の校舎に居たら物珍しい目で見られそうな物だが、ヴィヴィオは中等科の生徒にとって見慣れた物なのか、特に気にするまでもなく、むしろにこやかに歓迎されていた。これも彼女の人懐っこさと愛嬌の賜物だろう。

話を戻すが、理由を考えている間にもすれ違う中等科の先輩とにこやかに挨拶を交わす。

さて、前回呼び出された理由は何だったか…。

挨拶はかわせど、考え事をしていてその注意力はやはり普段よりも散漫に必然となってくる。

「わっ!?!」

「きゃっ!?!」

廊下の曲がり角でぶつかってしまった。お互い、強かに臀部を打ち付けたのか、片や涙目に、片や痛む尻を撫でている。

「ご、ごめんなさい。」

「い、いえ、こちらこそ…私の不注意で…。」

「…あれ?確か貴女は…アインハルトさん…でしたか?」

「そう言う其方は…ヴィヴィオさん?」

ぶつかった相手は、生徒会室で出会った先輩のアインハルトだった。

「どうしてヴィヴィオさんが中等科に…？」

「生徒会長に呼ばれまして…」

「そちらも生徒会長に？」

「も…と言うことは、アインハルトさんも…ですか？」

そうなる二人連れ立って生徒会室へ向かうことになるのは必然だ。アインハルトはもちろん、ヴィヴィオもある程度歩き慣れた廊下を、横並びになって歩いていく。

「アインハルトさんは…生徒会長に何故？」

「何故…と言いますと…まあいつも会長閣下が私でもこなせる『雑務』を任せてくれるんです。その件かと…。」

彼女の言う『雑務』、というのは『特務』を意味する隠語であり、特務関係の人間間で通ずるキーワードとなっている。何らかの探りを入れられない限り、大抵はこれで分からない者には分からない。

はてさて話は変わるが、前回のポニ男事件において生徒会室で邂逅して以来、出会わなかった二人。しかし、こうして歩きながらも面と向かって話すとなると、なかなか話題が出て来ない。物静かなアインハルトならまだ分かるが、社交的で明るいヴィヴィオですら引き出しがないともなると八方ふさがり。無言のままに生徒会室前に辿り着いた。

『入りたまえ。』

「失礼します。」

凜としたエリカの入室許可、がちやりとスタンダードな効果音を伴い、入り口のドアを開ける。室内最奥の、どっしりとした机と、その附属である椅子に座り、堂々とした佇まいの彼女が待ちかねたと言わんばかりに椅子を180°回転させて二人の方を見る。

「ふむ、二人連れ立って来たのか。それは重畳。お互いに待つ手間が省けたと言うものだな。」

「…会長閣下。まさか…私の『雑務』にヴィヴィオさんを…？」

「察しが良いのもまた重畳、だな。そのまさか、だよ。…ふむ、この言い回し、一度使ってみたかったのだ。」

「あ…正直、話が見えてこないんですけど…。」

話を進めるエリカとアインハルト。その二人の会話についていけ  
ずに怖ず怖ずと小さく手を上げるヴィヴィオ。

「なに、君にもストラトス君が請け負う生徒会の『仕事』、その一部を  
手伝って貰おうと思ってるね。」

「…やはりそうなりますか…。」

溜息しか出ない。特務の危険性。それを肌身で、そしてそれを現場  
で感じるからこそ、アインハルトはエリカの発案に否定的だ。

だが生徒会長の決定に、実質部下に当たるアインハルトは拒否権が  
ないのだ。…彼女なりの熟考の末に弾き出した決定。…何らかの考  
えあつての物だと信じよう…念の為。

「わかりました。それで…何をすれば…？」

「一度君の力量を測りたい。ストラトス君。」

「…わかりました。」

「??？」

「…えーつと…？」

「ヴィヴィオさん、手加減無しでお願いします。」

ヴィヴィオは気付けば学院の敷地内にある模擬戦闘用のフィール  
ドにいた。周囲半径50メートル。直径100メートルの円形状の  
フィールドに、周囲には夜でも試合が出来るように上から照らすライ  
トが設営され、観戦も出来るように観客席がフィールドを囲ってい  
る。フィールド中央の天井には、試合時に対戦者同士の情報表示用の  
大きなディスプレイが四面各方に向けられていた。

ここまで大がかりな物を設営している理由として、学院の成績上位  
者同士による模擬戦トーナメントを行うためである。観客席を設け  
てあるのも、応援の他に観戦することでの技術吸収を目的としてい  
る。

そしてその中央。

アインハルトとヴィヴィオ、双方が5メートルほど距離を取って向かい合っていた。

『高町君。遠慮は要らん。ストラトス君を倒す気で行きたまえ。』

離れた実況席でマイク越しにエリカは言う。

『なお審判は…。』

『実況席からで悪いが、俺がさせて貰うぜ?』

「だ、誰ですか?」

「ヴィヴィオさん!あの人にその台詞は…!」

『誰だ彼だと聞かれたら…答えてやるのが世の情け!』

「がんっ!と実況用の器具にブーツで片足を乗せる。口にはどこから取り出したバラをくわえている。とげが唇に刺さったようで、涙目だ。」

『次元の破壊を防ぐため…次元の平和を守るため…愛と真実の教職を貫くラブリーチャーミーな教師役!』

『時間もないサクサク行こう!』

『ちよっ…会長ちゃん!』

『毎回毎回名乗りが長いのだ。巻いていくぞ。』

「ヴィヴィオさん、あの先生に名乗りを求めてはいけません。長つたらしい名乗りを聞かされますので。」

「は、はあ…。」

『気を取り直していこう。ルールはインターミドルの形式に則り、ヒットポイント形式。持ち点10000から始まって、勿論ゼロになった方の負け。有効打…クリーンヒットであればあるほどごっそり削れる。クラッシュは無しで。…両者用意!』

「えっ?えっ?」

「構えて下さい…!」

『始め!!』

結論から言おう。

開始1分で予想通り：アインハルトの圧倒的な押しにより、ヴィオのHPは300、アインハルトは9600と大差を付けていた。アインハルトの減少値は、ヴィオの必死の抵抗を防いだ際のダメージのみである。

『…おいおい、会長ちゃん。こりゃあ：マズいでしょ？』  
『……………』

片や霸王流を極め、特務での実戦経験も豊富なアインハルト。それに対して魔法の成績が優秀とはいえ、格闘戦に対しての経験があると言う情報が無いヴィオ。この結果は火を見るよりも明らかだった。

『もう良いんじゃないのか？ここまでやり込める必要は…。』

『いや…まだだ…。』

『おい…！』

『当人の闘志が未だ灯っているのに、我々がタオルを投げることが出来るか？…私は彼女の底力を見てみたいのだ。』

打ちのめされようと、その目は鋭く、焦点も定まっているヴィオ。実力差を目の当たりにしても、その意志は折れることなく、それどころかアインハルトに一矢報いんと狙っていた。

『その闘志…まだやるのですか？』

『…まだ諦めません…！成り行きだけど…それでも何もせずに試合に負けたくはないんです！』

最後の一撃になるかも知れないとっておきの切り札。

初めてだから上手くいくか分からない博打。

しかし

それでも

何某かの結果を残せるなら。

「行きますアインハルトさん！」

虹色の古代ベルカ式。

聖王が受け継ぐというカイゼル・ファルベ。

それを見たとき、アインハルトの中で：彼女の受け継がれた記憶の中でフラツシユバックが起こる。

(オリヴィエ：ゼーゲブレヒト：)

かつて先祖であるクラウスが護れなかった女性。ゆりかごのコアとなり、人としての生涯を閉じた彼女への想いがあふれかえる。

(覇を以て和を成す：。オリヴィエ：クラウス：。私は：。！)

その瞬間、現実へと意識を戻された。

どれくらい時間が経った？

長いように見えて：しかし短かったのか：、ヴィヴィオとの距離は未だある。

「これが今の私の：。全力全開っ!!」

ありつたけの魔力を総動員してきたのか、今までの比ではないほどの間合いの詰めだ。二人の距離が一瞬にして無くなる。

しかし、

アインハルトがそれを目で追えない物でも無かった。

(踏み込むその勢い：。それを利用して：。終わらせませす：。！)

そう、ヴィヴィオが踏み込み、一撃を繰り出すであろう事は容易に読める。ならばその力を利用すれば良いだけ。

無慈悲とも思うかも知れないが、これに自分が勝てば、ヴィヴィオを戦場に出さなくて済む。

そう：

クラウスがオリヴィエの身を案じて挑んだ戦いと同じく、この戦いに勝利したならば、オリヴィエ：。否、ヴィヴィオの身を危険に曝さずに済むかも知れない。

(あの時のように：。あの時のような絶望は：。もう要らない！)

意を決したその右手、そして両足に白銀の風と魔力を纏う。拳足から練り上げた力を拳に込めて打ち抜く、アインハルトが持ちうる霸王流最大奥義。

距離を詰めるヴィヴィオが射程圏内に収まった。

全力を以てして、この一撃を打ち込む。

そうすれば…

戦いとは無縁の平穏な人生を送って欲しい。

その一途な想いを乗せて。

「霸王っ！」

「一閃必中っ！」

ヴィヴィオが更に身をかがめた。

一撃を打ち込んでくる。

それを躲してカウンターを打ち込む。

下手をすればオーバークル。

しかしそれで危険な特務から離れられるなら。

それで

構わないっ！

「断空…っ!?!」

打ち上げた拳。

それはヴィヴィオのボディを捉えた。

そのハズだった。

しかし、振りあげた拳は、文字通り空を切った。

躲された!?

「セイグリッドオ…!!」

「ハッ!?!」

躲されたと判明した瞬間、いや、カウンターの断空を放ったときから感じていたスローモーションのような空気と、引き寄せられた意識。それは相対する彼女の声によって現実に引き戻される。

「ブレイザアアアアアッ!!!」

虹色の閃光を最後に、アインハルトの意識は途切れた。

「ハッ!?!」



ゴチン！

「いったあああ!？」

「つつ!？」

目が覚めて勢いよく起き上がると、額に鈍痛が走る。ぶつかっただであろう恐らく女子とアインハルト、二人して額を抑えて悶絶する。

「ふう……あれ……ヴィヴィオさん……?」

「あ……アインハルトさん……おはようございます……。」

「……ここは……保健室、ですか?」

見渡せば、暫く前に貧血で担ぎ込まれた場所に変わりなかった。いつも通りの消毒液に塗れたような匂いと、嫌と言うほど白さを強調した風貌である。

「どうして私は……?」

「えつと……。」

「それについては私が説明しよう。」

しゃつとカーテンを勢いよく開いたのはエリカだった。

「はつきり言おう。ストラトス君。君は高町君と模擬戦をしていたのは覚えているか?」

「……えつと……はい。そうでした。臍気ながら……ですが。」

「うむ。……それで君は高町君に負けたのだ。」

…

……

……

「えつと?」

「まあ覚えていないのも驚くのも無理はない。なんせ九割以上残っていた体力を一撃で根こそぎ奪われたのだからな。」

「……はあ。」

「君は最後に、ヴィヴィオ君の一撃に対してカウンターを打ち込もうとした。」

「……そこまでは大体思い出しました。たしか……断空を放ったように……。」

「そう。しかし、だ。高町君の繰り出した一撃はそれを躲し、君のカウ

ンターに『カウンター』を放った。それがもうもの見事に、芸術的なまでに綺麗に、な。」

…そうだ、思い出した。

断空の打ち上げを、文字通り掠めるくらいにギリギリに躲して、身体の勢いを利用され…そして…

「セイグリッドブレイザー…でしたか。その打ち下ろしをモロに食らった、と。」

「思い出したようだな。そう言うことだ。」

正直シヨックは隠しきれない。最大奥義を見事に利用されてしまった。これでは霸王流を受け継ぐものとして、クラウスに顔向けできないではないか。

「さて、高町君。『雑務』の件だが…。」

「は、はいっ！」

「後日、生徒会室に顔を出すように。ストラトス君と共にこなして貰う『仕事』があるからな。」

「わ、わかりました！」

その元気な返事に満足したのか、エリカはクールに口元を緩めて保健室を後にした。

残された二人の間に漂う微妙な空気が息苦しい。

「え、えっと…よろしくお願いします。アインハルトさん。」

何とかしようと、当たり障りのない言葉を選んだ。

「…わかりました…、よろしくお願いします」

未だ敗北よりも、オリヴィエの血を受け継ぐ彼女が戦場へと出ねばならない事実…何の因果か、まるであの時と同じだ。受け入れられない現実と、止められなかった無力さに打ち拉がれるアインハルト。何処までも巡る因果だった。

## 古代ベルカの英霊（ヒーロー）

『任務完了だ。帰投したまえ。』

思念通話から聞こえるエリカの音声。アインハルトとヴィヴィオ、二人は今クラナガンの次元港付近にある廃棄倉庫に来ていた。

理由としては…言わずもがな『特務』である。

前話にて、何の因果かヴィヴィオに敗北を喫したアインハルト。エリカの命により、ヴィヴィオも特務メンバーへと加えられた。始めは戸惑ったヴィヴィオだったが、それでも自分を必要としてくれるならと承諾。かくして何の因果か、過去のベルカにおいて名を連ねた二人の王の血を引く彼女らがタッグを組むことになった。

そして今回、ヴィヴィオの初任務。

諜報班から、次元港でテロを企てている連中が居ると情報があり、規模が数人程度と小規模であったことも踏まえ、同行と相成ったのだ。

「任務完了、想定内の結果です。」

「す…凄い…。」

次元港の近郊にある廃棄倉庫。そこで質量兵器で武装して、犯行前の決起をしていたテロメンバーだったが、アインハルトの拳術の前には無に等しく、呆気ないほどに終わってしまった。

圧倒的なまでの無双。

まるで最大レベルの呂布が雑魚の蔓延る野に放たれたように。

あんな人にマグレでもなければ勝てるはずもない。

「これが特務です、ヴィヴィオさん。」

「は、はいっ！」

鮮やかなまでの蹂躪に呆気にとられたヴィヴィオは、アインハルトの一声で我に返る。

「貴女がこれから関わるのは、恐らくは命のやりとりが絡む任務。…そんな物に挑む覚悟はありますか？」

「命…。」

「そう。一歩間違えれば、恐らくは命を落としかねません。…それで

も?」

「大丈夫です。…私は、ママに傷付きながらも命を助けられたんです。助けられた私だから、力になりたい。助けを求める人の声に応えたいんです。」

その目は何処までも真っ直ぐで、そして澄んでいた。まるで…過ぎ去りし日のオリヴィエのように…。

「…このガキ共があ…!」

「っ!?!」

テロメンバーの一人が、まるで生まれたての子鹿のように足を震わせながら立ち上がる。

「切り札に置いておいた物を…使うことになるとはよお…!世の中わかんねえな…!」

懐から取り出したのは注射器だ。シリンジの中には見るからに危険そうな紫の液体。

見るからに違法の匂いがプンプン漂ってくる。

「捕まるくらいなら…テメエら皆殺しにしてやる…!」

醜悪な笑みを浮かべ、頸動脈に撃ち込まれる針先。

ピストンを押し込んで注入されていく液体。

液体を注入し終えたとき、男の手からカラリと注射器が滑り落ちる。彼の手はふるふる震え、口からは涎を垂らし、そして目の焦点は合わない。

「ハ…ヒヒヒ…!」

不気味な、そしておぞましい笑い声が響く。

浮ついた眼で、アインハルトとヴィヴィオを捉える。しかしその目は既に人のそれではなく、結膜に浮かぶのは血管。それが遠目に見ても解るほどに表立って見えるのだ。充血やそう言ったものではない、血走っている。

「カ…ハアアッ!!」

ノーモーション。

何の前動作もなく男は消えた。

ように見えただけで、瞬時にアインハルトとの間合いをゼロにし

た。

「なっ…?!」

気付いたときには既に懐にもぐり込まれ、柔らかなその腹部に拳がめり込んでいた。胃から上り来る圧迫感。無理やり胃を変形させられ、口から強制的に息が吐き出させられる。

そしてその衝撃を受け、アインハルトの華奢な身体は為す術も無く吹き飛ばされ、朽ちかけの壁を打ち破る。

「アインハルトさんっ!!」

「も、問題は…ありません…。しかし…。」

口から血を流しながらも、ダメージを受けた身体に鞭を打って起き上がる。

それは問題ないとして、アインハルトはダメージ諸々よりも、相手のこの圧倒的なまでの力を危惧していた。

テロリストが打ち込んだあの薬。恐らくはその効力と異質さたるや、目の前で証明されているのだ。

「グッ…ガアアア…ッ!!」

皮膚はひび割れ、そして人成らざる色へと変色。爪は鋭利に、そして長く伸びる。歯は犬歯がまるでドラキュラかと思わせるようなほどに尖っており、筋骨格その物も本来の体格とかけ離れたほどに巨大に変貌している。

「これは…この力は…!!」

「■■■■■■!!」

もはや形容しがたい雄叫びと共に踏み込んでくる。1回目は不意打ちこそ受けたが、2回目はそうはいかない。薙ぎ払われる左手をブロックする。しかし、人としての力の『タガ』が外れた彼の筋力は推して知る物であって、避けるべきだったとアインハルトは後悔する。

「ぐっ…ぎ…!!」

踏ん張ることなど到底叶わず、吹き飛ばされた彼女は、床を二転三転転がってようやくやく止まる。

(な、何という腕力…!)

もはやこの姿では歯が立たないだろう。それ程までに奴からのダ

メージは大きい物だった。それならば、アインハルトのとるべき行動は一つ。

「参ります…武装形態!!」

碧銀の魔力が溢れ出し、アインハルトを包み込んだ。しかし、奴にはそんな時間は与えるものではない。構わず突っ込んで手刀を突き出す。先ほどの腕力と鋭利な爪。それらが合わされば人の肉体を貫くことなど容易い。

そう、

本来ならば。

「ハアッ!!」

突き出された爪を肩の上を通すように回避し、その腕を縫うように腕を回して右ストレートを顔面に撃ち込む。

クロスカウンター

踏み込みも、相手の何もかもを利用した反撃。その一撃に堪らず奴は吹き飛ばされ、今度はあちらが二転三転する羽目となった。

「ぎっ…ググッ…!」

ヘッドクォーター  
「H Q、こちらストラトス。対象一人がおそらくは違法薬物を投与、変異。これより鎮圧行動に移ります。」

『了解。くれぐれも無理はするな。念の為に増員を送る。出来るならば持ち堪えてくれ。』

「了解です。オーバー。」

耳に当てられた通信機によって報告と指示を仰ぐ。案の定、何とかしなければならぬようだ。まあアインハルトにとってこう言った状況は慣れっこだが、今回は若干違ってくる。

(…ヴィヴィオさんに…気を向かないようにしなければ…!)

そう、アインハルトが懸念するのは同行したヴィヴィオである。倉庫の隅で座り込んで震えているところを見るに、その心象を表す感情は火を見るより明らか。

恐怖

それが彼女を支配している。離脱するように指示しようにも、あの

状況ではまともに走ることもままならないだろう。と、なれば、増援が来るまでアインハルトが引きつけるか、もしくは奴を無力化するか、だ。

(正直…増援が来るまで保たせられるか分からない…！でも、ヴィオさんを傷付けさせるわけには…！)

ゆらりと立ち上がる幽鬼のような異形。その口許は釣り上がり、まるでこちらの力不足を嘲笑っているかのよう。しかし、アインハルトは未だ冷静である。

(こちらに来るなら…それは願ってもないことです。)

アインハルトは人差し指と中指、それを小刻みに自分の方へ曲げる。

つまり、

『掛かってこい』

だ。

「キヒ…ひ…!!」

薬のせいか、それとも素の性格からか、やはり短絡的である。安々と挑発に乗ってくれたのか、ゆっくりとこちらに歩み始める。

そう、それで良い。

少しでも相手をして貰おう。

目の前で繰り広げられる格闘の応酬に、そして異形の姿、さらにはアインハルトの姿を見て混乱していた。

銀行強盗によって人質にされた際、助けてくれた女性。それがアインハルトだった。今の今まで気付かなかったし、素の体格でも他を圧倒する程の力を持つだけに、ヴィオにとつて予想だにできなかったことだ。まさか…ストライクアーツを学ぶ切っ掛けをくれた人が、こんなに間近にいたことが意外や意外だった。

そして、目の前の異形の姿。やはり年齢は10歳だけあり、人成らざる姿と化したソレに嫌悪感を抱かざるを得ない。もはや生物災害物の映画に出て来そうなクリーチャーが、目の前で闊歩しているの

だ。それだけで得も知れぬ恐怖を味わうのは当然だろう。

…本来なら、ここで恐怖に支配され、震えているだけならば誰にでも容易に出来る。しかし…

「私…私だって…!」

華奢で、そして小さな拳を握り締めて立ち上がる。震えて鳴らす歯の音が酷く耳障りだ。足も笑っているのか踏ん張りが利かない。

だが…目の前で打ち合っているとは言え、相手のスタミナに尽きはないのか、逆にアインハルトは若干息が上がって来ている。

このままでは遠からず…!

「今度は…私がアインハルトさんを…助けるんだ!」

その言葉が引き金トリガとなったのか、震えは不思議と治まり、踏ん張りも利くようになった。これは…これなら…!

「…!? いけませんヴィヴィオさん!!」

「■■■■■■■■■■!!!」

アインハルトの叫びと、奴がヴィヴィオに気付いて駆け出すのと同時だった。奴を引き止めんとアインハルトも走る。しかし、奴との戦いで使った体力は殆ど残っていないかった。

「一閃必中…!」

あの時のようなマグレはないだろう。しかし、ここで奇跡なら…起きてもバチは当たらないはずだ!

奴が詰めて貫かんと、左手を振り上げる。

「セイグリッドオ…!!」

右手に溜め込んだチャージでできるだけの魔力。一撃で…仕留める…! 願ってもないカウンターの好機だ!

奴の左手が振り下ろされると同時に、更に一步踏み込む。爪が背中を掠め、制服を裂き、肌を晒す。鈍い痛みが走り、それに伴う出血に一瞬顔をしかめるが、それでも…ここで止まるわけにはいかない。目の前には相手の鳩尾が無防備にさらけ出されている!

「ブレイ…ザアア…!!」

とつた…!

ヴィヴィオも、不本意ながら見ることにしか出来なかったアインハルト



トも、そう確信する。

しかし

ヴィヴィオの拳は空を切った。

奴は振り下ろした左手の勢いそのままに、地に着いた左手を支点に一回転。空振りした拳と跳躍によって、無防備なヴィヴィオの、そして裂傷によってさらけ出された背後を取る。

「ヴィヴィオさ……！」

振りあげられた手に光るのは、奴の鋭利な爪。

もう間に合わない……！

必死に手を伸ばす。

また……護れないのか……？

これでは……このままでは……！

(クラウス……オリヴィエ……！私は……!!)

(君は……どうしたい？)

(っ!?)

突如として脳に響いた男性の声。

ハツとした時には、周囲の風景から色は消え、自身の身体も動かない状態にあった。しかし、意識だけはハッキリ有り、目の前で引き起こされようとしている惨劇がすんでの所で止まっている。

(これは……一体……?)

(文字通り、時は止まっているんだ。)

まただ。また男性の声がする。

(君はどうしたい?)

先程と同じ質問だ。姿は見えないが、この声は知っている……！

(あの子を護りたい。そのために君は対価を払えるかい?)

(対価……?)

(そう。この世は等価交換。あの子を助ける代わりに物を……君は自身から差し出すことは出来るのかな?)

(……私自身から……)

目の前のヴィヴィオを…何かを失えば、助けられる？こんな詰んだとも取れるような状況で？

…半ば諦めていた。その現状を覆す事が出来る？

それならば迷う必要など無い。僅かな可能性でも、未来を変えられるなら…！

(…出来ます…！ヴィヴィオさんを助けられるなら…私は…！)

(了解したよ。…ならば私は子孫の願いのため…力を貸そう。)

(子孫…!?ではやはり貴方は…!!)

世界に色が戻った。その事に気付かされ、すかさずヴィヴィオに焦点を戻す。

力を貸す、と言っていた。しかしあの状況を覆すなど…

『成る程…ウイルスを打ち込んだことで、脳のリミッターを外しているのか。』

「が…あ!？」

どこから現れたか…、自身と同じ碧銀の髪を靡かせ、爪を立てた奴の腕を何の事は無く掴んでいた。奴も何が起こったのか分からないようではあるが、一旦仕切り直そうとしているのか、腕をほどかんと藻掻く。

しかし、そんな行為ですら微動だにせず、ただ掴んで佇む。

『私のいた時代ほどではないとは言え…、この時代もやはり争いは絶えないのだな。』

腕を持って、片手で軽々と奴を投げ飛ばす。朽ちかけたコンクリの壁を破壊し、崩れた瓦礫に奴は埋もれる。

白いマントをはためかせるその容姿を、あらためてアインハルトは一瞥する。

青と紫の虹彩異色。ライトグリーンと白を基調とする胴着にも似た衣装。特徴的な前髪。

間違いなく、そして疑うことは出来ない。

「クラウス…イングヴァルト…!？」

『…やあ。私の子孫…アインハルト。』

遙か昔に存在した古代ベルカに名を連ねる王の一人である『霸王イ

ングヴァルト』。そう名乗る彼と、そしてアインハルトが受け継いだ記憶の容姿との一致。それは彼が紛う事なき本人であろう可能性が高いことを示していた。

「どうして…貴方が…」

『話は後だ。…今は…この状況を打破しよう。』

覆い被さってきた瓦礫を吹き飛ばし、奴はピンピンした状態で再び目の前に姿を現す。

「やはり…あれでは倒れませんね。」

『しかし、私達二人なら…霸王が二人揃うならば、屠ることも不可能ではないよ。』

かつて此程までに頼もしい言葉はあっただろうか？僅かながら口許をつり上げ、静かな笑みをこぼす二人の霸王。

『ヴィヴィ、下がってて。ここは私達で片を付けよう。』

「は…はい。」

『アインハルト、やれるね？』

「もちろん…！」

程なくして

周囲を揺るがすほどの轟音が響き渡る。

そして増援部隊が到着したのは、それから数分後のことであった。

「…成る程、薬剤を投与し、それで変異した、と。」

「はい、そう…見受けられました。」

部隊を率いてきたのは、特務メンバーの先輩にあたる人物。魔法学院のOBで、槍の達人でもある。肩まで届く長髪と、紫の帽子にジャケット。鋭くカミソリのような目つきで、長身でがっちりとした体格、そして左頬に入った傷から厳つい印象を受ける。しかしアインハルト曰く、面倒見が良く、時々ではあるが任務の合間に戦闘訓練に付

き合ってくれるという。そして先陣切つて豪快且つ怪力を活かした戦いをする彼を人は、『ゴリランサー』と呼ぶ。

…因みに、

面倒見が良い、と記載はしたが、一時荒れていたときには、気に入らない人物はその怪力から放たれる右ストレートをプレゼントするのがお約束、らしい。

「あ”?”」

「ど、どうかしたんですか?先輩…」

「いや…なんかすげえ今ムカつくことを言われたような…。」

「…そうなんですか?私には何も…」

「まあいい。もしかしたら生物兵器の類いかも知れねえ。この男とその一味の身柄を確保するのは当然として、打った注射器の回収もしておくか。…なんかききな臭い匂いがしてきやがるんでな。研究班に解析させておくとしよう。」

「はい、お願いします。」

「あとまあ…お前、初陣なんだつてな。よくチビらなかつたもんだ。」  
「なっ…!?!」

まさかの言葉に、ヴィヴィオは顔を真っ赤にする。さすがの彼女も、デリカシーの無い言葉には反応してしまう。抗議の一つでも入れてやろうと口を開いたとき

「大抵は最初の現場での恐怖に耐えられねえ奴は、チビるか、逃げるか、気を失うか、あとはまあ錯乱するか、大抵このどれかに当てはまる。お前は良く逃げずに頑張ったじゃねえか。上出来だと思っぜ。」

「ほえ…?」

…なるほど、アインハルトが言う面倒見の良さと言うのは、こういうことを示唆するのか。口は悪いが、その端々に心配や優しき、労いを見せてくれる。それだけにアインハルトは先輩を慕っているのだろうとヴィヴィオは納得する。

「じゃあアインハルト。帰ったら治療と報告書を…」

そう…続けようとした先輩は、言葉を詰まらせた。

「お、おい!大丈夫か!?!」

その視線の先には…

息を荒くし、頭を抱えて壁により掛かるアインハルトの姿。その顔には汗が滲み、顔も上気しているのか赤みを帯びている。

「アインハルトさん!?!すっかりして下さい!アインハルトさん!!」

「看護兵!看護兵!!」

二人が必死に叫ぶ中で…アインハルトは遠のいていく意識と共に、自身の中の魔力がほぼ尽きていたことを認識するに至る。

『何故?』

や、

『どうして?』

と言った疑問はなく。

だが悟った…

魔力が彼の言う『代償』なのだ…。

## ミッドチルダの幽霊？（ゴースト）

日が昇るか否かの時間帯。

アインハルトは日課のロードワークの影響か、自然と目が覚めた。特別な事も無い限りは基本的に同じ時間に寝起きするので、体内時計がそう習慣付いているのだろう。

程よい眠気を押し留めながら、ベッドで上半身を起こす。グツと背伸びして、凝り固まった筋肉を解しながら欠伸を一つ。

…うん、今日も良い朝だ。

昨日の任務では、魔力の枯渇による気絶などという、何とも言えない醜態をさらしてしまい、健康チェックを済ませた後に帰宅して、そのまま疲労からか寝入ってしまった。

「…何やら摩訶不思議な、そんな経験をしたような…、そう！死んだはずの人間が見えるなどと、霊媒師とかそう言う人が必要とする特殊技能を身に付けたかのような、そんなの訳が分からないよって…！…ふう、私は疲れているんですね。幽霊が見えるなどと、少々オーバーワーク気味だったのでしょうか？不本意ではありますが、トレーニングの改善と、ストレッチなどの負担の少ないものをメニューに取り入れる試みを…」

『やあ、アインハルト、お目覚めのようだね。』

「びやあああああつ?!?!」

いきなり目の前に飛び込んできたのは、自分と同じ髪色と瞳の青年。宙に浮きながら上から覗き込まれたのか、予想だにしない登場の仕方に訳の分からない悲鳴をあげながら、昨日に『見えた』のは決して疲労によるものではないと確信に至った。何故ならばその証拠…先祖であり古代ベルカの霸王『クラウス・イングヴァルト』その人が目の前にいたのだから…。

「…で？」

『で？と言うと？』

「何処まで付いてくるんですか？」

『無論、君の行くところ私ありだよ。』

意味が分からない。

しかし幾つか質問してみても、自分の引き継いだ記憶と合致するものばかりであり、釈然としないが本人と認めざるを得なかった。本人にも何故こうなったのかも解らないらしいが、曰く、宿主であるインハルトの魔力を媒介にして、出来る範囲が広がるらしい。

ちなみに、その出来る範囲、と言うのはアインハルト以外に視認とか、声が届くとかも含まれるようで、起きてきた際に見えない誰かに語りかける娘を見て、母親が絶句したのは言うまでも無い。

「これから私、学校なんですけど…？」

『なに、気にすることはない。』

「いや、気にしましょうよ。」

『無論、理由が無いわけではない。現世の勉強、と言う物を学んでおきたいのでね。』

「はあ…、と言うかそもそも、なんでこうやって幽体化してるんですか？」

先祖が背後霊、と言うのはたまに聞く話ではあるが、魔力を通すことで実体化するなど聞いたことがない。

『なに、気にすることはない。ご都合主義と言うもので良いんじゃないかな？』

「説明できない、の間違いでは？」

『ふむ、私の子孫は中々容赦が無いな。』

「…とりあえず、学校帰りに御祓いを…」

『いやいやいや！ちょっと待って思い直して！そんなことしたら私は成仏してしまうー！』

「それが本来の末路では？」

『せめて少しは躊躇いとかないのかい！？』

「…はっ!？」

ふと周囲を見渡せば、近所のゴミ出ししてそのついでに井戸端会議しているおばさんや、通勤途中のサラリマンやOL、さらには同じ制服を着用した生徒も、独り言を決して大きくない声で喋っているアインハルトを不審に思い、ある者は口許を抑えヒソヒソと話し、ある者は奇怪な物を見るような視線を向けてくる。

「い、急ぎますよっ!このままでは御近所や学校で噂になってしまいます!」

『それは僥倖じゃないか?世の平和を守る霸王として…』  
「変な人としてです!」

思わず大きな声が出てしまった。更に強くなる周囲の人からの視線とヒソヒソ話に耐えられなくなり、アインハルトの顔が見る見るうちに紅潮していく。

「も、もう知りません!!」

耐えかねて猛ダツシユだ。さすがに鍛えているだけあり、その全力疾走は特筆すべき物がある。普通なら置いてけぼりを食らいそうな程だ。しかし、先程からずっとではあるが、クラウドは幽霊の如く浮いているので問題なく追い付いてしまう。

『中々速いじゃないか?さすがに鍛錬を怠ってはいないね、感心感心。』

余裕綽々で追い付かれるのは癪ではある。…しかし、いくらスピードを上げようとも、恐らくはほぼ疲れることなく追い付いてくるだろう。正直、振り払おうにも無駄な浪費である。

「…ハア…念のために言っておきますが、校内では口を慎んで下さい。いろいろと面倒なので…。」

『そのいろいろ、と言う部分が若干気にはなるが…。』

「良いからお願いしますホントに…。学校にも周囲の目と言う物がありますから…。」

『それはまあ…引き受けよう。今しばし、霸王改め空気王となろうか。なに、気にすることはない。』

若干の不安を残しつつ、魔法学院の校門に辿り着いた一人と幽霊



(?)。さて、どうなる事やら。

「……………」

『どうかしたのかい？アインハルト。』

「どうかしたのか、ですって…？よくもそんなことを言えますね…！  
どの口がそう喋るんですか…！」

『何を怒っているのか、私にはさっぱりだよ。』

昼休み。

アインハルトは憤慨していた。何につて？勿論、後ろですつとぼけている先祖に、である。

授業中、確かに彼は喋らなかつた。ここまでは良い。

しかしだ。だからと言ってチョークとか黒板消しとか、その他諸々を持ち上げて遊ぶなどと…！

『喋るな、とは言ったが、何もするな、とは言っていないだろう？』

とまあ、こんな屁理屈を並べるのだ。

基本的にアインハルト以外視認できない彼のお陰で、結果としてクラスメイトと先生はポルターガイスト染みたものを目撃した。

(こんなのが…私の先祖だなんて…！)

果たすべき悲願。

覇を以て和を成すという、アインハルトの戦う理由の大本たる人物が、よもやこの様なおちゃらけた性格だったなど…！

認めたくない。

断じて認めたくない！

「…あのう…」

「…あうあうあう…！…どうしましょう…！…このままでは私のアイデンティティと言うものが崩壊しかねません…！」

「あの…」

「そうだ！やはり御被い！やはり除霊して貰いましょう！このままでは…！」

「あの！アインハルトさん！」

「はっ!？」

どうにかしてあの背後霊を抹殺（既に死んでいるが）しようと思案するアインハルトの傍らに、ヴィヴィオがいつの間にか佇んでいた。彼女の目だけではなく、弁当を食べているクラスメイトからも視線が釘付けだ。

『今日は変な日だね。』

『うんうん。物は勝手に浮くし、ストラトスさんはいきなり叫び出すし…。』

『見てたら何だかコミカルで面白いけどねww』

既にクラスの中でのイメージは、

クールビューティーな二枚目（自己評価）

？

二枚目半な不思議ちゃん（他評価）

へとシフトして行っていた。

「ヴィヴィオさん！」

「ひゃいっ!？」

いきなり大声を出すものだから、変な返事になってしまった。アインハルトが放つ妙なオーラに若干押され気味でもある。

「ここで立ち話もナンです！場所を移しましょう！」

「え？は、はい、そうですね！」

「では！」

ここまでの会話は何ら問題ないだろう。しかし、混乱と羞恥を極めた彼女が起こす行動は、やはり斜め上に行くもの。

「ああああアインハルトさん!？」

ヴィヴィオの首と膝の裏に手を回し、抱え上げる。女子が憧れ、そして男性にされたい（であろう）抱っこのされ方NO. 1（多分）。

人それを、お姫様抱っこという…！

「逝きますー！」

「え？それ、文字が違くないですか!?しかもそつちに窓ですよ!?まさか飛び降りたりしないですよね!?ちよつ！待つて下さいアインハルトさん！早まらないで！私を巻き添えにしないでえええええ!! あああああ………」

怒涛の展開と、ヴィヴィオの断末魔(?)を残して教室は静まり返る。

ややあつて

教室には黄色い悲鳴が木霊した。

「し、心臓が止まるかと……!」

「す、すみません……!なんと謝罪すれば良いか……!」

「あ、いえ。怪我はなかったですし、そこまで気にしなくても。」

結局、無難に着地したアインハルトと、彼女に抱えられたヴィヴィオは連なつて中庭へとやってきた。ヴィヴィオが言うには、中庭で紹介したい友達がいるので、一緒にお弁当を食べるのもかねてどうか?と誘うつもりで中等科へとやってきたらしい。正直、今日の朝から気疲れしていたアインハルトにとって、その申し出はとても有り難く感じたので快諾するに至った。

「怪我と言えば……昨日の負傷の具合は?」

「え?あゝ、傷は浅かったなので、後は残らないだろうつて。痛み自体も今は殆ど無いですし。」

「そうですか。」

内心安堵した。いくら特務に参加しているとは言え、幼い彼女にとって後々残る傷跡を作るといふのはよろしくない。

「すみませんヴィヴィオさん。危険な目に遭わせてしまつて。」

「あ、いえいえ!その……私も役には立てなかつたので……」

「……………」

「……………」

気まずい空気だ。

正直、ヴィヴィオにこの空気は耐えられそうにない。

なんとかか…なんとかこの雰囲気を開き直さなければ…!

「そ、そういうえば！昨日のあの男の人はいったい…?」

「…ああ…彼ですか?」

しまった!これは地雷だったか!?

焦点の合わない瞳で今日の朝から今までの大惨事を掻い摘まんで話すアインハルト。いつも物静かな喋りだけに、テンションの低いときのそれは、もはや呪詛か何かを唱える領域に達していて不気味であった。

「…だからもうどこかの神社で御祓いをして貰って、身を清めて、それで家の周りに塩を撒いて…」

「アインハルトさくん…、戻ってきて下さいよ…。」

『…やれやれ、わが子孫は後ろ向きでいけない。常に上と前を向かねば、英雄にはなれないよ。』

「だからあ…誰のせいだと…」

「お!ヴィヴィオく!アインハルトさくん!で良いのかな?」

「あ!リオ!コロナ!」

丁度良いタイミングで着いたようだ、数メートル先でヴィヴィオのクラスメイトである2人が大手を振って呼んでいる。中庭に植え込まれた芝生の上にランチョンマットを敷いて、お弁当を食べる準備は万端!と言ったところだろう。

「アインハルトさんも!ほら、食べましょう!」

「え?あ、はい。それでは…失礼します。」

ランチョンマットの端でブーツを脱いで、行儀よく正座。こう言ったシチュエーションに不慣れなアインハルトはどこか余所余所しく、落ち着かない様子で視線を泳がせている。

「えっと…紹介しますね。私の友達のリオとコロナです。」

「よろしくお願ひしまあつす!リオって呼んでください!」

「コロナ・ティミルです。アインハルトさんのお話は、ヴィヴィオからよく聞かせて貰ってます。」

「そ、そうですか。アインハルト・ストラトスと申します。」

まるで性格が正反対のような2人。

元気いっぱいのリオに、若干大人しめのコロナ。

…成る程、ヴィヴィオの友人らしく、社交性が高そうだ。

「自己紹介も程ほどにして、そろそろお弁当を食べませんか？」

「賛成っ！アタシもうお腹ペコペコだよ〜！」

「リオってば、2時間目が終わった辺りからそればかりだよね。」

各々、自分の持ってきたお弁当包みを開く最中、アインハルトは致命的なことに気付いた。

「お弁当…教室に忘れて来ちゃいました…。」

「……………」

三者の目が丸くなってアインハルトを見つめる。呆れか、はたまた驚愕か…。もしくは哀れみだろうか？

「ううっ…。そんな目で見ないで下さい…。」

こうなると先輩の威厳も何も無い。ただのドジッ娘である。小つ恥ずかしげに赤面する彼女に、意外な一面をまざまざと見せられるヴィヴィオは苦笑い。

「それじゃ、少しずつ分け合って食べましょう！2人とも良いかな？」  
リオとコロナも、元々そう言う結論に至るつもりだったのだろう。

勿論！と満面の笑みで同意する。

「あ、ありがとうございます…」

『それには及ばないよ。』

聞きたくもない声だった。どこから聞こえるのかとアインハルトはキョロキョロと周囲を見渡すが、声はすれども姿は見えず。ただただ周囲には、彼女達と同じように昼食を摂る生徒達ばかりであり、あの声の主は見当たらない。挙動不審にも見えるアインハルトを不思議に思い、顔を見合わせる小等科の三人。

今度は何を企んでいるのか？

そんな不安と疑念が渦巻くアインハルトの心中は誰にも察することとは出来ない。

『上を見てっらん。』

また奴の声だ。懐疑的な思念を浮かべながらも、恐る恐ると言ったように上を見上げる。

「ごちんっ！」

何かが顔面にクリーンヒットした。

「~~~~っ?!?!」

思いつきり潰れ、涙目になりつつ赤くなっていく鼻を両手で押さえる。顔の向きを戻した影響で、顔面に降ってきた物は放物線を描き、ヴィヴィオがあわやとキャッチする。黄緑の包みのそれは楕円形で、それこそヴィヴィオ達の弁当箱と同じくらいのサイズだ。

「これって…?」

「わ、私のおへん弁当ほうへです…。」

鼻血こそ出てはいないが、未だ抜けきらない痛みゆ耐えながら、落ちてきた物の正体を認識する。

つまり、だ。

あの認めたくないアホな先祖が教室から持ってきて、上空から投下したのだ。

『何、礼には及ばないよ。』

もう顔を見なくてもドヤ顔しているのがありありと予想できる。

持ってきてくれるのは有り難いが、それにしても渡し方という物があるだろうに。

「…」応感謝します。が、後ほど覚えておくことですね。」

『……………』

「不思議なことがあるんですね。空からお弁当が降ってくるなんて。」

「アインハルトさん、大丈夫ですか?」

「…大丈夫です。問題ありません。」

「は…はは…。」

何も知らない後輩2人は普通に心配し、真実を知るヴィヴィオは苦笑い。

…ともあれ、

少々のトラブルがありつつも、ようやく昼食と相成ったわけであ







「っ!?!」

突如として、先輩の振り回す槍に魔力が注がれる。今までに無かったその戦法に、ヴィヴィオは最低限、槍の間合いから外れる。

腰だめに構えた槍、そして放たれる紫の魔力光。何が来るのかわからない以上、警戒は怠れない。

「こう…なるぜ!!」

頭上からの一閃。ヴィヴィオが反応できたのは、槍が振り下ろされた直後だった。先輩の間合いを予測して、そして踏み込みも無く振り下ろされた槍は、恐らくはヴィヴィオに触れること無く空を切った。その速度から、切り裂かれた空気によって、彼女の前髪がふわりと舞う。

そして振り下ろされた槍を見やる。

切っ先から刀身が真つ二つに展開し、その中央から『新たな刃が形成』されていたのだ。

これは…ヴィヴィオの記憶にある物と酷似していた。

母である、なのはが扱う長年の愛機である、レイジングハート、そのエクセリオンモードA・C・S。槍状に変形した切っ先から現れる魔力によるストライクフレーム。本来近接格闘戦よりも、突撃からの零距离砲撃を想定している物ではあるが、彼の使うそれはおそらく、物理と魔力、双方における攻撃のための物だろう。

「…これで今日は仕舞いだ。」

「えっ!?!で、でもまだっ!」

帽子を押さえながら踵を返し、アリーナへの出口へ向かう先輩。お互いにまだまだ余裕があるはずなのに、どうしてだろうか? 必死に呼び止める、が、彼は顔を向けること無く、

「お前に風邪引かれたら、なのはさんに俺が怒られちまう。早いところ着替えるなり何なりするんだな。…あとさっきので解ったが、お前は一定の間合いに慣れてしまうと、不意に弱くなる。その辺を改善した方が良いかもな。」

背中越しに手を振って、アリーナから出て行ってしまった。

風邪? 着替える?

そういえばさつきからお腹とか胸とかが妙に涼しい、というか開放的だ。

視線を下にやる。

鍛錬のために着替えてきた体操服、その下に着用していた水色のキャミソール。それが見事なまでに袈裟斬りにされていたのだ。

「なっ！なっ！?!なななっ?!」

見る見るうちに顔が紅潮していくのがわかる。さしもの数年前は今ほどでは無いにしても、10という齢になった彼女にとって、肌をさらすと言うことに羞恥心が芽生えてきていた。

少しして、アリーナをあとにするヴィヴィオは、先輩が言っていた意味と、こうなった理由について一考した。

（恐らく、先輩が行った攻撃は…魔力槍による攻撃範囲の延長。それで普通の槍の間合いに慣れきった私が反応できなかつたんだろうなあ…。うう…情けないし寒いし…まだまだだなあ…。ハア…。）

『ですが伸び代はまだまだありますよ。次に向かって精錬が大切です。諦めなければその分進めますから。』

「そ、そうですね！頑張ります!!…って…あれ？」

誰かの声に反応して、ついつい返事をしてしまった。しかし、周囲を見回してみても人っ子一人居ない。薄暗いアリーナの静寂だけが、空間を支配していた。

「おかしいなあ…空耳かなあ…?」

疲れているのだろうと自分に言い聞かせつつ、半ば諦めかけていた自分にエールを送ってくれた謎の声に感謝して、ヴィヴィオはアリーナを後にした。

更衣室にて…

「あ…。」

紅と翠、蒼と紫の瞳が見つめ合う。片や服の前面が切り裂かれて、片や練習着片手に制服姿で、更衣室に入ってきたところだ。

「アインハルトさんも、今から練習ですか？」

「はい…、ヴィヴィオさんは上がりでしょうか？…その…。」

ヴィヴィオの服装が気になってか、彼女は少し顔を赤らめて視線を逸らす。

「あ、これですか？先輩に鍛錬を付けて貰ってたら、間合いを取り間違えちやうて…。」

面目ない、と言わんばかりに苦笑する。本来ならここで気遣いの一つでもするのが道理だろう。

しかし、ヴィヴィオのこんな姿を見せられない奴が一人居る。

「クラウス！今すぐ退室して…。」

「ここまで口にしてふと気付く。」

クラウス  
彼の気配が感じられない。少なくとも更衣室からは。あれ程まで金魚の糞のごとく引つ付き回っていた彼が、である。…まあ背後霊にも似た物だから、それが普通なのだろうか。

不審に思い、軽くサーチをかける。範囲を更衣室から少し広げたところで、すぐに彼は引つ掛かった。しかし、一っだけのハズが、似たような反応が二つ探知されていた。

『ま、まさか…キミは……!?』

『ここは淑女の聖域です。殿方は入室してはなりませんよ?』

『うばあー!?』

こきやつ!と言う、小気味よい音と共に、クラウスの反応は忽然と消えた。幽体としての存在はあるものの、意識自体が無くなっているのだろうか、うんともすんとも言わない。

『さあ、これで大丈夫。気兼ねなく着替えて下さいね。』

「は、はあ…。」

アインハルトの返事と共に摩訶不思議な気配が消え、反応は気を失った霸王だけ。

「な、何だったんでしようね、今の。」

「さ、さあ…私には…。とりあえず、着替えましょう…。」

ヴィヴィオは頷いてシャツに手をかけ、アインハルトは胸元のリボンを解こうとしたときだった。

「ヴィヴィオさん…先程の会話…聞こえていたんですか？」

さも当然のように話を進めてはいたが、思い返してみれば不自然だ。アインハルトだけに聞こえていたはずのクラウスの声。それがヴィヴィオにも聞こえていたのだろうか？誰かは解らないが、クラウスを気絶させていた声も気になるが、ヴィヴィオの方も気になる。

「そういうえば…、さっきアリーナを出るときにも、同じような声が聞こえたんですけど、正体は分からず仕舞いなんですよ。」

「…はあ。」

「空耳かなあ…って思っていましたけど…。もしかして私、靈感があるとか？」

「彼らが霊かどうかは解りかねますけど…。もしかしたら…クラウスのような存在が、ヴィヴィオさんにも…」

「わ、私にも背後霊!?そそそんなっ!?!」

本気で怯えるヴィヴィオに、冗談半分なのに申し訳なく感じたアインハルトだった。

「ところで。」

『ん?なんだいアインハルト。』

何者かによって首をねじ曲げられ、それでいて気を失っていた程度で済まず先祖を横目に、アインハルトは鍛錬の動きを止めた。彼自身は何が起こったのか、気絶させられる前後の記憶はなく、アインハルトも現場を見ても居なければ、ざまあみろという思いも無くはなかった。それで済まなかった。

先程のヴィヴィオ達二人が使用していたアリーナとは違い、多種多様なトレーニング機材が置かれて居る室内のバーベルをフックに引っ掛け、インターバルを入れる。

「その姿、寝食をせずに維持できるものなのですか？」

『問題は無いようだ。…三大欲求のうち、その二つはまるで必要ない

のか、補給をせずとも不思議と空腹感や眠気は来ない。全く、つくづく謎だね。』

「謎の元凶である貴方がそう言うのであれば問題ないでしょう。心配するだけ損………ん？ちよつと待って下さい。」

『全く質問の尽きない子孫だ。悪くは無いいけどね。…所で何かな？答えられる範囲なら答えようじゃ無いか。』

「三大欲求のうち、睡眠欲と食欲は無い、そう言いましたね。」

『ああ、確かに言ったね。』

「じゃあ残りの…そ、その……せ、せせせせ性欲は……？」

「こう言った情事には初なのか、顔を紅潮させて尋ねるアインハルト。」

『決まっているじゃ無いか。自家発電だよ。』

「自家……発電……？」

『ふむ、この隠語の意味を知らないと？保健体育で習っただろう？マスターベーション。またの名をオナ「さあ!!鍛錬の続きです!!張り切っていきましよう私!!煩惱なんか汗と一緒に虚空へ消し去るのが一番です!!」………やれやれ。鍛錬ばかりに気をやって、こう言ったことに疎いのも考えようだな。』

ふむ、と顎に手を当てて空中で胡座をかき、いかにも一考していると表すように少し顔をしかめる。

いくら子孫が、覇を以て和を成す悲願のために懸命になってくれているのは、クラウドスにとつても喜ばしいことだ。だがしかし、だからと言って自分の人生をそれだけに費やして欲しくないのもまた事実。自分の悲願はその為のものではない。後世の子孫を縛る理由になるなど言語道断。…むしろ、覇を以て和を成すことで、平和な世を築き、自分のように無力に打ち拉がれて大切なものを護れない人が居ない世、それが望みだったのだから。…だからこそ、目の前の子孫の軛を、完全にとは言わないまでも、幾らか軽くすることは出来ないものか？『…やはりあの娘、かな。』

何かを思い付いたのか、クラウドスの口元が吊り上がる。それは子孫

の為を思つて策が閃いた、さながら孫を見る祖父のような表情

ではなく、

鬼畜のごとく、含みある笑みだった。

## ミツドチルダの執務官（オーガ）

「今の俺のムーブメントはな…『ギャップ』、だ。」

とあるシックな雰囲気漂うバーのカウンターで。

彼はグラスを傾けながら、隣に座る彼に語る。

その顔にはニヒルさがありありと浮かび、グラスのロックと相まって、黙っていれば二枚目の男として女性の視線を釘付けにしているかも知れない。

しかし、

しかし、だ。

「普通ならば、これに当てはまるのが外では縄張りを争い合うか、盛りつついた猫の如く爪を立てる女も、二人だけの時にはまるで愛に飢えているかの如く甘えに甘える…そんなツンデレにも似た物を意味するかも知れない。」

「はあ…」

隣に座る男性…いや、少年や青年と見紛う彼は、このバーに通うに少し幼く見えた。ツンツンとした赤毛と、肩辺りまで伸びた髪を首の付け根で纏めている。隣に座る男性の語りに、話半分で聞き流す。

「しかし外見のギャップは違う。考えてみる？幼いはずの年齢。例えるなら第二成長期を迎える頃合いの女の子。その頃になれば、女としての成長を始め、成人に近付くにつれて大人の体つきへと成長していく。いわば蝶になるために、青虫が蛹へとその身を閉じ込める時期だ。それはそれで魅力的なものでもある。」

「はあ…」

やはり話半分の少年に語りながらも、意気揚々と男性は小休止と言わんばかりに乾いた口腔を潤すためにロックを口に含む。口に広がる独特の風味。それが彼を更に饒舌なものへと変えていく。

「しかし、しかしだ。そんなゆっくりと…まるで砂時計が時を刻むかのように流れるべき物を通り越して、突然変異とも取れるかの如く急成長を遂げる奴らも居る。そう、雨後の竹の子とも言うべき程に。」

「……………」

「考えても見ろ。未だ幼い顔付き。しかしその胸部には男の…否！人類の還るべき場所がたわわになつてゐる女性を！身体は大人！心は未だ子供！見た目は問題なくとも、年齢はアウトを通り越して、スリーアウトどころか、ワールドゲームのゲームセット。手を出そうものならば社会的に抹殺される。しかしその禁断の果実という意味合いの背徳感が実に甘美だ。」

「…晴さん？」

「逆もまた然り！年齢は立派に成長したもの。心も大人としての落ち着きを持つてゐる。しかし！身体は未だ幼く、背丈も低い。俺達の還るべき場所はまだ大平原で、山も谷もない。しかし、年齢としては問題ない！故に合法！そんな二つのギャップが、今の俺の心を鷲掴んで止まないんだ。」

「…真壁晴臣さん？」

「…んだよギル。」

晴臣と呼ばれた彼の後ろで？んでいた紫のキャップを被った黒いロン毛のギルと呼ばれた男―ギルバート・マクレイン―は、釣り目で鋭い目を、更に細く鋭くして睨み付ける。しつこく呼んでくる彼に、晴臣は渋々、と言つた様子で応ずる。

「俺の弟子に変なこと吹き込むのやめてくれませんか？ただでさえエリオは多感な時期なんだ。悪影響を受けるのは、やぶさかじやない。」

「何言つてんだよ。多感な時期だからこそ、大人の嗜みをだなあ…」

「あ、あの。お二人とも、あまり騒がしくない方が…」

エリオと呼ばれた少年は、言い争いを始めかねない目の前の二人に、慌てふためいて？んでいたミルクをおいて止めに入る。

エリオ・モンディアル

自然保護隊の若き騎士にして、時空管理局執務官フェイト・T・ハラオウンの養子でもある。

「エリオは心配すんな。悪い知識を教え込もうとするなど、俺が許さん。」

「そう熱くなるなよギル。個人の趣向を押し付けているように見える



かも知れないけどな、俺はそんなつもりはねえ。女性の魅力を見付けると言うのは全人類の半数を占める彼女等に対しての礼儀で、男としての嗜みでもあるんだよ。だからさ……」

「あ、もしもしく？ケイトさんですか？」

「俺の婚約者に電話するのは止めてえええつ!？」

ケイト・クロウリー

真壁晴臣の婚約者にして、地上部隊に所属する女性だ。サバサバとしながらも気さくな人柄で、上司、部下共に信頼は厚く、戦闘能力も申し分ない、まさにエースと呼ぶに相応しい人物。そして、真壁晴臣の暴走を食い止めることが出来る絶対的なエース、いや切り札<sup>ジョーカー</sup>。元々管理局勤めの晴臣は、婚約者がいるにも関わらず、男性局員は元より、女性局員にもこのようなことを言って回り、査問への呼び出しを喰らった回数は数知れず。その度にケイトは引受人として出頭させられていたの言うまでもない。

婚約者、と言う立場としてのアドバンテージもそうだが、ケイトには先述のような事から頭が上がりないのもまた事実。それが彼女は晴臣に対する切り札<sup>ジョーカー</sup>たる所以なのだ。

「俺とエリオの鍛錬の打ち上げに乱入しておいて、変なことを吹き込まれちゃ、ハラオウン執務官やシグナム二尉に何を言われるかわからないのは俺なんすよ？そこんところしつかり自覚しておいて下さいよ。」

「固えなギル。コイツくらいの年にや、ちよつとくらいワルな方がモテんだよ。」

「モテるもなにも……そいつにや彼女が居るんすよ?」

「なん……だと……」

「えつ?ええええつ!?!ぼぼぼ僕に彼女!?!」

突然のカミングアウトに、晴臣はともかくとして、当の本人たるエリオまでもが驚愕していた。

「なんだ……違うのか?同じ隊に居る……桃毛の子だよ。」

「へ?キャロのこと、ですか?」

「ああ……確かそんな名前だったか。」

「キャラはその…言っちゃえば兄妹みたいな間柄なんです。僕と同じように、彼女もフェイトさんの養子なので。」

つまり義兄妹。血の繋がりはなくとも、家族であると言うこと。ハラウン執務官の家庭事情について、詳しくはギルも晴臣も知らないが、こうして二人を引き取っていると言う行動原理に、多少なりとも思うところがあるのも事実だ。

「…となれば、義兄妹での恋慕と言うことになるのか。」

「だ、だから違いますって！」

「心配すんな。俺がサポートしてやる。ここで昔俺が培った『禁忌』のムーブメントの知識をだな…」

「晴さん…？」

またろくでもない知識をエリオに吹き込もうとする晴臣に、怒気を孕んだ声と共にギルが彼の肩を掴む。

酒飲み二人と、少年の夜は更けていくばかりだ。

日付も変わろうか、と言う時間帯。

飲兵衛の二人とは別れて帰路に着くエリオの体に、梅雨入り前の肌寒い風が吹き荒ぶ。二人が別れたのは、やはり未成年を日付が変わるまで連れ回すのは宜しくない、と言う理由だ。この辺は大人としての分別があるのか、エリオを家まで送ろうともしてくれた。しかし、たいした距離でもない上に、武装隊としての経験もある為、問題ないと断った。それでも食い下がる二人だったが、自分に遠慮して回りにくいだろう、ということ伝え、半ば強引に納得させたのもつい先程の話。

思えば、この選択が間違いだっただのかも知れない。

「うう、近道近道。」

今家に向かうために近道である公園を全力疾走する彼は、ごく一般的  
な管理局員。

強いて違ふところを挙げるとすれば、生まれが違ふつてとこカナ――

名前はエリオ・モンディアル。

そんなわけでなのかどんなわけでなのか、近道のためにやって来た  
のだ。

ふと見ると、

ベンチに、白衣を着た一人の眼が少々イッてる男が座っていた。

ウホッ！如何にもマッドサイエンティスト……。

そう思っていると、突然その男は羽織った白衣の懷に手を忍ばせ、  
細長い筒の様なものを取り出した。

「(私と一緒に)い かな い か」

そういえばこの公園は不審者がでる事で有名なところだった。以  
前、ヴィヴィオが通称『馬の尾事件』の実行犯に襲撃された場所だと  
いうのも思い出した。

そう思い出している隙を突いた不審者の彼により、ホイホイと細長  
い筒の正体を身を以て知っちゃったのだ(はあーと

首元がちくりとする痛み。筒の先をこちらに向け、反対側を口に啜  
えた不審者―スカリエツティー―の持つそれは、ジャパニーズ・アンキ  
である吹き矢と気付いたときには、針に仕込まれた薬が効いてきたの  
だろう。薄れていく意識とともに、暗転する視界が最後に見た光景  
だった。

一方、所変わって高町家。

一般の一戸建てよりも広く、キッチンと一室化したりリビング。その  
一角に備えられた3人ほどが座るには充分なほどのソファに、フェイ

トは少々気が気でない表情で時計を気にしながら座っていた。日付は既に変更されており、そろそろ1時になろうかという時間だ。起きている理由は、勿論エリオのこと。件の男2人と共に飲みに行つて、今から帰りますと連絡が入ったのが今から一時間半前。何処の店で飲んでいるのかは知らされていないが、クラナガン市街地からこの家まで、歩いて30分ほど。何処かコンビニに寄つたりしたにしても遅い。

「どうしちゃったのかな、エリオ…。」

ぽつりとこぼれ出た言葉は、夜の静寂に消える。

元々は、久々に纏まった休暇が取れたエリオとキャロが、フェイトと過ごすためにクラナガンへやって来たのは今日の午前。翌日にヴィヴィオと訓練をする予定で、この際に高町家で止まることになった2人。地上本部に着いたエリオは、休暇に入る前に、一度槍の先生との訓練をおきたい、とのことでキャロと別れたのが正午過ぎ。その後、訓練の手ほどきをしてくれたギルバートと、後から乱入してきた晴臣と飲みに行く連絡が入ったが18時過ぎだった。ギルバートについては、一度休みの訓練の際に出会ったことがあったが、無愛想ながらも熱心にエリオを指導してくれていた。その強さもさることながら、B級デバイスマイスターの資格も持つており、デバイスの改良に余念が無い。あれこれと気を遣つてくれているようで、エリオから来るメールの内容からも、彼に強い信頼を置いていることが見て取れ、安心感と共に、フェイトの中でエリオが徐々に大人になっていく所から感じるちよつぴりの寂しさと、そしてギルバートに取られたとも感じられるほんの少しの嫉妬が芽生えたとか。

閑話休題。

ともあれ、いくら武装隊員で信頼置ける人間と共に居るとは言え、その実は14という年齢の少年に過ぎない。未だ成長しきつていない心身であると言うものもあれど、その身を案ずるのは親心所以だろう。

「確かに…ちよつと心配だね。」

ヴィヴィオの部屋のベッドで2人並んで寝ているヴィヴィオと

キヤロの様子を見て、二階から降りてきたのはも、改めて見た時刻にその眉をハの字にする。以前、ヴィヴィオが変質者に襲われた事もあるからか、元教え子である彼が心配になってくる。そんなじよそこらの悪漢程度なら軽くねじ伏せられるほどの戦闘力を有してはいるが、心配には変わりない。

「わたし、探しに行ってくる。」

冷えないように、寝間着の上に上着を羽織って玄関へと歩み始めるフェイト。

「待つてフェイトちゃん。」

「止めないでなのは！エリオがわたしを呼んでるんだ！14になってもまだ女性声優で、顔立ちも中性的で整っている！そんなエリオの容貌に目が眩んだ極めて特殊な性癖を持った危険な犯罪者に目を付けられたりなんかしたら、わたしは…わたしはあああっ!!!」

…おかしい、先程まで至極冷静に見えたのに、何のスイッチが入ったのか変な方向に思考がシフトしてきている。普段冷静かつ着実に職務を熟し、他の局員への優しい気遣いを忘れない、局でも指折りの人気を誇るフェイト・T・ハラOWN執務官の姿は、なのはの目の前にはない。そこにいるのは、養子である少年への愛を拗らせている、良く言えば親バカ、悪く言えばヘタすれば変質者と成り果てた親友だった。

…やはり親子か。

3話で、親バカを爆発させて一悶着起こした一人の母親の姿が重なって見えた。

「わ、わかったよフェイトちゃん。私も一緒に行く。」

「で、でもなのは、ヴィヴィオ達は…」

「大丈夫、クリスもケリケイオンもいるから、いざという時にはエマージェンシーコールするようしておくし。それに、この家のセキリテイはそこそこに高いの忘れた？並大抵の犯罪者じや引つかかるよ。」

「…本当に良いの?」

「友達を助けるのに理由なんている?」

思わず涙腺が崩壊しそうになる。

ああ、そうだ。この大切な初めての友達は、こうやっていつも寄り添って気持ちを汲んでくれる。15年前のあの日から、ずっと…。

「ありがとう、なのは。…行こう。」

「ん。」

短く、そして力強く頷き、玄関を飛び出すフェイトの後ろ姿を追って、なのはも飛び出す。

もし犯罪者と相對したときには、全力全開で止めなければならぬ。

この盲目的な親バカを…。

「もう…やめて…」

一人の長い赤髪の人物は懇願する。

薄暗い一室で鎖で繋がれたそれは、複数の視線の元に晒されている。その目は虚ろで、しかしその頬は上気しているのか赤みを帯びている。

「むふふ…やはりこれは中々の上物じゃないですかあ♪」

視線の一对である女性が、丸い眼鏡のレンズに僅かな光を反射させ、怪しく光らせる。その口許はまるで裂けていると彷彿させるほどに吊り上がり、まるで三日月のようだ。そしてその鼻息は、興奮した猛牛の如く荒い。その手には高性能のデジタルカメラがあり、絶えずそのフラッシュを焚いていた。

「これは…なかなか…」

さらに一对である長身で紫髪の女性は、目の前にある人物の全容が刺激的なのか、口と鼻を手で覆い隠しながらも、顔を赤らめて、しかし眼を細めつつそれを見やる。

「ん…。」

桃髪の少女はというと、使用した物を綺麗に整理して収納。代わりにスーツケースから未使用の物を取り出している。淡々と仕事を熟しながらも、その目は件の人物に時折向けられ、無表情なその顔とは裏腹に、扇情的とも言えるその光景を見て頬を赤らめていた。

「いいーいいですよ！その表情！堪りません！」

狂気的なまでに撮影用のミラーを掲げる薄い紫の長髪の女性も、最初の女性と同じくして興奮の極みであり、眼もクスリをキメているのかとも見えるほどにヤバかった。

「ふふふふふ…これが売れば我々は10年は戦える！見よ！これが我々の成果だ！」

変わって男が指をパチンとならす。すると、まるでスポットライトかのように照明が照らされ、壁一面びつしりと張り巡らされた写真がその姿を露わにする。

その内容はと言うのも…

S.T. ヒルデ魔法学院小等科制服

同じく中等部制服

第97管理外世界のU市にある私立小学校制服

ブルマ

スク水

メイド

バニー

チア

e t c . e t c . . .

多岐にわたるその手の趣味趣向を持つ顧客を相手取るに問題ないほどに、あらゆるコスプレを網羅した写真の数々だ。

「これを97管理外世界で執り行われるという夏の祭典に写真集として売り込めば、我々の活動費もさぞかし潤うだろう！」

「さすがドクター！我々の懐も潤って、更には我々も眼福という甘い汁を味わうことが出来る！まさしく一石二鳥!!」

「いよ…流石ドクター、狡い…そこにシビれる憧れるう…」

ドクターと呼ばれた男：今更ながらジェイル・スカリエツィを絶賛するのは、眼鏡の四番であるクアットロで、高揚のない声でぱちぱちと拍手するのは七番目のセツテ。しかしこれでも彼女なりの精一杯の賞賛だ。

「というか…僕の女装写真をばらまいて、そんなの誰が買うんだよ…」

呆れと怒気を孕んだ声が室内に響いた。

赤い長髪のウィツグを、首を振って振り落とし、彼—エリオ—は件の四人を睨んだ。

事の発端は、先程吹き矢で眠らされて、そのままお持ち帰りでもって気付いたときには着せ替え人形にされていたのだ。無論、身の毛もよだつたのは言うまでもなくだが、目の前で興奮する、特に女性達が不気味で仕方ない。

「というか…セツテ…だったっけ？」

「ん。」

「もつとその…大きくなかった？」

こくりと、最低限の返事で返すのは、自分が知る桃髪の髪をした女性と瓜二つの髪型の少女だ。しかし、自身の知るセツテは…もつとこう…無表情ながらも自身よりも年が上の様な気がしたのだが、今日の前に居る少女は、自身が出会ったときと同じくらい…外見で10歳そこそこと言った所だ。

「…博士曰く、こっちの方が精神年齢と合っている。それに合わせて、躯体の肉体年齢の調整をしたらこうなった。」

「ど、どうやって…？」

「…魔法って便利。」

最早訳が分からない。

ともかくにも、一先ずここから脱出するのが先決で…。思考を巡らせて、様々なシミュレーションと脱出プランを立ててみる。

しかし、両腕にはA アンチマジック Mのコーティングが施された拘束具で固定されている。電気の変換資質を以てしてぶち壊そうかとも思ったが、魔力結合を阻害する術式だ。魔力変換も難しい。こんな変態的な事に使うよりも、管理局にこの技術を売り込めば、そっちの方が懐の潤い



も良くなるだろうに…。最近、町で暴れさせているロボットといい、管理局に戦争でも仕掛けるつもりなのか。いや、四年前、ある意味戦争を吹っ掛けたのには変わりないか。

「ふっ…何を言っているのかね少年。男子の…否、男の夢はいつだって世界征服さ！」

思っていたことに対して律儀に解答する彼に、未恐ろしさすら感じる。まさか声に出ていたわけでもあるまいに。

「さて、次は何をお召しになるかしら？」

「そ、そうだな。ありきたりな物はほぼ網羅したから…。」

「…じゃ、ナンバーズの機人のフィットスーツはどう？」

「そ、それはナイスアイデア！」

何やらとんとん拍子に次のコスプレ。しかもいろんな意味でヤバい物をチョイスし始める機人の四人。スカリエツティも、異論は無いのか、何も言わずにそれを見ている。

これは非常にマズい。早くコイツらを何とかしなければ、社会的に殺されてしまう！

「さあさあ、逃げられないんですから、ここはまな板の鯉の如く受け入れちゃって…」

「…ん…？」

「あら？どうしたの？トーレお姉さま。」

「なにか…聞こえる。」

戦闘特化のトーレとセツテは強化された五感を研ぎ澄ませ、その大本を探る。不審に思った残り3人と、そしてエリオも、耳を澄ませる。楽器もないはずなのに、ピアノの旋律が奏でられる。

【今は前だけ、見れば良い。】

『!?!』

【信じることを、信じれば良い。】

「こ、このフレーズは…この歌声は…!!」

ぶるりと身体を震わせるは、スカリエツティだ。何故かは分からないが、トーレとセツテも顔を青ざめている。

『愛も絶望も羽になり、不死なる翼へと。』

「ど、ドクター！これは戦術的撤退を……！」

「……………!!(コクコク)」

普段の冷静さが微塵も感じられないトール。そして、無言ながらもその顔に多量の汗を滲ませて、壊れたロボットのよう同意して首を何度も頷くセツテ。

しかし、その逃亡案は、突如として吹き飛んだ壁面と同じく、粉々に碎かれてしまった。

『蘇れ、僕の鼓動……!!』

もうもうと立ち上る粉塵。

そしてその奥からは一対の長剣。

その刀身は黄金。

魔力で出来た剣。

雷を帯び、スパークがその光を散らす。

クアットロとウーノは警戒する中、セツテとトールは互いに抱き合ってへたり込み、ガタガタと震えている。

片や男性にカテゴライズされるスカリエッティとエリオは、啞然と口を開き、最早顎が外れているのかと思うほどに大きくあぐりしていた。

「……えりお、ミツケタ。」

粉塵越しに見えていた人影。恐らくその頭部、眼に当たる部分に、怪しく紅い光が走る。そしてそれが、『彼女』の眼光であることに気付くまで、そう時間はかからなかった。

「ふ、フエイト……さん？」

「ウン、ソウダヨえりお。助ケニキタヨ。」

おかしい。いつもの凜とした『彼女』の声と何処か違う。むしろ……もつと恐ろしい、いや、おぞましさをすら感じさせるそれは、例の二人はともかく、助けられるはずの側であるエリオをも戦慄させる。

「ふ、ふふふ……早くもここを嗅ぎつけるとは……流石執務官と言ったところか。しかし、こちらには人質が……」

「きゃうん!!？」

「あべしっ!!？」

一瞬だった。

『彼女』と思しき人影が消え、粉塵が突風でも吹いたのかと感じるまでに消し飛んだかと思えば、次の瞬間には、ウーノとクアットロは変な悲鳴と共に壁に打ち付けられた。しかも顔面から、まるで漫画のようにめり込んでいる。

慌てて振り向けば、まるで幽鬼のようにゆらりと、そしてその魔力は黄金色であるはずなのに、おぞましい形容しがたい色として滲み出ている。

【暗闇の、月も星も、孤独を嘆く only tears。】

「歌いながら…剣を振るう…だと!？」

姉と妹が吹き飛ばされて正気を取り戻したトーレ。その腕と足にライドインパルス及びインパルスブレード用の光を展開すると、突貫。

「歌いながらでは、捌き切れまい!」

彼女の得手とする高速格闘戦に持ち込み、攻め手を徐々に強めていく。以前戦ったときよりも、鋭く、そして重い一撃ばかりだ。

「あれから4年!脱獄前も後も!いずれこの日が来ることを予期して鍛えに鍛えてきた!」

しかし、肉体ばかりを鍛えたからか、突如して現れた『彼女』に対するトラウマを拭いきれなかったのは何たる皮肉か。

「それに、そちらの癖は見抜いて…」

ここだ!と、幾度も見直した先の戦闘。その中で見つけた癖の中の僅かな隙。高速格闘戦下において、自分の一撃の速度を以てすれば致命打となるだろうそれを、寸分狂い無く拳で突く。

突いた、

そのはずだった。

「なん…だと…?…」

手に感触は無かった。鋭く、そして射貫くような拳は、空を切るだけに終わる。

【十字架を、紡ぎ描こう。共に輝き尽きるまで。】

一閃。背後から叩き付けられた刃の腹で、トーレは頭から地面にめり込んだ。

「な、なんだこれは!? 魔力が跳ね上がっている!? こんな現象、私は知らない!」

「コレハ『絶唱』。己ノ魔力ヲ歌ニ乗セテ瞬間的ニ爆発サセル裏技。」

「絶唱…だと!」

錯乱…いや、興奮するスカリエッティに対して、律儀に説明する彼女は、流れるように腰を抜かすセツテをバインドで拘束。二振りに別れていたザンバーを、一振りの巨大な斬馬刀と思しき大剣へと形を変えらる。

「私ハ護ルベキ者ノ為ナラバ、魔力ナド幾ラデモ捧ゲヨウ。ソレガ…」  
「彼女はザンバーを構え、まるで野球選手の打法。それも一本足打法にて自分の得物を振るう。」

狂氣的に嗤うスカリエッティの横顔を物の見事に捉えたザンバー。彼はまるで野球ボールのように見事に吹き飛び、部屋の壁を突き抜けていった。

「防人、ダ…!」

「ごめんね、エリオ。待たせちゃって。」

「い、いえ。ありがとうございますフェイトさん。」

「家族だもの。当然だよ。」

拘束から解かれたエリオにバリアジャケットのマントを羽織らせ、無事を喜ぶ。その顔は、先程の修羅と思しき彼女とは違い、慈愛に満ちあふれていた。とても先程大立ち回りをした人と同一人物とは思えないほどに変容している。

「それにしても…」

壁一面に張り巡らされたそれを見て、フェイトは目を鋭くする。

「こんなうらやまけしか…コホン! 卑猥な行為と撮影をするなんて、

スカリエツティも何を考えているんだろうね。」

「あ…あはは…」

今言い直したけど、何を言いかけたのかは大体の予想が出来てしまっただけに、エリオは苦笑するしかない。

「これは…私が責任を持つて…有効かつよ…もとい！処分しないと！ブフォツ!?!…こ、この服装は…!」

顔を…恐らく…いや絶対に鼻を抑えながらその写真を、痛まないように丁寧に剥がして、手に持ったバルディツシユの格納領域に収納していく。

…何処か、バルディツシユのコアが、物憂げに点滅していたのは、エリオの見間違いではない、はずだ。

「フェイトちゃん！エリオ!?!大丈夫!?!…って、もう終わってた?」

「あ、なのはさん…。」

遅れてやって来たなのは。この時間差を見るに、手分けして探していたのか、それともフェイトが尋常ならざる速度でなのはを引き離したのか…。前者であって欲しいと願うのは何故だろうか。

「もう…酷いよフェイトちゃん。あんな速度、追いつけるわけ無いんだから!」

願いは容易く打ち碎かれるものだった。

狂気にも似たその思いが、人の限界すらも突破させたのか。

「ご、ごめんねなのは。これを回収したらもどろうか。」

「そうだね、手伝うよ!」

「あ!いいんだなのは!私がやっておくから、エリオをお願いね!」

せつせと写真を集めるフェイトに首を傾げながら、苦笑いを浮かべるエリオにも更に首を傾げるのはだった。

## ミッドチルダの邂逅（ガール・ミーツ・ガール）

「ドーモ、アインハルト・ストラトスです。長らく出番のみならず、名前すら触れられなかった様な気がする、一応主役です。ですが、『ミッドチルダの英雄』と銘打って連載しているワケなのですから、もつともつと私を主題にした話があっても良いと思うんです。それはまあ？サブの方々にスポットを当てるのも？良いと思いますよ？ですが、これはあくまでも私を主人公に据えた…」

「アインハルトさーん、置いて行かれちゃいますよ？」

「あ、待って下さいヴィヴィオさん！いま読者の方に挨拶と、これからの事について…」

「読者の方…って？それにこれからの事って、まず今日の予定は、アインハルトさんも知っていますよね？ほら、生徒会長が目くじら立てて待っていますから、早く追いつきましょう！」

「あつ！ヴィヴィオさん！そんなに引つ張らなくても…！」

手を引いて、ぐいぐい引かれていく2人を見守る、常人には見えな  
い二つの影。

『平和ですね。』

『アア、ソウダネ。』

『今回は私達の出番は無さそうですね。』

『アア、ソウダネ。』

『まあ、そうであることに越したことはないのですが。』

『アア、ソウダネ。』

青と紫の目をした碧銀の男性は、その瞳に光を宿さず、ただただ虚ろに、まるで機械人形の如く言葉を発する。

対して隣に立つ、紅と翠の虹彩異色をもつ金髪の女性は、先行く2人の少女を見守りながら、自身が命を落とした時代に思いを馳せる。

『さあ、行きますよクラウス。今日は特務メンバーの管理局見学と会合だそうですね。今の時代の警察組織のシステムを詳しく知るチャンスなんですから。』

『アア、ソウダネ。オリヴィエ。』

オリヴィエと呼ばれた女性は掌に持つ紐リードを引き、自身の宿主達の後を追う。

『ふふっ。こうやって自身の手で貴方のリードを持つことが出来るなんて…幽霊になってみるものですね。』

『アア、ソウダネ。オリヴィエ。』

リードの先…それは、クラウスの首に取り付けられた首輪である。見ようによっては何か特殊なプレイをしているかのようだが、何のことはない、文字通りにそうなのだ。そして文字通りにその手綱を握るオリヴィエのその手は、魔力を通して稼働する無機質な義腕ではなく、幼き日に事故で無くしていた真正銘、自身の腕があった。それはやはり、幽体となったことにも起因しているのだろう。

『まあ、生前から貴方はその不幸体質？みたいなモノを変な方向に活かしていましたよね？私の湯浴みの時に入ってきたり、バナナの皮ですべってエレミアのことを押し倒したり。』

『ちよつと待つてくれオリヴィエ！前半はまあ…ともかく、後半は問題ないだろう！？そりゃまあ…男が男を押し倒す、とか言うのは、一部の腐った女性に以外には余り眼に宜しくない光景だろうけど…。』

『クラウス。それは…本気で言ってるのですか？』

『…え？本気って？』

『はあ…もう良いです。』

オリヴィエが溜息をつく。それもそのはず。エレミア…以前、圧倒的な力を奮った、インターミドルチャンピオンのジークリンデの祖先に当たる人物なのだが、中性的な外見と、一人称が『ボク』であったため、クラウスと共に過ごす中で終始、彼に男として思われていた。

否、現在進行形で思われている。

『それにしても…私の子孫とも言うべき彼女の下着を覗き見るなんて…恥ずかしいと思わないのですか？』

『なっ!?覗き見るなんて人間きの悪い!!あれは彼女が、たまたまバナナの皮ですべって転んで、たまたま見えてしまっただけなんだ!!決して故意ではない!!』

それは不幸体質ではなく、ただのラッキースケベという。

『色は?』

『兎の小さなアップリケが施された、青と白のボーダーだったよ!凄く似合ってるね!』

サムズアップする彼の顔面に、生前と変わらぬ威力の鉄拳がめり込んだ。

胸の高鳴り。

上昇する体温。

釘付けになってしまう視界。

「ようこそ、特務の生徒諸君。…とは言えど3人か。」

さらりとした黒髪。

凜々しい眼。

すらりと、しかし決して華奢ではない体躯。

「では今日、執務の都合上短い間だが、案内させて貰う…」

優しく、

そして絶望から自分を（大袈裟）救ってくれた

会いたかった人

「クロノ・ハラオウンだ。30分の間だが、宜しく頼む。」

「宜しくお願いします!そしてお久しぶりですクロノさん!」

「ああ、久しぶりだねヴィヴ…」

「どうして30分だけなんですかアーツ!」

「?!?!」

普段余り大きな声を出さないアインハルトだが、いきなりの絶叫に、その場に居た皆がビクリと身体を震わせる。何やら血の涙を流しているようにも見えるが、それは幻覚だろう。

「えっと、君は…アインハルトだったか?」

「ハツ!?は、はい!そうです!」

「君のことはエリカ君から聞いているよ。なんでも、学内屈指の実力者だとか。」



「い、いえ。私などまだまだ…」

会いたかった男性に褒められて、悪い気はしないものだ。照れに照れて、赤らめた頬を手で挟み、クネクネと小躍りしている。

正直余り見ない、というか見たことのない彼女の奇抜な行動に、ヴィヴィオとエリカも身を退く。

「ま、まあ、時間も惜しい。そろそろ出発としよう。」

何処から取り出したのか、バスガイドが観光案内するかのような旗をクロノは取り出して、3人と、そして無意識に幽霊2人を引率していく。

「ほら、アインハルトさん。行きますよ?」

「…全く、後輩に手を引かれるとは、普段の君では考えられないな?」

未だ戻ってこないアインハルトを半ば引き摺りながら、クロノによる管理局の案内は始まった。

案内、とは言えど、学生が行事の一環で執り行う社会科見学とそうは変わらない。まあ、特務の代表3人と案内の提督の四人で回るという小規模な物だが、禁止区画を除き、大まかに各部署を回っていく管理局観光ツアーS.T. ヒルデ魔法学院御一行様。途中、教導中の航空教導隊でヴィヴィオが栗毛の女性に手を振ると、何をハッスルさせたのか桃色の砲撃頻度が増して、阿鼻叫喚の地獄絵図と化していた。そんな彼女を見かねて、クロノのバインド地獄が彼女を襲ったのは言うまでもない。

執務官の統括事務所においては、偶々書類を出しに来ていた金髪の女性が、ヴィヴィオと、そしてクロノと少々談笑。その際、女性がクロノを『お兄ちゃん』とプライベートの呼びをした際には、『至近距離でしがみついて継り付くように言え!』などと、よく分からない<sup>フエティシズム</sup>拘りを吐露していた。

無限書庫においては司書長と……………もはや言わずとも分かり

そんな物なので割愛させて頂く。

そうこうしているうちに、30分に収まらないようで、しっかりときっかりと収まった30分。

アインハルトにとって至福の一時であったことに変わりなく、30分という枠組みの中でも、その幸せを噛み締めていた。

が、終わりは必ず来るもの。

「どうして30分だけなんd…」

「知らんがな。」

30分という長いようで、しかし彼女にとっては確かに短い時間だったのだろう、身体を抱き締めながら、再度慟哭するアインハルトに、エリカは呆れながら辛辣な言葉を浴びせる。

「はは…済まないね。これからどうしても有給に入れと人事が煩くて。」

「確かに、提督職ともなれば、多忙に多忙だろうな。しかも管理局員全員が中々有休を取りたがらない異常者だから、人事部が労働監督署あたりからガサ入れが入った時のために、ある程度有給が溜まった局員には半強制的な有給使用が行われていると、まことしやかに噂になっている位だからな。」

「確かになのはママもフェイトママも、公休以外は休みを基本的に取らないみたいですしね。」

それでもなのはは、育ち盛りのヴィヴィオの為に、泊まりがけの仕事を減らせれるように上司に掛け合い、ミッドチルダや近隣世界、或いは本局での教導を中心にするようにしている。その甲斐あってか、遅くなることはあっても、家に帰らない日と言うのは年に指折り数えるくらいしかない。

だが、提督職や執務官ともなれば、遠い次元世界に赴いての任務の執行。更にはその報告書の作成と共に提出。目的の次元世界や任務内容にもよるが、1週間以上家に帰らないなんて事もザラである。

「まあそんなわけだ。僕も偶には貴重な有休消化で家族サービスと言

う奴をしなくつちやあな。」

「あ、暫く会ってないですけど、カレルとリエラは元気にしていますか？」

「ああ、この間7歳になったところだね。聖祥大附小学校2年生だつて、メールをくれたんだよ。」

聖祥大附の良さは、クロノの義妹であるフェイトと、その友人達が通っていたことでよく知っている。何度か家族関係で訪れたこともあったが、校風とその授業にはクロノも良い学校だと思つたし、一緒に訪れていたエイミイには、

『クロノ君も、子供が出来たらこう言う学校に入れたい？』

『そうだな、確かにそれもアリだろう。でも、僕が結婚してこつちに定住するとも限らないし、そもそもそうなたとしても子供には強制せず、あくまでも選択肢の一つとして……つて、何を言わせるんだ？』  
『いやいや、クロノ君がそこまで考えていたとはねえ。お姉さんとしては嬉しいよ？ 感心感心！』

『君も、そう言つたことで人をからかう前に、自身の相手を見つけたらどうなんだ？』

『ん？ 私はこれと言つた相手もないなあ。……もし私が婚期逃して行き遅れたら、クロノ君貰つてくれるかな？』

『未婚だつたらな。それも選択肢の一つとして考えておくよ。』

……などと、軽口をたたき合っていた相手と、まさかその数年後に婚約し、翌年には結婚していようなどと思ひもしなかったが。

ともあれ、選択肢の一つを、自身も、そしてその子供も選び取るなど……。

「この間の誕生日は何か休みを取れたしね。本当に骨が折れたよ。」

自身の端末を操作して、投影ディスプレイに写し出したるは、濃い茶の髪をした双子の兄妹。片やクロノと同じように短く整えられ、片や肩までの髪。恐らく短い髪の方がカレル、肩までの方がリエラだろう。

二人とも自身の誕生日だけあって、目の前の大きなホールケーキにご満悦のようで、屈託のない笑顔を浮かべている。

「わあ…二人とも大きくなりましたね〜」

「だろうだろう？最近以前にも増して可愛さが増してね。これは将来とんでもない男前と美人に成長すると確信しているんだ！この二人の整っていて、そして早くも凛々しきを見せる顔立ち！この前も二人の運動会を見に行つたがね。二人ともかけつこで一位になつたんだよ！いやいや、将来はスポーツ選手も目指せるかな。オリンピックも夢じゃないだろう。あと、父の日と言うものに、僕の似顔絵を描いてくれたんだ。いやあ…絵心もある！下手をすればデザイナーにも…」

1を聞かれて10を…いや、100を答えるかの如く、次から次へと自身の子供達の自慢…いや、親バカ振りを披露する。普段の彼からは想像も出来ないほどに目は輝き、饒舌に話も回る。

「あの…会長…」

「ん？なんだ…ヒツ!？」

親バカの話をして右から左に聞き流していたエリカの耳に、地獄からの呻き声の如くアインハルトが声を掛ける。それに応じて振り返ってみれば、

何と言うことか！目は虚ろに、顔は青ざめ、口は半開き、そして体はガタガタと震えていた。だが、そんな眼が死んだような彼女の身体から、得も知れぬ負の感情と共に、歪な威圧感がジワリと滲み出る。

一番近くにいたエリカはその気に当てられ、しめやかに失禁！……

「…ハラオウン提督は…既婚者だったのですか…?」

「そ、そ、そ、そ、そうだが…?」

「…そうですか…。」

エリカの肯定が引き金となり、これから阿鼻叫喚の地獄絵図が…と危惧していた。

だが、恐る恐る見た彼女の目は、怒りではなく、ただただ…エリカから見ても見惚れる程に美しくも憂を帯びた様に見えた。

「…こう言うときは…こう言うんですよね。」

「ん?」

「泣けるぜ…。」

Story my life

(この子はまた変な知識を…)

元より、何処かズレた感じの彼女ではあったが、どんどん変な方向へとシフトしていく。そんなアインハルトの将来を心配するエリカは、どこかオカンの様に見えた。

滞りなく管理局との連携を再確認する定時会合を終え、地上本部前に出てきた三人。途中からの案内と、今見送りに来てくれた銀髪ツインテールの局員に一礼して3人は各々帰路に着く。

「済まないが…私はこれから稽古の時間だな。本来ならば送ってやりたいのだが…。」

「いえ。会長もお疲れ様でした。」

「会長、また明日!」

「うむ、道草せぬようにな。」

そう言つて、彼女は黒塗りのリムジンに乗り込んで主要道路へと抜けていった。

「さあ! ヴィヴィオさん! 丁度夕暮れです! 夕日に向かって走りましょう!」

「うえっ!? ど、どうしたんですか突然!?! というかビルに隠れて夕日が見えませんか!?!」

「こう言うのはノリですノリ! さあいきま…。」

「ああああ…すすすすいません!」

恋と気付かぬままの失恋の憂さ晴らしに、いざこれからダッシュ! といったところで、幼い少女の声にアインハルトは呼び止められる。これから良いところなのに! と言う憤慨を、ポーカーフェイスで隠しながら振り返ると、自身より少し小さな少女が立っている。

「あの…私に何か?」

「え、え、え、えつと…その…。」

いじらしくも、恥ずかしがつてか、中々目的を言い出せないのか、視

線を逸らしたりもじもじしたりと、その間20秒。そして意を決したのか、一気に深呼吸し…

「あの！サイン下さい!!」

「…はい、サイン…ですか?」

「その…ダメ、ですか?」

「い、いえ！私ので宜しければ!」

彼女が差し出す使い古したようなメモ帳に、サインペンで自身の名と…

「そういえば…貴女の名前は?」

「あ！はい！フーカ、と言います!」

ミッドチルダにしては珍しい名前だ。もしかしたら父母が八神司令や高町教導官と同じ世界出身なのだろうか?

そんなことを考えながらも、サインを記して完成する。

「これで良いですか?」

「はい！ありがとうございます!!これ、ワシの宝物にします!!」

「そんな大袈裟な…」

アインハルトの最後の言葉を聞くか否かで走り出すフーカという少女。向かう先には彼女と同じ年くらいの銀髪の少女がにこやかに待っており、茶色いポニーテールを揺らしながら駆け寄る。そんな彼女とアインハルトは目が合った。向こうは育ちが良いのか、ペコリとお辞儀。アインハルトも返してお辞儀すると、二人連れ立って、帰宅ラッシュと共に夕日が照らすクラナガンの喧騒へと消えていった。

「アインハルトさん…サインを強請られるくらいに名が売れてるんですね?」

終始見ていたヴィヴィオは悪戯娘っぽく笑いながらアインハルトに声を掛ける。

「名が売れたようなことはしてないんですけど…。」

「またまた…!街を救う英雄ヒーローでしょ?」

「いえ…実名と顔出しはしていないはずですけど?」

「え?」

「え」

自身の正体を知ってか、サインを強請った謎の少女に疑問を残しながらも、今日の一日は夜を迎えるのだった。

## ミッドチルダの患者（クランケ）

昼下がりの喫茶店。

小さくもなく、しかしだからといって大きくもなく。クラナガンのメインストリートに店を構える、何処にでも有り触れているはずの喫茶店。

以前にとある教会騎士が大暴れして半壊となったとは思えないほどに小綺麗で、それが理由で一度遠のいた客足も、ほぼ元通りとなつてきている。

「…それで、相談、と言うのは？」

2人用に設けられた窓際の席で、碧銀の髪をツインテールに纏めた少女と、茶髪のポニーテールの少女が向かい合つて座る。双方、面持ちには険しく、真剣その物である。緊張の糸が張られているのか、配られたお冷やの氷が、カランと音を立てる事すら煩いと感じるほどだ。

前回の出会いから一月。ぼったり出でくわ会した2人…フーカとアインハルト。

お久しぶりですね、そう挨拶するアインハルトと、見るからに元気のないフーカ。そんな彼女を見かねて、どうしたのか、尋ねたところ、ややあつた後、相談があるのだという。立ち話も何なので、連れ立つて喫茶店へと入つたのだ。

「今回、ワシがストラトスさんに相談したいのは…」

「ちよつと待つて下さい。」

フーカの切り出しに、相對するアインハルトは待つたを掛ける。文字通り出鼻を挫かれた形となつたフーカは、眼を丸くした。

「一応、知らない仲ではないので、もつとフランクにいきましょう。私のことは名前で、若しくは『ハルにゃん』とでも呼んで下さい。」

「は、ハルにゃん…ですか？」

「はい。」

誰がそんなニツクネームを考え付いたのか。なぜか奥の席で、ニコニコとこちらを見つめる黒髪ツインテールのジャージ姿の女の人がフーカの目に留まつたが、気にしないでおこう。…しかし、なぜパン



の耳を大量に皿に盛って食べているのか謎だが。

「で、では間をとってハルさん…。」

「お、呼んだかい?」

「先生は呼んでません。」

「なんだよ、残念だねえ。」

何処から湧いて出て来たのかわからないが、真壁氏をぞんざいに扱うアインハルト。すごすごと引き下がる彼を見送りながら、フーカは再び話を切り出した。

「実は、リンネのことなんですが…」

「リンネさん…と言いますと?」

「えっと、この前ワシと一緒にいた子なんじゃけど…。」

「ああ…」

確かにあの時、彼女と一緒に居た子が居たな、とアインハルトは思い出す。

…何となく、自身と同じ匂いがするが。

「実は、最近少し余所余所しく感じるんです。」

「余所余所しい、とは?」

「実はワシらは孤児院の出なんです。小さい頃…今も小さいですけど…。って誰がチビじゃあ!?!」

何か1人でボケ始めて、1人でキレ始めた。

大丈夫だろうか?この子は…。

「こほん。まあ、ワシとリンネは言わば幼馴染みなんです。預けられたときから一緒に、あいつが里親に貰われていつてからも、たまに出会ったり遊んだりはしりました。」

それがある日、急に素っ気なくなつたのだ、という。メールも、

『そうなんだ。』

『へえ。』

等と短く簡素な返事しかない。

それが数日そこらで済むならば良いが、1週間、2週間と続くならば、それに伴って如何したものかと心配になつてくる物だ。そしてここ最近は返事がない。既読マークは入っているのだが、返事が一向に

ないという。

「はっ!?これが所謂巷でまことしやかに囁かれる『既読スルー』と言う奴じやろうか!？」

「落ち着いて下さいフーカさん。一番近い貴女が取り乱しては、見える物も見えなくなりますよ?。」

「う……た、確かにそれもそうじゃが……」

「家には、しつかり帰宅されているのですか?その……家出とか。」

「家にはちゃんと帰っておるようです。でもかなり遅かったんです。それでも心配で家の前で待ってたこともあるんですが……」

その時、目も合わせず、

『何か用?』

ただそれだけ。何だか様子が違って心配だから、そう言うが、

『そう、でも私は問題ないから。それじゃ。』

それだけ言い、返事も聞かずに邸宅に入ってしまったのだ。

「……あからさまに今までのリンネと様子が違つとりました。……なにかあつたんじやろかと、ワシは心配で……。」

「……なる程。」

「そういえば……右手に包帯を巻いておつたんじやが、何か関係が……?。」

確かに聞いたところの態度は、出会った時の雰囲気と真逆だ。あの時は表情も柔らかく、そんな突つ慥貪な態度をとるとも到底かんがえられない。何かあつた、と言うのは間違いなさそうである。

「……解りました。リンネさん、彼女の変化について、不肖アインハルト・ストラトス。及ばずながら助力させて頂きます。」

「え、ええんですか?。」

「頼られて、嫌な気をするほど、私は余裕がないわけではありませんよ?私達で、リンネさんを元の元気な姿に戻しましょう!。」

「はい!ハルさんが居て下さるなら百人力です!よし!まっこれよりンネー!。」

「おーおー、若いって良いねえ。だが、このハルさんが協力するからには、大船に乗ったつもりで……」

「先生、引っ込んでいて下さい。」

「……はい。」

再び湧いて出た彼に、静かに、そして冷ややかな視線と言葉で凄まじくさせる彼女は、フーカにとつて頼もしいと同時に、おそろしくもあった。

「ケーキセットとシュークリームセット、お待たせしました！」

「ありがとうございます、ヴィヴィオさん。」

「いえいえ。フーカさんも、ゆつくりして下さいね？ママのシュークリームは絶品ですから。なんせ、おばあちゃん桃子さんの受け売りなので！」

「では、その娘であるヴィヴィオさんも、その味を受け継いで、超えられるようにならないといけませんね？」

「あ、アインハルトさん。ハードル高いですよ。」

「ヴィヴィオさん、子は親を超えるものですよ？」

「それはそうかも知れないですけど…。」

「まずは美味しい食パンを焼くところからかも知れませんか？チャンピオンがそれを所望しておられるようですし。」

「なっ!?ウチは希望はしとらんよ!?美味しいパンの耳があればええんやから！」

「そのパンの耳は、元々何から切り落としたものですか？」

「そりゃあ食パンで……ありゃ？」

「そう言うことです。」

巡り巡って、食パンと言う物は良い意味で罪作りな食べ物であった。

## その日の夜

とある路地裏で鈍い音と共に、ドサリと何かが倒れ伏す音が響いた。

倒れ伏したのは、屈強な男。その背丈や肉付きから、二十代半ばと言ったところで、鍛えているのか筋肉が隆々としていた。

だがそんな男を打ち負かす相手というのは、どこまで鍛えた男なの

か？

しかし、その相手は普通ではなかった。

「て、テメエ……」

息も絶え絶え、そして消え入りそうな声で男は言う。目の前には白。全身の殆どを白のドレスにも似た衣装に身を包み、そして長い銀の髪。そして異型とも取れる顔につけたバイザー。見たところ、10代後半の女性と見受けられる。

「……私の前で不届きな業を働くからです。我が暗黒ダークネス・アーツ拳法の前に貴公の拳など、有象無象の一つに過ぎません。」

「ほ、本当に女か？」

「無論。しかし、男であれ女であれ、咎人には断罪せしめるのが我が宿命。故に、貴公には咎を償う義務を。」

「ひいつ!!」

男にとつてはただひったくりをしたただけだった。勿論それは犯罪なのだが、警備組織の代わりに追い掛けてきたのは、人外染みた脚力で追い掛け、同じく腕力で自身を薙ぎ払う女性。

「怖がる必要はありません。人は罪を重ねます。それが人としての枠組みの中で、断罪されるか否か……。貴方は、彼女のパンドラの箱を強奪するという禁忌を犯しました。それは人の枠組みでは処断されるべきこと。」

「……人のカバンを開けてはいけないものみたいに言わないで下さい。」

ひったくり被害の、同じく銀髪ツインテールの女性は、自身のカバンを禁忌扱いされたことに、微妙に表情を引き攣らせる。

「しかしそれを開けてしまった愚者と同じく、この男はやってはいけないことに手を出してしまったのです。衝動に敗北した。それは心の弱さ。それは罪！そしてそれは人の心の闇!!我が右手に疼く暗黒の拳が、闇を以て闇を制せと囁くのです。」

よく分からないが、右手に包帯を巻き巻きしているのが目に入る。だが、先程問題なく拳を振るってきたので、怪我をして当たるわけではないらしい。

「さあー闇にのまれなさいー!」

瞬間、魔力の解放。だからといって闇がどうのこうのなるわけでもなく、身体能力を高めただけだ。

「くっ……まだ我が力では、闇の眷属たり得ない……！それだけに闇を……扱いきれないと……!?」

何も起こらないのは、彼女の魔力資質もあるのだろうが、だからといって悔やむのはいかな物か。右手を押さえ、まさに断腸の思いと言わんばかりに顔をしかめた……様に見える。

「ならば、我が右手を触媒に、闇の力を解放します……さあ！我が右手に宿りし暗黒龍……！今その力を……」

「あの。」

「なんですか？今、邪王炎殺黒龍、その召喚の儀式を執り行っています。邪魔をすれば、貴女も龍によってその身を屍に……」

「あの人、逃げてますよ？」

見れば、ひったくりの男は、脚がもつれんばかりの走り、必死に路地を走り抜けていく。その距離はかなり開いているが、

「逃がしませんよ。」

銀髪の女性の脚力を以てすれば、追い付くのは容易い。しかし、その前に……

「狙い撃ちますも」

構えたのは、黒とライトグリーンで彩られた狙撃銃にも似たデバイス。ス。

ズドン！とそのバレルから撃ち出された魔力の弾丸。

それは今駆け出さんとする彼女の真横を通り過ぎ

路地を銀の軌跡を残し

男に迫り

その頭を撃ち抜いた。

非殺傷であるために死ぬことはないが、気絶させるには問題ない。

「目標達成、想定内の結果……いえ、貴女の乱入は想定外でしたが。」

「……どういう意味ですか？」

「元々私は、おとり捜査をしていました。連続ひったくり犯を現行犯で捕まえるための……まさかフリーの方も追い掛けるとは思いません」

ませんでした。」

狙撃銃タイプのデバイスを格納し、保安課に連絡を取る。

「隊長？こちらアランソン。目標確保。…現地で民間協力の方が捕縛に助力してくれまして。…はい、格闘技をやっているのか、かなりの力を。…はい、そうですね。引き留めて…あ。」

隊長と呼んだ人物が、協力感謝を直接述べたいので、引き留めておくように指示してきたが、そうしようと声を出そうとした時にはすでに彼女の姿は無く、路地には銀髪ツインテールの少女…シエル・アランソンだけであった。

「すみません隊長。すでに立ち去られてました。…はい、かなりの実力者です。本人曰く、召喚儀式魔法を扱えるそうで、何でも龍を召喚すると。…はい、もしかしたら、アルザスの一族に由来する方かも知れませんね。…はい、ではこれより帰投します。」

今回の件で、自然保護隊に所属する少女に、ちよつとした聴取が入ったのは別の話だ。

「まだ…まだ足りない。もっと闇の力を高めなければ…私は護れない…！」

包帯を巻いた右手を見つめ、ぎゅつと硬く握り込む。先程の10代後半の姿は無く、10代前半の姿となった少女…リンネは、自身の力に悔やみながら、夜の街に消えていった。

リンネ・ベルリネッタ

ちよつと早い中二病

## ミッドチルダの暗黒英雄（ダークヒーロー）

リンネ・ベルリネッタの朝は早い。

ベルリネッタ・ブランドの社長の邸宅だけにその敷居は広く、それ故に使用人も数人雇われているが、彼女らの起床時間とそう変わらない時間帯に目を覚ます。

「おはようございます、リンネお嬢様。」

「おはよう、いつも通り、今朝も忌々しき日輪の昇天を何時もの場所で見えてくるねこの邪眼に焼き付けてくる。」

「お気をつけてお嬢様。」

「うむ。」

…何やらおかしい朝の挨拶ではあるが、至つてこの家では平常運転である。

「誉れ高き先々代の邪眼皇帝、今日も我が覇道を貫いてこよう。」

階段の踊り場の壁に掛けてある、養祖父の巨大な肖像画にそう言うと、自身の両親の会社が手掛けるジャージに身を包み、未だ薄暗さと朝霧の残るクラナガンへと走り出す。

「ふつ…  
今朝も中々に冷気が我が身を刺すものよ。  
冬が近づいてきている証拠かも  
終焉の時は近いな。」

いくらジャージを着込めど、寒さは完全にシャツトアウトできないもので、リンネは季節の移り変わりを肌で噛み締めながら、何時ものランニングコースを駆け抜けていく。

このコースを走るようになって早1年。最初の頃と比べてかなりの距離に伸びたもので、その中を走ること朝特有の街や人の風景を楽しむのがリンネの楽しみであり、朝日もその一つだ。

…そんな中で、リンネにとって出会いたいが出会いたくない少女とばったり出会す。

「リンネ…」

フーカ・レヴェントン。自身の幼馴染みにして、孤児院時代、自身を何時も守っていてくれた少女だ。

バイトのシフト入りの時間なのか、着替えの入っているであろう

バッグを手にはしている。

「フーちゃ……んんっ！何か用？」

思わず笑顔で返しそうになるが、いかんいかん、と表情を切り替え、何時もの冷めた目で返す。

「いや……その、おはよう？」

「……おはよう。……要件はそれだけ？」

「そ、そうじゃけど……その……前から思っていたんじやが、もう少し話はできんのか？」

「……………」

「その……何となく、最近余所余所しいから、如何しても気になるんじや。」

「別に。ベルリネッタの家での習い事が多いから、余りそう言ったことに気が回りにくいだけ。」

「そうか……」

ベルリネッタへの養子に出たことで、今まで余り大きく感じなかった差が、ここに来て目に見えてフーカの目の前に、まるで壁のように聳え立っているように見えた。

自身の友人であるリンネが、何処か遠く感じてしまうだけに、フーカは少し寂しく感じてしまう。

（あああああっ!!フーちゃん!!フーちゃああああん!!フーちゃんにそんな表情させてしまうなんて!そんなつもりはないのに!でもでも!そんな捨てられた子猫のような顔をするフーちゃんも、すてき☆）

内心、リンネはこんなことを考えていたりするのだが、表面に全く出ないのは、ポーカーフェイスの極みといったところだろう。

「何か、何かワシに出来ることがあれば……頼って欲しいんじや。その……」

「……私には私、貴女には貴女しか出来ない事がある。それは悩みとして人と相談したとて、人は自信でその業カルマと殻ココロを打ち破らないといけない。それに今の私には天ジャツジからの裁ジメきを、暗ダーク黒拳クネス・アーツの名のもとに下すという使命がある。その天より墮ルシち出でた墮シ天使ファールの如き行為は、私に



しか出来ない事。」

「あの…リンネ…さん？」

「闇を以て闇を制す。それが私の……」

瞬間、

けたたましいまでの警笛が2人の耳につんざくように鳴り響く。フーカは勿論、一瞬とは言えどもリンネもその表情をしかめるほどに。それは明朝における目覚まし時計の音とは桁違いなほどに大きく、五月蠅いものだ。

「な、なんじゃ…？」

「これは…」

あまりの警笛の音量に、消え入りそうになる声。

フーカは無意識に耳を手で塞ぐが、それでも掌を通して耳にそれは鳴り響く。対してリンネは耳を塞ぐことなく、周囲を鋭い目つきで見回していく。まるで冷静に警笛の現況を探し当てるかのように…。

そしてそれを目に留めると、躊躇うことなく、彼女は走り出していた。

「お、おいーリンネー！」

フーカは思わず後を追うが、彼女の脚力には到底追いつけず、遅れて駆けていくのだった。

ミッドチルダ中央銀行

1年前、強盗が押し寄せ、一人の女性によって犯人が制圧された場所。

中央銀行とあってその合計的な預金額は次元世界トップクラス。分店などで集中しないようにはしているが、それでもここに金銭が集うのは必然だ。

そして、それを狙う輩も勿論いるわけであり…

「ちっ…しくじったか。」

防犯装置の音がけたたましく鳴りひびく中、覆面を被った強盗の一人は舌打ちする。下調べをある程度していたのだが、巧妙に隠されていた警報装置に引つ掛かってしまった。

「こうなった以上仕方ねえ。早いとこ金庫の扉を爆破して、ぶんどれるだけぶんどって引き上げるつきやねえ。おい、爆弾はどうだ？」

「へへっ、問題ねえよ。この特殊合金も吹き飛ばすコイツなら、こんな扉の一つや二つ消し飛ばせるぜ。」

「中のブツまで吹き飛ばすなよ？」

「解ってるって！」

コイツらが言う爆弾。それは勿論質量兵器を指すことになる。いざという時に牽制と制圧を出来るようにマシンガンも同時購入。セット割引で10%オフ。決して安い買い物ではなかったが、手に入る見返りも大きいので、結果としてもうけが大幅に上回るのだ。

全く…密輸入は最高だぜ。

「ん？センサーに魔力反応？」

「もう局が来たのか？それにはまだ早くねえか？」

銀行周辺に予め仕掛けておいた魔力センサーに引つかかり。だが、管理局が来るまでの予想時間を立てるのも強盗の重要な下調べの一つ。最低でも五分は掛かると想定していたのだが…。

「近くに巡回中の奴でもいたか…なににせよ、質量兵器なら少しは時間を稼げる。それに相手は一人なら、押さえられるだろ。」

強盗団は5人、一人が爆弾を設置して、他の連中が時間稼ぎ。あわよくば、接近してくる反応を制圧して、全員で金庫に惜しいって金を奪い、そのうえで逃走できれば…。

「この反応の位置なら…もうすぐ目視出来るが…」

それと同時に、警報鳴り響く中で、カッーン…、カッーン…と、硬い靴底が床を鳴らす音が聞こえてくる。ゆっくり、ゆっくりと一歩ずつ。一人だけと解っているにも関わらず、その得体も知れない相手の恐怖に、強盗団はゴクリと固唾を飲み込む。

現れたのは  
銀

長い銀髪で10代後半を思わせるような体つきの女性。そして身に纏う銀のドレスにも似たバリアジャケット。目元を隠す無機質なバイザー。だがそのバイザー越しに、得も知れぬ威圧を孕んだ視線を、彼等を感じた。

「て、てめえーそれ以上寄るなよー!」

突き出すは、質量兵器のマシンガン。その1発1発の威力はともかく、装弾数と連射力は高いが為に、牽制にはもってこいだ。無論、弾が当たるならば、それはそれで構わない。

しかし彼女は、強盗団を一瞥すると躊躇いも何も無く、一歩、また一歩と、そのヒールを鳴らして近付いていく。

「さあ…」

透き通ったような声が、強盗団の耳に染み渡る。それは優しくも、それ故に感じる威圧感を孕んだもの。

「貴方達の罪を数えなさい。」

瞬間、

彼女が一瞬、ほんの一瞬ぶれたかと思えば、その姿は忽然と姿を消す。

幻術魔法かと、センサーを確認するも、反応はない。が、

「グワーツー!」

悲鳴に振り向けば、爆弾を仕掛けていた男が、その腕を握り潰されんばかりに件の少女に掴まれている。

「イヤー!!」

「グワーツー!」

ボキッ!と鈍い音が、この狭い空間に響いた。

肘をへし折ったのだ。

外側から自身の肘を打ち付けて。

「俺の腕え…!!」

「次は…。」

再び彼女の姿が消えると、1番遠くにいた強盗の頭を掴む。

「あぎ…!?!」

「堕ちなさい…!」

なぜかそこにあつた靴箱に、つかんだその頭を思いつきり打ち付ける。

ぐしやりと、嫌な音と共に飛び散る鮮血的な何か。

「ひっ?!許して…!お、俺が悪かった!だから!」

強盗の一人が、ニホンで有名な全身全霊の謝罪。人それを土下座という。

「私の中の邪気眼王魂ソウルが言うのです。」

「え…?」

「悪党、許すまじ!慈悲はない!」

土下座をしていた彼の腹に、彼女の剛脚が打ち込まれる。予期していない衝撃に、強盗は容易く吹き飛ばされ、背中から靴箱へ強かに背中を打ち付けて、意識を飛ばした。

「さて、次はどなたですか?」

瞬く間に3人をノックアウトした彼女に竦み上がり、二人は一步後退る。

だがリーチで言えば、強盗の方が上だ。それを再認識した彼等は、手に持つマシンガンを構える。

「死ねやああ!!」

激昂した声と共に、眩いまでのマズルフラッシュと火薬の爆発音が空間を支配する。

最早乱射に近い。

半狂乱で、

碌な狙いもつけず、

ただひたすらに。

体感的には長いようで、しかし実際時間にしては短いながらも、マガジン一本分を丸々撃ち尽くした。

「…へへー！これだけ撃ちやあ、あんな化け物でも…！」

「もうお終いですか？」

男達には、聞きたくもない声だった。

アレだけの弾を撃った。しかしそれらは既に背後にいた彼女に当たるわけもなく、全てが文字通り無駄弾に終わってしまったのである。

「では…再開しましょう…！」

一人の頭が掴み、脚を払って顔面から地に打ち付ける。再び、飛び散る赤い液体。それだけで既に、無力化できたものを、さらにヒールで後頭部を踏みつけて追い打ちを掛ける。

「あと一人…！」

「く、来るな！来るなあ！」

マガジンを取り替え、再び弾をばら撒かんとするが、彼女はそれを見逃すはずもない。

瞬時に間合いを詰めると

脇腹に挟り込むように左の剛拳を打ち込む。

(…が…！アバラの…6番と7番を…持っていていかれた…!?)

何かがへし折られる感覚を感じながら、男はその痛みに耐えられず、身体をくの字に曲げてしまう。

しかし、項垂れた視線、その先にあるはずのない、バイザー少女の顔。

「ふんっ！」

極限まで屈み込んで、脚に溜めた力を一気に解放する。

強靱な脚の筋肉からの、カモンカを思わせるような跳躍。

それに剛腕から放たれる拳を乗せて、顎を一気に撃ち抜く。

くの字のように屈んで、次は『っ』の字のように仰け反る強盗。その目は最早、2発の剛拳によって焦点が合わないほどにまでなっており、身体に与えられたそのダメージの大きさを物語るには容易い。

もはや制圧、と言う面では充分すぎる程なのだが、彼女はトコノン

容赦が無かった。

仰け反るとともに、覚束ない脚で後退る強盗。少し開いた間合いを詰める。拳を自身の前でブロックし、その間からしっかりと相手を見据える。リズムを取り、そして身体を左右に揺らしながら、一歩、また一歩と距離を詰めていく。

1 往復、2 往復とスウィーピングを重ねる毎に、彼女の身体を揺らす速度は徐々に加速していく。それはまさに旋風。振り子の如く、上半身を揺らし、加速を重ね、彼女の身体：いや、頭の軌道が目に見えて分かるほどにまで成る。その形はまさしく∞。加速に加速を重ねたそれは、残像が残るほどに。

そして、

神速の拳が、強盗の頬を捉えた。

「ぐおっ!」

何事かと、飛ばしかけていた意識を無理矢理覚醒させられ、目を見開く。だが、右からの一撃によるめいたその目の前に、彼女の右拳が既に迫っていた。

「がつ!」

今度は左側へ。

そう気付いたときには右側へ。

もはや、訳が分からない。左右に身体を振られ、そしてその度に頬にとんでもない痛みが走る。気を失うことさえ許されない。ラッシュに次ぐラッシュ。

…それがどれだけ続いただろう？

最早数えることを止めた強盗。その顔は最早覆面の上からでも分かるほどにまでパンパンに腫れ上がり、レフェリーが居たならば試合を止めているか、相手のコーチがタオルを投げ入れているだろう。しかし、この場にそんな人間は居ない、リング外の世界。

しかし…

「リンネー！やり過ぎじゃ！もう止める！」

自身の身体を抱き抱えるかのように後ろから羽交い締めされた。予期せぬ身体の束縛に、ラッシュのリズムが遅れてしまい、怒濤の連撃で無理矢理立たせていた強盗の身体は、糸が切れた操り人形のようにドサリと倒れ込んでしまった。

「……如何してここに？」

「それはこっちの台詞じゃ！銀行強盗が入り込んでいたと分かるや否や、管理局の人が来る前に突入して！」

「だからって、追いついてくる必要は無いでしょ？」

「そ、それはそうなんじゃが…ワシはリンネが心配なんじゃ…！」

(ぶほっ!?フーちゃんに心配!?ああ…僥倖…!なんという僥倖…!)

内心は鼻血が噴き出しかねないピンク色空間だが、やはりそこはポーカーフェイス。表情には微塵とも出さないバイザーの少女リンネ。

「こ、これは…この現場は…！」

リンネが脳内で悶絶していると、三人目の少女がこの悲惨な現場へと足を踏み入れた。

「は…ハルさん…？」

「貴女は…フーカさん？」

武装形態へと姿を変え、英雄スタイルのバイザーの着用をしたアインハルト。どうやら特務として管理局よりも一足早く、この現場に辿り着いたようだ。

「この状況…説明して頂いても？」

「ああ…それは…。」

「…私はこれで失礼します。」

フーカの羽交い締めが解かれたとき、リンネはヒールを鳴らして出口へと向かう。最早やるべき事は終わった。ならば自身がここにいる理由もないだろう。

「待って下さい。この状況で現場に居た貴女には、事情聴取を…」

「私が、強盗を制圧しました。…以上です。」

「お、おい…！」

「……………」

言うだけ言つて、リンネはその脚力を解放して、一瞬にしてその場を後にした。最後に一瞬、ほんの一瞬、アインハルトをバイザー越しに睨んでいたのは気のせいだ。残されたのは、状況が今一飲み込めないアインハルト。そして、友人の豹変振りに啞然とするフーカ。

「何でじゃ…何で…お前がそこまで変わってしまったんじゃ…!」

自身の知る幼馴染みの姿はそこには無く、唯々その有り余る力を振るう暴君の如く。必要以上にダメージを与えられた強盗には逆に同情してしまう程だ。

「…とりあえずフーカさん、貴女だけでも、事情聴取をお願いしても良いですか?」

「あ…はい。勿論です…。」

友人の豹変が未だ受け入れきれないままに、奇しくも1年前と同じ施設で1つの事件が再び幕を下ろした。しかし同時にこれは、ミッドチルダの英雄<sup>ヒーロー</sup>。それと双璧を成す、人呼んで、『ミッドチルダの暗黒英雄<sup>ダークヒーロー</sup>』となる少女の物語。その幕開けであった。



## ☆コラボ小説・中二病でも玩具にしたい！その壺！

「そういえば知っていますか？」

「ん？何が？」

「今日も今日とて喫茶翠屋クラナガン支店。四人用の席で、一人の少年と2人の少女が向かい合ってお茶会を開いていた。」

「最近クラナガンで噂になっている女の子ですわ。」

「ん、聞いたこと有るような無いような。」

「ウチもあんまりやね。あ！ヴィヴィちゃん、シュークリーム追加で！」

「は〜い。」

「ジーク：あなた人の驕りだからって遠慮なさ過ぎですわ。」

「え？むしろ奢りやから違うの？」

「親しき仲にも何とやら、と言うものです。遠慮がないも考えようですわ。」

「え〜？別に良いんじゃない？奢りなんだし…。なあジーク。」

「せやろ？チヒロもそう思うやろ？」

隣り合って座る何処かの高校の制服を着た少年―篠崎チヒロと、黒髪ツインテールジャージ少女―ジークリンデ・エレミア―は、まるで仲の良い兄妹のように顔を見合わせる。

「お待たせしました、シュークリームです。」

「ありがとなヴィヴィちゃん。」

「いえいえ、チャンピオンもごゆっくり。」

ペコリとお辞儀して次のオーダーを取りに行く、店の看板娘にこやかな視線を向けるのはジークだけではない。

「やはり天使か…！」

「む…！ヴィヴィちゃんが天使なら、ウチは女神―」

「いや悪魔か魔王だろ。色的に。」

「ムッキー!!」

「いてっ!!おい馬鹿止めろ！足の小指を踵でぐりぐりするな！」

涙目になりながらも、運ばれてきたシュークリームにパクつくジーク

ク。

「まあ奢り云々は…奢る本人が遠慮するなど言ってるわけですし、私もそうすると致しましょう。」

「は？」

「ヴィヴィ。私に数量限定スペシャルイチゴのショートケーキを1つ。あとお土産用に同じ物を2つお願いしますわ。」

「はい。」

「ちよつと待て。誰の奢りって…？」

「それは勿論チヒロ、貴方ですわ。」

「……………」

チヒロは時間が止まったかのようにフリーズする。

その間も、オーダーをとったヴィヴィオがなのはにそれを伝え、着々と飲食料金が加算されていく。

「そして時は動き出す……！」

「はっ……………ちよ…俺はお前の奢りだと思ってたんだぞ？」

「あら、ごめんなさいチヒロ。私、カードしか持ち歩きませんの。ここはキャッシュしか支払いできませんから、現金しか持ち歩かない貴方以外に選択肢はありませんの。…それに、流石にジークにたかるなんて、男としてどうかと思うことは致しませんでしよう？」

「ぐ、ぐぬぬ……！」

どう見ても確信犯。ゲスい笑みを浮かべてこちらを見つめるヴィクター。

「あれ？どーしたんチヒロ。目えから赤い涙流して…」

そして何も知らずに、もむもむと頬を膨らませてシュークリームを頬張るジークに、チヒロの中でぷつりと何かが切れる。

そして、DSAAチャンピオンの目にも留まらぬ速さで、彼女の頬張るシュークリームを奪い取り、一瞬で平らげた。

「あー!!!ウチのシュークリームウ!!」

「うるへーうるへー!!」

「あらあらうふふ。」

目の前で揉める2人を、してやったりと言わんばかりに健やかな笑

みを浮かべて見つめるヴィクターは、端から見れば計画通りという、黒い笑みにも見えなくもない。

「と、所で話は逸れたけど、噂になっっている女の子ってなんだよ?」

「…急に戻しますわね…。まあ噂という物が一人歩きしているようにも聞こえるのですが。」

曰く

あらゆる反社会的な奴らにカチコミをかけては壊滅的なダメージを与えている人物が居るといふ。しかもその噂というのが、

やれハート様並に巨大且つデンドロビウム級の女だった。

だの、

やれその拳一つで未開の次元世界を踏破した

だの、

やれ厨二病真っ盛り

だの…

どれもこれもが信憑性に乏しいものだけに、ヴィクターの中でも十中八九信じていないに等しい。

「確かにそりや信じろというのが無理ってもんだな。」

「でしょう?…まあ実際にそんな人間が居たら逆に見てみたい物ですけど。」

「そうだな。特に一番最初とか、見てみたいよな。どんな拳も、腹の脂肪で緩和してしまうってか?」

「ウチは二番目やねえ。どんな戦い方するんやろ。」

「まあアレだ。どんな噂が立っていようとなかろうと、俺にとっての価値観の判断材料は2つに1つだな。」

「あら、奇遇ですわね。私もそうでしたよ。」

「二弄んで、楽しい玩具になるかどうか。」ですわ。」

「実際、噂が三番目の厨二病真っ盛りだったら、それはそれは楽しい事になりそうだよな。」

「うふふ…、確かに。」

「なあなあ、厨二病って何なん?」

こうして…『噂の少女玩具化計画』と言う、なんとも末恐ろしいも





「いい加減離れてくれね?」

「失礼しました。…何となく闇の匂いがしましたので、それを補給しようとする。」

「闇の匂いってなんだよ…。」

ここでふと思う。上手くすれば、この厨二病患者、とつてもとつても面白い方向に調きよ…もとい、向かわせることが出来るんじゃないか、と。そしてゆくゆくは新しい玩具に…。

そうと決まれば、

「フツ…我が闇の匂いダーク・スマイルを感じるとは、中々の使い手と見える。」

話を一旦合わせるに限る。らしく見せるために、片眼を手の平で覆い、いかにも高貴であるかのように振る舞い、口もつり上げて悪者っぽく演じてみた。

すると…

「やはり…! 貴方も闇の使い手…! 私が感じた匂いに間違いは無かった!」

だから匂いって何だよ。というか、年頃の女の子が匂い匂い連呼するんじゃないやありません。

とまあそんな感じで警戒心を解かせることに成功したチヒロは、その心中でニヤリと笑みを浮かべた。

(ゴイツ W W チョれえ W W)

自身と共感できる人物という物に飢えていたのか、濁っていた眼が濁りを増したようにみえた。

「フツ…だがその齡では我の領域には未だ及ばぬな。まだまだ青い。」  
「なっ…! 確かに私は…闇の使い手となって日は浅いですが、力その物は負ける気はしません…!」

「だが力だけだ。1つのことに特化していて満足するようでは、この覇道を歩むことは夢のまた夢。諦めることが懸命よ。ククク…」

しかし話を合わせる内に、かつて自身が患った病気が再びその息吹を吹き返そうとは…。次から次へと厨二病患者らしい台詞が飛び出してくる。

「ぐ…ぬぬ…!」

そしてその言葉を真に受けて、この上ない屈辱を味わったかのよう  
に、恨みつたらしくチヒロを睨みつける。だが背はチヒロの方が頭1  
つ大きいために、上目遣いに睨みつけているので、小動物の威嚇程度  
にしかならない。

「そう睨むな。別に俺とて、未だ力を覚醒していない蓄を握り潰そう  
などと、そこまで鬼畜ではない。」

「へ?」

どの口が鬼畜ではないというのか。散々ジークをヴィクターと共  
に弄り倒して来た彼がそう言ったところで、周囲の人間からは失笑を  
買うだろう。

「我が元へ来るならば、その力をより一層高みへと轟かせることが出  
来る。しかしそのままでは力を目覚めさせぬまま…。さあ、選べ。力  
を求むるかどうかを。」

勿論、返ってくる答えは決まっているだろう。ここまで落として、  
そして優しく手を差し伸べるならば…

「…わかり、ました。…我が力の為…貴方の軍門に下りましょう。」

いとも容易く落ちる。

(よし!玩具ゲッツ!!)

とまあ内心彼はこんなことを考えているわけだが、件の少女は知る  
由も無いわけである。

「そうと決まれば…貴様に紹介するべき同胞がいる。」

「同胞…ですか?」

「そうだ。志を同じくする者で、俺と浅からぬ因縁もある奴だ。」

そう言うだけ言つて携帯端末を操作して、登録電話番号の一覧から  
目的の人物を見つけ出すと、迷うことなく通話へ移す。数コール後、  
目的の人物が応じた。

『あらチヒロ。ごきげんよう。』

「おうヴィクター。」

先程の飲食代の恨みは何処へやら。いつも通りのフレンドリーと  
も呼べる口調で彼は相手に応じる。

「実は…」

かくかくしかじか

かくかくうまうま

『それは私としても興味深いですわね。だったら丁度良いですわ。今から言う場所に2人出来ていただけますかしら？多分そこからそう遠くないところにありますわ。』

「OKだ。じゃあ場所は…」

最早2人は止められない。

そして何も知らない少女…リンネ・ベルリネッタ。

「では、向かうとしようか。」

「どこへ、ですか？」

「決まっているだろう？」

新たなフロンティアへだよ。

そう言ったチヒロの顔は、第三者から見ればどこまでも黒く見え  
た。